
ウルトラマン超闘士激伝・完結編

tyo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマン超闘士激伝・完結編

【Nコード】

N3127M

【作者名】

tyo

【あらすじ】

かつてボンボンで連載された「ウルトラマン超闘士激伝」の完結編を考えました。一応、鎧伝という続編はあるのですが・・・つまり、パラレルワールド的な最終シリーズです。

近年になって登場したキャラクターや設定も織り込んでいます。よろしければ、読んでみてください。

プロローグ 激闘、復活！

永きにわたりあらゆる悪から宇宙の平和を守ってきた伝説の英雄
ウルトラマン。

中でも、卓越した戦闘能力に加え、強固な蒼き鎧に身を包む英雄
ファイター
闘士。

そして、正義の光 金色の光を放ち最大の力を持つ最強の英雄こそが

ウルトラマン超闘士激伝、完結編。

「でいやあああつ！」

蒼き鎧に身を包む英雄のひとりが、その力をもって新たな敵に挑んでいた。

「シャオオオオツ！」

巨大な魚。口から牙を何十本も生やし、全身を硬い鱗で包んでいる。海の中で、非常に速い動きを見せる。

「メタリウム・ソード！」

英雄 しゅごファイター 守護闘士ウルトラマンエースである。金色に輝く流線型の鎧 メタルブレスト 装鉄鋼の内の、腕に装備されたリングを一本の剣に変身させ、猛進してくる巨大魚に向けて振り下ろした。

「じゃあがおお……」

魚は、顔から尻尾までを真つ二つにして絶命した。その中心 おそらく胃であった部分から、一つの玉が浮き上がる。

「ふう、手間取らせやがって」

その玉を拾い、エースは海岸へと上がった。

そこに、一人の子供が走って来る。真つ白な髪の毛に覆われた、宇

宙人の子供であつた。この白い髪のせいで、一瞬子供見えない風貌ではあるが、それもそのはず、ミラクル星人の子供である。

「おにいちゃん、大丈夫だった〜?」

「おう、ちゃんと取り返してやったぜ!」

そう言つてエースは、子供に光る玉　魔法のビー玉を渡した。

「ありがとう!」

「おうよ、困つたことがあつたらいつでもよびな!」

エースは得意満面の表情だつた。その時、後ろから一人の、いや一体の、金色に輝くボディを持った男が歩いてきた。

「な〜にやつてんだエース!　ただのデカイ魚相手に何分かつてるんだよ!」

「うるっせーな、エースキラー・サディスト!」

「サディ……なんだとこらあ!」

エースともう一人の男　エースキラーSとの喧嘩が始まつた。ミラクル星人の少年は、呆然としてしまつている。

「大体デメエ、警備の任務を忘れて遊び歩きやがつてコラア!」

エースキラーがエースを殴りながら言う。

「いいじゃねえかよ暇なんだからよオ!」

エースも、負けじとキックで反撃しつつ騒ぐ。

「ここらの責任者はオメーじゃねーかよ!　きちんと仕事しろオ!」

この星は、地球。長年にわたつて、ウルトラ戦士に守られている青い星である。

数日前、エンペラ海軍参謀、闘士バルキー星人が、地球を襲つと予告してきた。特に戦略上意味のない場所ではあるが、少しでも可能性があるならば守りにつかなければならない。

そこで、守護闘士エースらが派遣されてきたのだつた。また、地球でウルトラ戦士は3分しか活動できないが、ウルトラの星で作られたウルトラコンバーターを身につける（装鉄鋼に内蔵）事によつて、

半永久的に活動が可能となるのである。

「しかしよオ、来ねえなあ、バルキー星人」

喧嘩が終わってしばらくして、エースがボソリとつぶやいた。

「何しろ、嘘かも知れねえからなあ。俺達がここにいれば、その分別の星の戦力が殺がれるわけだからなあ」

エースキラーも、あくびをするような表情を浮かべて、言った。

「さてと、そろそろ基地に戻ろうぜ、じゃあな！」

ウルトラ戦士用の宇宙基地に帰るのだ。エースは跳ね飛ぶように元気な顔を見せ、ミラクル星人の少年に別れを告げた。

あらすじ「ウルトラマン超闘士激伝」

超闘士シリーズを知らないもしくは、ボンボン単行本未収録分以降を知らない人のために解説。

ウルトラマン超闘士激伝とは、ウルトラマンや怪獣らが、聖闘士星矢のような鎧を着て、ドラゴンボールのキャラのように光線を撃つたり激しい格闘戦をする、熱いストーリーです。

詳しいことはウィキペディアなどを見ればわかりますが、ここでもかいつまんで説明させていただきます。

第一部

銀河最強武道会において初の闘士となり、暴走したハイパーゼットン^①を倒したウルトラマンだが、ゼットンの陰には残酷で強靱なメフィラス大魔王が存在しており、宇宙を支配するために鋼魔四天王（バルタン、ダダ、ザラブ、ケムール）と共にウルトラの星に侵攻を開始。マン（ウルトラマン）は、他のウルトラ戦士や闘士セブンと共に闘い、平和を勝ち取る。

第二部

第二回銀河最強武道会において、ウルトラ戦士や怪獣の多くが闘士となり、熱い激戦を繰り広げるが、伝説の超闘士をいぶりだし潰すべく恐怖の怪僧マザロンが現れる。闘士ウルトラマンは、仲間になったメフィラス大魔王を守るため、全身が金色に輝く最強戦士、超闘士^②に変身。マザロンを破るが、自らも力に耐えきれず死亡。太陽神から、復活に三年かかると言われる。

その間、マザロンを操っていたヤプール軍団が宇宙全域に侵攻。ゼブンを中心に闘い、やがてはヤプールの本拠地の場所を知ったメフィラスとタロウは、仲間たちと共にヤプールと決戦。タロウが超闘士となり、平和を取り戻した。

第三部

第三回銀河最強武道会にて、ウルトラマンパスワードが参戦。その目的は、出場者の仮面騎士　宇宙の悪魔ゴードスを倒すことにある。太陽神の力で復活していた超闘士ウルトラマンやタロウも参戦するが、ゴードスの目的は戦士たちのエネルギーを使った海魔神コダラーと天魔神シリリーの復活にあった。復活した魔神はゴードスを殺し暴れまわるが、やがて究極魔神シーダへと融合。ウルトラ戦士らはそれに立ち向かい、ウルトラマンが超闘士のさらなる姿に変身（カラータイマーから三本の光が伸び、星のような形になった「デルタスター」が身に付いた姿）。

シーダを圧倒的な力で倒すのだった。

OVA

突然現れた彗星戦神^{すいせいせんじん}ツイフォンを倒すため、メフィラスが危険なパワー増幅装置を使用し、戦いの末死亡。地球の人々の声援を受けた超闘士ウルトラマンは、再びデルタスターを装着。ツイフォンを圧倒的な力で滅ぼした。

第四部

強大なエネルギーを蓄積できるEXキューブを使いメタルモンス軍団を作ったエンペラ星人軍団が、さまざまな星で暴れまわる。その目的は、ウルトラ三大秘宝である、ウルトラベル、ウルトラキー、ウルトラミラーを手に入れること。新入りの闘士ウルトラセブン21は、同じく新入りの闘士ウルトラマンネオスに勝ちたいという願いを敵の闘士ブラック司令と暗黒司祭ジェロニモンに利用すべく洗脳され、ウルトラ戦士に牙をむくが、ネオスがウルトラミラーで真実の姿を映し出させ覚醒。ウルトラベルをバルキー星人に奪われたものの、ブラック司令を倒すことには成功した。

ここで、マンガの連載は打ち切りで終了しました。後にガシャポンシリーズ超闘士鎧伝ちやうとうしがいでんにおいて結末は描かれています（ちなみに、さらに第5部もありましたが、それも打ち切りになっています。）が、詳しい話を知ることが不可能に近いだろうと考え、自分で書いてみることにしました。できるだけ頑張りますので、超闘士が好きな人、ウルトラマンが好きな人に、楽しんでほしいです。

用語集

闘士ファイター 卓越した戦闘能力を持つものが装鉄鋼を身につけた姿。鎧に仕込んだ武器等を使って攻撃したり、新必殺技を編み出す者もいる。

超闘士ちやうとうし 全身が金色に輝く伝説の最強戦士。3分以上力を使うとエネルギーに耐えきれず死んでしまうが、タロウのようにウルトラホーンが生えているものは、角にエネルギーを集中するのでそのようなことは無い。そのため、ウルトラマンは角の形をしたウルトラクラウンを装備して、そこにエネルギーを集中することで同様の効果を得る。

デルタスター 上記の通り。永遠の命とも言われる。

メタルモンス エンペラ星人軍団の使用する、怪獣型のロボット。

太陽神 かつてウルトラの星でつくられた人工太陽プラスマスパークに宿る大いなる意志。死んだ肉体を再生し魂を吹き込むことで死者をよみがえらせたり、前述のウルトラクラウンを作ったりできる。

ウルトラキー ウルトラの星の制御をつかさどる。ライフルのようにして、小惑星も軽く破壊できるエネルギーを放つことができる。

ウルトラベル 平和の象徴。闇をかき消す力がある。現在、エンペ
ラ星人の手の中に。

ウルトラミラー 真実を映し出す鏡。絶対的な盾にもなる。

海面の大戦

バルキー星人ら、エンペラ海軍は、地球の深海に姿を隠していた。巨大な海軍戦艦「サメクジラ」の中で、エンペラ星人からの指令を待っているのである。

「ったくう、退屈だぜえ」

戦艦の廊下で、バルキー星人から角を無くしたような、その部下が暇を持て余している。

「だよなあ、早く陸軍に動いて欲しいもんだ」

もう一人の部下が、肩を落とす。この数日間、殆ど活動をしていないからだ。せいぜいやることと言えば、近くの海底怪獣を殺すくらいの暇つぶし。

彼らの作戦は、ウルトラ戦士の守りの目を地球に向けさせ、闘士ザム星人ら陸軍にウルトラの星を襲わせると同時に自分らも地球を攻撃するというもの。他の星も守らなければならない状態で彼らにとつてかけがえのない星、地球を襲うことで、混乱と精神的ダメージを狙うのである。ただ、陸軍だけではウルトラの星全軍にはかなわない。そこで、大量のメタルモンス（怪獣型ロボット兵器）を生産する必要がある。その時間、彼らは暇になるのだ。ただ、期間が延びれば延びるだけ、ウルトラ戦士らに焦燥の念を抱かせたり、ガセであつたと安堵させ、今後の戦いを少しは有利にすることもできる。しかし、その間に焦燥の念を駆るのは、彼ら部下達いや、バルキー星人も同じであつたかもしれない。

「おい、聞いたか、そろそろだよ」

暇を持て余す二人の部下に、さらにもう一人の部下が駆け寄る。戦闘開始の予告と言う土産をつけて。

「なんだって、本当か」

「よおし、やってやるぜえ……」

バルキー星人の部下たちの顔が、残忍卑劣な表情を作っていた。

「大変だ～～！ ついに敵が攻めてきたぞ～～！」

地球の海を掻き分け立ち割り、メタルモンスとバルキー軍団が攻勢をかけてきた。笑いながら、地球人をもてあそぶように危機を告げる悪の拳兵達。

しかし、それが街まで届くことは無かった。なぜなら、彼らの前に、エースキラースが立ちふさがったからである。

「エース達がここにくるまで、まだす～～し時間がある。その間、俺と遊んでもらうぜ！」

海面に立った彼はそう言つて、彼の持っている盾と槍をドッキングさせ、一つのビーム・バズーカに変形させた。

「キラール・ファントムウ、発射あ！」

槍の先からエネルギーが収束され、一気に発射される。その一撃で、海獣ゲスラや深海怪獣ピーターの形をしたメタルモンスが粉々に砕け散る。さらにキラール・ファントムを横に薙ぐことで、端から吹き飛んでいくメタルモンス達。

「ば、バツカヤロウ！ サツサと攻撃しろ！」

バルキー兵士らが、接近戦で攻撃しようとエースキラールへと向かう。しかし、それも後の祭であつた。

「ぎえええ～～～～～～！」

「ウルトラマンエース参上！」

エースであつた。守護闘士ウルトラマンエースが駆けつけていたのであつた。バルキー兵士の1人を軽く殴り飛ばし、戦列に加わる。

「素早く終わらせようぜ！ とらああつ！」

何かを投げるような仕草から素早く腕をL字型に組んで、エネルギーを放出する。エースの必殺技、メタリウム光線である。

「うおぎゃあ～～～～～～～～！」

いとも簡単に倒れていくバルキー兵士たち。以前の、ウルトラベルを手に入れる戦いで、闘士バルキー星人によって多くの戦力が見捨

てられてしまったため、早くも劣勢になってしまっていたのである。

「チィ、役に立たん部下共め」

戦艦サメクジラが一番大きな椅子に座ってふんぞり返っている、闘士バルキー星人。

「あんなカンキリ頭と……うう、なんか金色の奴たつた二人に劣勢とは、バカ者めっ」

エースキラーに対する悪口が思いつかなかったらしい闘士バルキー星人。

「いかがいたしましたようか参謀閣下」

部下が進言する。すると、部下を見やってニヤリと笑う闘士バルキー星人。

「サン・ホワイト砲用意」

「さ、サン・ホワイト砲!？」

サン・ホワイト砲とは、透き通る純白という、この上なく美しい色をしたエネルギーを発射する巨大砲である。

戦艦サメクジラの最前の、のこぎりのような形状の部分にエネルギーを収束、発射する。

「美しい光……正義の白ツ、純粹なる白ツ。その中で苦しみ悶える弱者共……画になるぜツ」

サン・ホワイト砲にエネルギーが収束されていく。激しい爆炎の中、エースらは気づかない。

「エースキラーとか言ったな……あの金ピカヤロウツ!」

照準は、エースキラーに向いた。

「あいつの武器と同系統のこの兵器だっ! 差を知らしめてやるのにちょうどいいわ!」

「発射!」

爆音が轟き、空気が割れる。放たれた白いエネルギー波動は、空を

切って走り抜ける。

「な、何だあれはっ!？」

エースキラーが叫んだ。エースも同時に、それに気づく。

「え、エネルギー波……それもすげえ強力な!」

二人は闘いながら空を見上げていた。斜め上の上空に、白いエネルギーは駆け抜けていった。

「ど、どこ狙ってた……」

バルキー兵士が、呆然としていた。

「ど、どういうことだあアツ! 貴様、どこを狙っている!」

闘士バルキー星人が部下に怒鳴ると、部下は全く分からないそぶりで首を振る。

「い、いったいなんだ……?」机に手をつく闘士バルキー星人。

「!」

「待てよ、発射の瞬間……どこかいつもと違う振動があったような」
闘士バルキー星人がそれに気づいた時、部下の一人が重大な事実を告げる。

「大変です閣下! つ、角が折れています!」

「なあにい……!？」

部下の言った通り、戦艦サメクジラの角、つまりサン・ホワイト砲が、根元からぼっきり折れていたのであった。

「ど、どういうことだあツ! どういうことだあツ!」

「こういうことさ!」

その時突然、一筋の赤い閃光が戦艦内部へ流れ込んだ。その閃光は、外壁から、指令室内部の壁にまで穴をあけたようであった。火に包まれる戦艦内部。

「な、なんだ貴様は……ウルトラ戦士かつ!」

赤い炎をくぐって、1人の戦士が現れる。

その怒りに燃える戦士の名は、闘士ウルトラマンレオ。右肩に獅子をかたどる金色の装鉄鋼を身につける、赤き闘士であった。

「エイ、ヤアー—————ッ！」

レオキック。片足を赤熱化させた上、レオの高い身体能力で放つ強烈なジャンプキックである。

闘士バルキー星人はとっさに技をかわした。ジャンプで上へ飛び上がったのである。椅子は粉々に砕け散り、灰となった。

「ハッ！」

飛び上がった闘士バルキー星人に対し、レオは額のビーム・ランプから光線を発射する。レオクロス・ビームである。跳びあがって無防備な状態だった闘士バルキー星人の腹部に、それは直撃した。

「あつづう！」

バランスを崩しながらもうまく着地した闘士バルキー星人。レオを指さしてこう言う。

「フフン、他人とは思えないな……１人で侵入して手柄を横取りとは」

それに対し、レオは表情を崩さずに、言い放つ。

「なめるな……お前ら悪人と一緒にするな！」

握り拳をかざし、さらに叫ぶ。

「われらウルトラ戦士！ 平和を守るためであれば誰の手で行われようと、関係無いッ！」

その時、後ろから、バルキーの部下たちが襲いかかった。

「それに……俺は一人じゃない」

どっつ

「ぬおっ!？」

バルキーの部下が吹き飛ばされた。もう一人の戦士、闘士アストラによつて。レオと左右対称の、金色の装鉄鋼を着こんでいる。

「誰よりも頼りになる、弟がいるんだ」

「にいさんっ！ ザコは僕に任せて！ 闘士バルキー星人を！」

「……おうつ！」

戦え！ レオ兄弟対エンペラ海軍

「はぁあっ！」

戦艦サメクジラ内部指令室……アストラがその格闘能力を生かし、100人からなる雑魚を次々と倒していく。

「くそっ、あんな奴に俺たちがやられるはずが……」

「なめるなよっ！」

さらにアストラの両の手足が赤熱化する。

「アステカ・パワー！」

「あ、あいつ、こんな技を……やれー！ーっ！」

アストラを囲むバルキー星人の部下たちだが、その強力な打撃によって、ことごとく打ちのめされていった。

「だったら飛び道具だ！」

雑魚の一人が、ライフル銃を持ってアストラに向けた。

「そうはいくかつ！」

アストラの額にあるビーム・ランプから「エレクトロン・ビーム」

が放たれた。ライフルを持った雑魚にそれは当たると、敵の肉体は青白い色の光に包みこまれる。バチバチと音を鳴らし、それが止むと同時に活動を停止した。

「っ、つよい……」

「な、なかなかやるな、闘士ウルトラマンレオよ」

「お前は大事なことがないな」

「な、なにいつ！？」

同じころ、同じ場所で、もう一つの闘いがあった。ウルトラマンレオ対バルキー星人である。

戦いは、レオのペースだった。武道家として日々激しい修行をしているレオにとって、ずる賢さで戦略を立てて自分の思い通りに事を運ぼうとするバルキー星人は、およそ最も許せない悪の一つであり、

その怒りが驚くべき瞬発力を発揮して敵の動きを封じていたのであった。

「く、くぐぐぐ……」

なめるな、とさげぼうとしたバルキー星人の顔面に、レオ又ンチャクによる一撃が決まった。

「ぐふぁ……！」

「たあっ！」

よろめくバルキー星人の顎に、蹴り。腹にパンチ。パンチ。パンチ。パンチ。

「ぐ、ぐうう、ふっ！」

レオの身体能力は他のウルトラ戦士を大きく凌駕する。その格闘能力をまともに食らい、バルキー星人は完全に力を失いかけていた。

「とあああっ！」

バルキー星人は剣のような武器「バルキーリング」をとつさに振るった。その一撃はレオの頬を軽くかすり、一步引かせた。

「今だっ！」

その隙を見逃さなかったバルキー星人は、頭の五本角から光線を放った。

「ぐああああっ！」

レオにそれは命中し、ダメージを与えた。熱いような痛いような苦痛と、多少の焦げを同時に。

「クハハハハアッ！」

さらにバルキーリングによる追撃を放つ。レオは、それをレオ又ンチャクで迎えようとしたが、又ンチャクが突然、ぼつきりと折れた。

「なっ!?!」

レオが叫んだ瞬間、バルキーリングによる一撃がまともに頭に入った。鋭い斬撃を受け、レオの顔に一筋の筋が浮かぶ。

「ぐおおおおお……！」

「ハッハー……ッ！ 又ンチャクが壊れて驚いたか！ 俺の顔に打ったが運の尽き、俺の角の強度は装鉄鋼をも超えるのだっ！」

そして、その頭による頭突き。レオの顔面にさらなる一打が打ちこまれ、レオは真後ろの壁まで吹き飛んだ。

「く……っ」

「ハーハハハ、お前ら雑魚闘士では我らの足元にも及ばないということさ。さあ、死ねッ」

その瞬間、バルキー星人の後ろから、彼の部下たちが飛んできた。アストラに、吹き飛ばされたのである。

「邪魔をするなッ！」

バルキー星人が、後ろを向いた。バルキーリングが数度空を切り、光線が放たれると、彼の部下たちはバラバラになってその場を消えていった。

「役立たず共め」

「貴様……！」

レオの怒りが、再び燃える。バルキー星人が再び視点をレオに移した瞬間、レオの額から、雷撃のような形の赤い光が放たれた。

「レオクロス・ビーム！」

「うああああっ！」

光線はバルキー星人を後ろへ吹き飛ばし、バルキーリングを床に落とした。そして、レオは――

「エイ、ヤアーーーーーッ！」

レオキック。ウルトラマンレオの高い身体能力がなせる必殺技である。1000メートルの高い位置にまで跳び上がり、真っ赤に燃える足で敵を蹴る。

「ケエッ！」

バルキー星人は、それに対しタイミングを計るように、再び五本角光線を発した。レオキックを迎撃しようというのである。光線が空を切った。

「ハアーーーーーッ！」

すかさず、レオは体をひねった。そのひねりは大きく強い勢いがある

り、レオの肉体を回転させるに至る　きりもみキック。

別名・レオスピッキング。レオキックの状態から回転することによって、さらなる攻撃力を生む必殺技である。

「な、なんだとおおお……」

轟音が鳴り響き、バルキー星人の肉体は二つに分かれた。もともとその中心であつた胸には、巨大な穴が空いていた。

戦え！ レオ兄弟対エンペラ海軍（後書き）

申し訳ありません。この話は、最初の頃に書いていた筈だったので、なぜか消えており、その事実を最近になって知りました。今更ながら、UPさせていただきましたので、どうか。

今回レオ対バルキー星人にしたのは、ご存知の方も多いと思われるますが、バルキー星人がレオの没デザインから作られた、という事実からです。

それだけでなく、超闘士激伝では、レオの活躍が非常に少ないので、実に残念に思っていたので、今回ほぼ一対一で暴れていたいただきました。

全力の闘い

「何だデメエらは！」

「……」

「ゲゲエー！つ、闘士ウルトラマン！」

陸軍の闇闘士、アーストロンとサドラが、侵入してきたウルトラマン、そしてセブンを前に驚く。

「こいつらは、お前がやるほどの相手じゃない。俺に任せてくれ」
セブンがそう言った。ウルトラマンは、コクリとうなずき、広い通路を飛んで行った。

「ああつ、闘士ウルトラマンが！」

アーストロンが後ろを振り向いたとき、セブンの蹴りが思い切り背中に入った。

「どわあつ！」

前のめりに倒れるアーストロン。

「こ、こんのヤロオ！」

サドラがセブンに、その鉄状の手で殴りかかる。セブンは、軽くかわして敵の腹にパンチを入れた。

「ゴフツ！」

口から血を吐きだすサドラに、セブンはやや余裕の表情で、パンチを打ち込む。

「ぐ、ぐへっ、どわっ！」

「どうした闇闘士、こんなものか！？」

実際、守護闘士にとって闇闘士とは大した相手ではなかった。先の戦いで、空軍の闇闘士らを軽く倒している。しかし、それが一対二となると、少し厄介なことになる。

「な、なめんじゃねえぞこの野郎！俺達闇闘士の底力を見せてやるぜ！」

そう言っつて、アーストロンは力強く立ち上がり、口からマグマ光線

を吐きだす。

「おっと！」

セブンはそれを飛びのいてかわした。しかし、サドラと分断される格好になった。

「今だっ喰らえっセブンっ」

しゅばっ、と空気を切り裂く音がして、サドラの鋏がセブンに向かって放たれる。しかし、セブンはすでに飛びのいていたため、まったく届かなかった。

「……？」

「ニッ」

セブンがあきれた顔をした瞬間、サドラの腕が急に伸びた。そしてセブンの顔を挟み込み、持ち上げる。

「ハッハーハーッ、俺の腕は重層ベローズピンチと言ってなあ、伸縮自在なんだよオ！」

「うぐわぁ……は、外せない！」

「今だ、次は俺が行くぜ！」

アーストロンのマグマ光線が、セブンの腹部を捕らえる。

「う、ぐあああ！」

セブンは、苦しみながらも、装鉄鋼の背中に隠されている、剣を手にとった。

「！ おっと！」

サドラはそれに気づき、いち早くセブンを放して腕を元の長さに戻した。アーストロンは気づかず、疑問に思いながらも、落下するセブンの動きに合わせてマグマ光線を吐き続ける。

「このまま終わりだーハーッ！」

マグマ光線は際限なく放出され続ける。しかしセブンは、その光線の中で体勢を立て直し、背中のアーマーから武器を展開させた。

「エメリウム・キャノン！」

その砲台は強力な緑色の光球を連射した。アーストロンはその直撃を受け、粉々に吹き飛ぶ。

「な、な、な、げーーーーーっ!?!」

サドラが叫んだときはすでに遅く、セブンの剣が腹に投げ込まれていた。サドラは白目をむいて、そこに倒れた。

「く……そ……」

その頃、ウルトラマンはドレンゲラン内部の大広間の扉を開けた。特に何も無い、飾り気の無い部屋だった。

「ここは……」

あたりを見回すウルトラマン。

「もしか、闘場!?!」

「その通り、さすがに戦いを感知するのに長けている」

「来たか、ザム星人」

一つの丸い大きな玉 脳魂球のうこんきゅうを顔に持つ闘士ザム星人。一本の剣を片手に持ち、ウルトラマンと決闘をする気なのである。

「やめるんだ、ザム星人。決闘がしたいのならばこの戦いが終わった後でいくらでも受けてやる」

ウルトラマンは、説得しようと試みた。しかし、闘士ザム星人は聞こうとしない。

「そうはいかんよ、俺はエンペラ星人様の部下であるからな。ここで引き下がるわけにはいかん」

剣を舐めるように顔のそばへと持っていく。口があれば、本当にそうしていただろう。

「はおおおっ!」

闘士ザム星人の刃が、素早くウルトラマンを突き刺す。と思いきや、ウルトラマンの残像を突いただけであった。

「そう言うことは知っているぞ!」

次に、横薙ぎの一閃。今度は、実体のウルトラマンの、装鉄鋼に傷をつけた。

「うぐっ！」

ウルトラマンが後ろへ飛ぶと、闘士ザム星人も前へ跳ぶ。ウルトラマンの動きが、全て見切られているようだった。敵の攻撃に対し、防戦一方になるウルトラマン。

「くっ、前回言ったことはどうやら本当だったか！」

前回とは、前にウルトラマンが闘士ザム星人と闘った時の事。その時は超闘士の力で一気に敵を倒したのだが、脳魂が無事だったため、敵は復活できたのである。さらに、ウルトラマンは、闘士ザム星人が、最初の戦いで敵の技を身切り、復活した後で倒すということを予想していた。それが、現実になったのである。

「スペシウム・アタック！」

ウルトラマンが必殺技、スペシウムアタックを放つ。スペシウム光線のエネルギーを拳に溜め、より強力な光線として放つ技である。闘士ザム星人はそれを横に跳んでかわした。彼の後方で、大爆発が起きる。

「ウルトラクラウン！」

ウルトラクラウンを装備し、超闘士の力を解き放つウルトラマン。

一瞬、全身から金色の光を放ち、元の体色に戻る。そして、今は青白く光るオーラが全身を包んでいる。

スペシウム・アタックは、ウルトラクラウンを装備するための呪だった。

ウルトラの父やタロウの角　ウルトラホーンを模したその冠を装備することで、超闘士の力を自由に使うことができるのである。

「でたな、超闘士ウルトラマン！　こちら本気で闘わせてもらっぞ！」

そう言っただけザム星人は、剣をさらに速い動きで振るう。空を切る音

さえしない、俊足の技であった。

「……はっ！」

しかしウルトラマンの動きは、それよりさらに速いものであった。簡単に闘士ザム星人の背後に回り、痛烈なチョップを後頭部にくらわせる。

「ぐふあっ！ な、何だと！？」

「……」

ウルトラマンは無言で、振り返った闘士ザム星人に蹴りを入れる。強烈な蹴りを受け、闘士ザム星人は天井まで吹き飛ばされた。

「ぐ、がああああ……」

天井に背中からめり込むザム星人。表情の無い顔をした彼だが、驚きが見て取れる。

「こ、これが、超闘士の實力……」

「すまん、前の戦いでは、パワーをセーブしていた」

「やはり……か」

ウルトラマンの告白に、闘士ザム星人は納得したような口ぶりで呟いた。

「武人に対する冒瀆……私は、かつてそれを一人の男にしてしまった。そして、お前にも同じ愚を犯した」

メフィラス大魔王。ウルトラマンは再び、この男の事を思い出していた。あの、最後の日。彼と最後に戦った日、自分は明らかに手を抜いた。それから彼は、ツイフォンとの戦いで、大激闘の末に死を遂げた。二度と、戦えない。あの時の怒号が、忘れられない。

「行くぞ、闘士ザム星人。 スペシウム……超光波……」

「ぬあああああああああああああああああ！ 見事――」

スペシウムエネルギーを、限界極限にまで高め強化し、掌から放つ

最強の光波。その威力は、ドレンゲランの外壁など軽く吹き飛ばしてしまふほど。天井に、ぽっかりと大穴があいていた。

戦艦の秘密

「はあ……はあ……終わった……」

「終わったんですか、闘士ウルトラマン！」

「お、お前達！」

最大の威力のスペシウム超光波を放ち、体力を減らし元の姿に戻ったウルトラマンの前に、新人ウルトラ戦士である、闘士ウルトラマンネオスと闘士ウルトラセブン21（ツーワン）が走ってきた。若手の中でも特に実力のある天才ネオスと、互角の力を持つ努力家21である。

「こんな時に体力の事も考えず全力で技を放ってしまうとは……私もまだ未熟だな」

下を向いてポツリと呟くウルトラマン。しかしすぐに顔をあげ、ネオスと21に訊いた。

「どうしてここに来たんだ？ 指令を受けたのか」

「はい、ウルトラの父からの命令です。ここに、何か巨大なエネルギーを感知したと言うので」とネオス。

「巨大な？」首をかしげるウルトラマン。

それに、21が答える。

「ええ、どうやら大量のEXキューブらしいのです。さっきまではまったく感知しなかったのに、おかしいでしょう？」

EXキューブ……莫大な高純度エネルギーを蓄積できる立方体で、エンペラ軍はこれをメタルモンスに使用して、進軍を開始したのであった。

「つまり、この艦内にそれが存在していると言うのか……よし、ネオスは私とくるんだ。21はこの艦内にいるセブンと合流してから、エネルギーの正体を突き止めるんだ」

「了解！」

互いに、あこがれの戦士と組むことができるので、二人は意気揚々

と返事をした。

その頃、エンペラ空軍の使用していた戦闘母艦、サタンモアを収容した、惑星ポールの研究施設。そこで、敵の戦力や情報を得るべく、サタンモアを分析しようと天才科学者でウルトラマンの大ファン、ウルキユース・ノタニ博士らが準備を進めていた。

「いやあ、確かにこれはサタンモアだねえ」チミイ、レオの第4話……」

白髪白髭をなびかせて、サタンモアの外観に見とれるノタニ博士。丸眼鏡も、きらりと輝く。

「博士え、感心するのは後にして早く始めてくださいよお」

そう突っ込んだのは、名実況者の万丈アナウンサー。作業服のようなスーツと帽子に身を包んでいる。昔は新聞記者だったとかちがうとか。

「うむ、では、始めようか」

びき……

「ん？」

びき…… みき……

「んん？」

へきへきへきい……

「んんん!？」

突然、音を立てて、サタンモアが崩れ始めた。慌てるノタニ博士、

万丈アナ。

「い、いいい一体どうしたというのでしょうかー!?」

そこに、菱形の装飾をあしらいい、背中に大きな翼をもつ装鉄鋼を着込んだ戦士、闘士ウルトラマンジャックに、戦闘機を模した装鉄鋼を両肩に装備した闘士ウルトラマン80が、飛んできた。

「どうしたんですか!? 突然巨大なエネルギー反応が現れましたよ!?」

ジャックが叫んだ。巨大施設内で、その声が響く。

「わわわあ、あ、あぶないっ!」

80が、崩れるサタンモアを見て絶叫する。そして、慌てながらも、ノタニー博士らに避難勧告する。

「さあ、早く逃げて! 何が起こるかわかりません! UGMが近くにいますから、すぐにスペーススマミーに乗りこんでください!」

「す、すまんね80くん!」

「博士急いで!」

ノタニー博士らがスペーススマミーに乗り込む頃、研究施設がメキメキと音を立てて崩れていく。そして、その中から、巨大な怪物が飛び上がってきたのである。

「ば……バードン!?」

ノタニー博士が叫ぶ。かつて、タロウやゾフィーを倒した強豪、火山怪鳥バードンにそっくりな姿をしているそれを見て、そう叫ぶのも当然だった。

「あ、あれはメタルモンスですよ! バードンの形をした、メタルモンスです!」

とUGMのオオヤマキャップの言った通り。それは、バードンの姿をしたメタルモンス。エアロキングであった。

その頃、地球でも、同じ事態が起きていた。

「あ、あああっ!」

そう叫ぶアストラの視線の先にあったのは、闘士バルキー星人の使っていた戦艦サメクジラ。そのサメクジラが音を立てて崩れていき、中から巨大なメタルモンスが現れたのである。

「あ、ありゃあシーゴラスじゃねえか!？」とエースキラー。

「違う、シーゴラスの姿をした、メタルモンスだ!」とレオ。

シーゴラスの姿をしたメタルモンス、アクアキングの登場であった。

そして、ウルトラの星周辺の宇宙空間でも、陸軍戦艦ドレンゲランが、その船体を崩していた。

「なんだ!？ 何が起きている!？」

ウルトラの父が、空を見上げて叫ぶ。タロウも、メタルモンス軍団を相手に戦いながら、驚いていた。

「うわーーーーーーーっ!」

ドレンゲランから、ウルトラマン、セブン、ネオス、21が吹き飛ばされた。ウルトラの星の地面に、激しく叩きつけられる4人。

「う、ウルトラマンさん!？」

ウルトラの星の女性が、ウルトラマン達に駆け寄る。

「く……隙を突かれた!」

ウルトラマンは悔しそうに、ドレンゲランを見上げる。

「なにが、なにがあっただんですか!？ 教えてください!」

「現れたんだ……あの強敵……グランドキングが!」

最強のメタルモンス

「グガアオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオ！」

身長700メートルはあろうかというグランドキングの叫ぶ声が、ウルトラの星を蹂躞する。重厚感のある金属的なボディに、傲慢で分厚い装甲。両腕にある大小不揃いなハサミ。二股の尻尾の先端からは、ビームが放たれる。そして、額と両肩にもビーム砲が設置されている。グランドキングにとって、それを発射せずに放っておく義理も義務もなかった。

「うわああああああああつ！」

「きゃあ————っ！」

すでに大きく差を開けられていたウルトラ戦士達。これまでは何とか持ちこたえていたが、グランドキングの登場という現実。その現実が与える恐怖によって、一気に精神を潰された。

「くつ、まさか、まさかグラウンドキングとは！　　もしや、ジユダマ
でが関連していると言うのか！？」

ウルトラの父の言うジューダとは、数万年に一度復活する、宇宙の帝王を名乗る悪の宇宙人である。彼の操ったグランドキングとは、以前、タロウがウルトラ兄弟と合体する事によって倒せた、超強敵なのである。

「グオオオオオオオオッ！」

ただ実際には、このグランドキングは、エンペラ星人が本物のグラ
ンドキングをモデルに作っただけで、ジユダとは何ら関わりは無い
のだが、父やグランドキングを知る戦士たちは、愕然としていた。
それに何より、前のグランドキングより強いという大きな現実。そ
の上、ウルトラマンやセブン、ネオスに21は、丁度吹き飛ばされ
た場所にウルトラの星の小学校があり、そこにメタルモンスや闇闘

士らが攻撃をしてきたため、そこを守らなければならなくなつて、戦えない。4桁はいる敵の数に、なかなかその場を動けないウルトラマン達を見て、さらに戦士達の戦意が失われていく。

しかし、タロウは諦めようとしなかった。

「父さん！ 諦めちゃだめだ！ 僕達で守らなければいけないんだから！」

そう言つて、タロウが飛び立つ。たった一人で、タロウが戦つ。

「うあああああああああああああああつ！」

タロウは超闘士の力を一気に解放し、グランドキングを蹴り飛ばした。

「ぐがごがつ！」

グランドキングは頭を蹴られ、タロウを見やる。

「負けないぞつ！」

連打。タロウの超高速の連打が、グランドキングの頭部に見舞われる。あまりの速さに、グランドキングはついていけない。

足、手、足、頭、光線、タックル、チョップ、キック。タロウのありとあらゆる接近戦技術が、グランドキングの頭部に駆け巡る。

「グガアー——————ッ！」

ほんとうにはやいヤツは一刺しで相手を倒してしまうものだ

ツイフォンとの壮絶な戦いで死んでいった、メフィラスの言葉が思い起こされた。タロウは、自分の力の無さを、わずかに感じていた。「倒せないのか……僕じゃっ！」

焦った。少しだけ、動きが止まった。その隙を見逃さず、グランドキングは口から光線を吐きだす。

「うわっ！」

素早くバリアーで攻撃を防いだが、よろけてしまうタロウ。

そこでグランドキングは、巨大なハサミ状の左手を振るい、一撃を見舞う。ハサミ状ではあるが、はさむようなことはせず、殴っただけである（もつとも、威力は相当なもの）。

タロウはそれを上に飛んでかわす。近くビルが一瞬で砕け散る。そしてタロウは、すぐさま腕を丁字状に組み、光線を放った。

「ストリウム光線！」

「ゴアがつ！」

七色の光線が頭に直撃し、グランドキングがたじろいだ。しかし、すぐに上を向いて、額と肩から光線を乱射する。

「うつ、うつつ、ああつ！」

何発か避けたタロウだが、ついに一発足に喰らい、バランスを崩しその後の光線を全て喰らってしまう。

「うわあああああつ！」

グランドキングは飛び上がった。跳躍である。タロウの頭上。それを見た何人ものウルトラ戦士が戦慄した。口から何も出ず、彼らの精神の中には静寂が生まれる。

「ぐ~~~~~」

殴られた。グランドキングの痛烈な一撃が、タロウの全身を捕らえたのだった。

「つ……ツイフォン……並みだ……」

殴られた勢いで、真下へと飛ばされるタロウ。そのまま、瓦礫の中へと飛び込んでしまった。……かに見えたのだが。

「……えっ？」

「お目覚めかい、タロウ坊ちゃん。いや、超闘士ウルトラマンタロウ」

タロウは支えられていた。バルタン、ケムール、ダダ、ザラブ……

「こっまじてんのう」
鋼魔四天王によつて。

「こ、鋼魔四天王!？」

タロウは、バルタンらの腕の上で跳ね起きた。

「なんて顔してるんだ。早く戦いに戻れ」とバルタン。

「一番強い者が先に死んでしまつては、他の者の士氣にも影響することは分かつているだろう?」と、ザラブ。

「メフィラス様の愛弟子であるあんたに、続けざまに死なれちゃたまんねーんだよ」とケムール。

「さあ、われらも手伝う……行くぞ!」

ダダがそう叫ぶと、全員が飛び上がった。タロウは、一瞬でかけた涙をこらえ、遅れて飛び上がった。

「行くぞおおおおおおおおおっ!」

怪獣使いの助言

タロウらが死闘を繰り広げている時、惑星ポルでは、ジャックと80、そしてレッドキング、ゴモラ、エレキング、ベムスター、バキシムの闘士五獣士ファイターごじゅうしがエアロキングと闘っていた。

「ちつくしょう！ 降りてきやがれ！」

空を飛ぶエアロキングを前に、レッドキングらでは殆ど闘うこともできなかった。飛べるのは唯一、ベムスターのみ。そのベムスターも、右手に装備したハンマー攻撃や目からの連射ビーム弾攻撃を使うものの、殆ど避けられてしまう。

「くっ、我々の攻撃もほとんど当たっていないぞ！」

「敵はただ飛びまわっているだけなのに……」

ジャックと80の攻撃も、まるで通用していなかった。いかなる攻撃も、かわされてしまうのである。特にジャックはつらかった。初っ端の敵の攻撃を、ともに連続で喰らってしまったからである。

「コオオオオオオオオオ！」

エアロキングが鳴くと、その激しい音の振動が周囲に広がる。レッドキング達は、その度に耳をふさいだ。

「ぐっぞ……いでえ」

「喰らいやがれっ」

バキシムが体内のミサイルを連射して攻撃し、エレキングは口から電気弾を飛ばす。しかし、エアロキングの飛行能力にはかわされてしまう。

「よおし、このオレ様も！」

そう言つて、レッドキングは瓦礫の一部を持ち上げ、敵に向けて投げつける。

「お、おいおい、俺、本当に何もできねえのかよ！」と嘆くゴモラ。

「あ~~~~っとお、闘士五獣士の攻撃が始まった~~~~！ しかし、

敵に何もダメージは無い様子！　これはまずい状況です！　ジャックと80に期待するしかないのでしょうか……！」

万丈アナがスペーススマミーから実況する。しかし、その言葉の中には、現在の状況を絶望視するような悲痛さがにじみ出ている。

「くっ、人々に絶望を与えるなんて……ウルトラ戦士として、私は……！」

さらに翼による一撃をくらい、吹き飛ばされて、ジャックは悔やんだ。自分に対する怒りの念に任せ、拳がつぶれるほど強く握った。

「せ、せめて、相手の動きが少しでも止まれば！」と80。

「う……む、わかったよチミい、あいつはね」

スペーススマミーの設備と、サタンモアの一部を使い、ノタニー博士がその分析結果を出していた。

「な、何かわかったんですか、博士！」

万丈アナが、希望の表情で振り返る。

「あいつの名前は、エアロキングだ」

「……は」

「だから、あいつの名前は、エアロキングだよ、万丈君。」

「そ、そんなことどうだって……！」

「さらに、グランドキング。アクアキング。他にもまだ、メタルモンスの切り札が居るようじゃねえ」

「……え」

今ここにエアロキング。そして、アクアキングにグランドキング。

さらには、他にも切り札が存在しているという……万丈アナの、いや、スペーススマミー内部の全ての者が、絶望感に見舞われた。

「ちつくしょおおっ！　俺には、本当に何もできないのかよッ！

これじゃあ、本当にただの武装怪獣じゃねえかあッ！」

そして、ゴモラは嘆いていた。自分は、空を飛ぶことも、光線を撃つことも、岩を敵のいる高さまで投げることもしない。一番の役

立たず。

「俺は何のために……」

かつては、自分も、ウルトラマンに手も足も出ないほどの連撃を喰らわせた。それが尻尾を切られ、間抜けに尻を振った後に、角を折られ顔を撃たれ、倒された。

それからどうやってかよみがえり、銀河最強武道会に参加した。そして、闘士となった。

だが、それも単なる武装怪獣どまり。鎧を砕かれ、簡単に降参してしまった。

それから、次の大会でも、善戦したもののエースにコテンパンに叩きのめされ、敗れた。続くヤプール大戦でも、華々しく活躍することなく倒された。

第三回の武道会。エレキング達が予選落ちして、闘士五獣士の中で自分とレッドキングだけは、本選出場。内心喜び、一回戦に参加したまでは良かった。しかし、ゴモラを待っていたのは、エースキラーにかなう訳がない、という周囲の蔑んだような視線。

「何のために……」

「ど、どうしたゴモラっ！」

レッドキングが、打ち伏せたゴモラを見て、叫んだ。

「俺は何のために生れて来たんだ……ッ！」

ゴモラの目から流れでるのは、涙。

「悔しいか？」

「？」

「その悔しさが、お前を強くするんだ」

「誰だ？」

「通りすがりの、怪獣使いさ……」

そこに立っていたのは、身長2メートルもない小さな青年だった。青と銀色の服を着たその青年は、ゴモラを、真っ直ぐと見つめてい

る。

「ゴモラ。お前、地中をどうやって掘り進むか、知っているか？」

「あ？ そ、そりゃ、角を……」

ゴモラは、地面を掘る時、角を素早く振動させて、ドリルのようにして掘り進む。

「そのつもりで、あいつに向けて、空を掘ってみるんだ」

「そ、空を？ 兄ちゃんよ、訳のわかんねえこと言うんじゃないよ」

「いいから、やるんだ」怪獣使いを名乗る青年の目は、まっすぐに真剣で、輝いていた。

「わ、わかったよ。やればいいんだろ」

そうして、ゴモラは上を向いた。角の先をエアロキングに向けて、土を掘るあのやり方で、角を震わせる。

「……」

あの敵に。あの怪獣に、あのメタルモンスに向けて、土を掘る。ただただゴモラは、それだけを思っ角を震わせる。何かを感じさせる、青年の目を信じて。

「」

「クコオオオオオオオオッ！」

エアロキングは叫ぶと同時に、地面に向けて口から猛火を吐き出した。

「や、やべえ！ みんな！」

ベムスターが叫び、敵の前面に飛び込んだ。

「なっ！」

「ぐがおおおー……」

ベムスターの腹の吸引口が、火炎を吸い込む。ごうごうと燃え盛る火炎を、吸い込み続ける。

「どうだっ！ 吐き出した炎を食われる気分ってのは！」

「ク、クオツ！？」

エアロキングが驚いた声を上げる。しかし、それはすぐに、ベムスターの悲鳴へと変った。

「ぎゃが……っ」

エアロキングの巨大な嘴が、ベムスターの腹を貫いていた。真っ直ぐ、吸引口を。ダーツのように正確に、真っ直ぐ。嘴の先が彼の背中を突き破り、真っ赤な血がパーーーーッと噴き出た。

「ベムスターーーーーーっ！」

誰かが叫んだ。レッドキングが岩をこぼした。そして、声にならない叫びをベムスターへと解き放つ。

ベムスターは、何も言わずに、地面に落ちた。

「べ、ベムスター……っ」

エレキングが、力無い声で名を呼んだ。ベムスターは、答えなかった。

「そんな……」

ゴモラは、叫びたかった。ベムスターが死んだかもしれない。今すぐに、駆け寄りたかった。他の仲間はどうしている。叫び、嘆き、駆け寄る。しかし、自分だけは、今そうしてはいけない。そういう気がした。

「ク……コーーーーーーっ！」

再び、エアロキングが猛火を吐く。ジャックと80が光線を撃つが、避けられてしまう。

「まずいつ、避けるレッドキング！」

ジャックが叫んだが、間に合わない。レッドキング達は、その時初めて火が迫っていることに気がついた。

「げっ」小さく、声を上げた。

「うおおー！……………」

その時、ゴモラの角から、強烈な光がほとばしる。そして、それはエアロキングに叩きつけられた。

「クゴボツ！？」

エアロキングは、上空へ吹っ飛んだ。それによって、火炎もレッドキングらから離れた。そして、エアロキングは小刻みに震えだす。

「こ、こりゃなんだあ！？」

驚くゴモラ。そこに、ノタニー博士の解説が流れる。

「あれはだねえ、ゴモラは地中を掘り進む時超振動波を出すわけだ。それを前方に放出して光線のように攻撃したのは、なかなかのアイディア&テクニクだね！」

それほどのダメージを与えたわけではない。しかし、この強大な振動は敵の動きを狂わせるに十分足りていた。目を見張る怪獣たち。

「おおおっ、あ、ありがとよっ、怪獣使い……………」

ゴモラが振り返った時、怪獣使いは消えてなくなっていた。

「……………」

「よし、今だ！ 攻撃！」

エアロキングがまともに動けなくなっているチャンスを生かし、ジヤックと80が猛攻撃を喰らわせる。

「シネラマショット！ 八つ裂き光輪！ フォッグ・ビーム！」

「スパイラルビーム！ サクシウム光線！ ウルトラレイランス！」

「お、おれたちもやるぞお！」

「うおおー！……………」

「私たちもだ！ 砲撃開始！」

怪獣たちやUGMも、エアロキングに攻撃を撃ち込む。全ての能力を発揮して、撃ちまくった。

そして、UGMの全攻撃エネルギーが尽きた頃に合わせるように、

全員が攻撃をやめた。

もわもわと広がり、やがて消えていく爆炎の中から、エアロキングが飛んで来た。

エアロキングが飛んできた。

怪獣使いの助言（後書き）

今回は大怪獣バトルからネタを持つてきました。

ゴモラが超振動波で地中を掘り進むと聞いた時は「えっ？」と思ったものです。持つてる昔の図鑑には「口の中にドリルがある」と書かれていましたもので。しかも劇中でも普通に手で掘ってたりしますもんね。

私の場合はゴモラ好きなんで、彼が強くなるなら良いや、と軽く受け止めました。読者様方はどうでしょうか？

何故謎の怪獣使いが現れたかは、またの機会に。

ちなみに、序盤でベムスターが目から光線を撃っていますが、タロウに登場した改造ベムスターの技を使わせていただきました。しかし、あの腹部の吸引口を装鉄鋼で覆ってしまっていていいのでしょうかねえ？

戦士たちの賛歌

エアロキングが飛んでくる。エアロキングが飛んでくる。

エアロキングが飛んでくる。エアロキングが飛んでくる。

「うわーーーーーーーっ！」

スペーススマミーがその巨体に船体を打たれ、墜落する。

「ぐっぞお！」

レッドキングがヘッドスライディングして、地に激突しかけたスペーススマミーを受け止めた。

「あ、ありがとうございます……レッドキング！」

「ありがとうございます！」

「へへ、これが岩だったらあいつに投げつけてやんのによ……」

ゴモラが走りながら、超振動波を撃つが、当たらない。

「くそお、さっきの攻撃がまったく決定打になってねえっていうのかよ！」

「いや、確かにダメージは与えている！ 同じようなことを何度か続ければ勝てるはずだ！」

ジャックが飛びながら叫びそして、左手首にはまっているウルトラブレスレットを変身させた。白熱化して敵を切り裂くカッター「ウルトラスパーク」である。

「くえっ！」

横向きに飛びながら、ウルトラスパークを投げつける。

がきんっ、と音がして、ウルトラスパークはエアロキングにはじき返された。

「くっ！ 効かないのか……！」

「いいえ、確かに効いています！ あの羽に傷がついています！」

80が、光線を撃ちながらジャックに伝える。

「本当か！ よし、まだ希望はある！」

「クワーーーーー！ーーーーー！」

その瞬間、ジャックは跳ね飛ばされた。エアロキングの飛行に伴って放たれた、衝撃波によって。

「うぐあああああ！」

そして、研究所のあった瓦礫の中に、回転しながら落ちて行ってしまった。

「じゃ、ジャックさん！」

「クオーーーーー！ーーーーー！」

強烈な声の振動を再び放つエアロキング。80はバランスを崩し、地面に落ちてしまった。

「くそ、俺たちには何も出来ねえのかよ」

声の振動を受けて、闘士五獣士らもダメージを受け、その場に棒立ちになっていた。

「くっそお、振動だったら負けねえっ！」

ゴモラが超振動波を放ち、エアロキングの喉に命中させた。

「クオッ！」

口から金属片を吐きだし、震えだすエアロキング。

「よし、今だ、攻撃……」

レッドキングが瓦礫を持ち上げようとした時、エレキングが制止した。

「待てっ、レッドキング！ 俺を投げつけろ！」

「はあっ！？ な、何を言ってるんだよお前は！」

「いいから早く！」

「お、おう！」

そして、レッドキングはエレキングを、エアロキングに向けて投げ飛ばす。

「いったいアイツ、何を考えてやがんだ？」

敵の方まで飛んだエレキングは、エアロキングに張り付くようにし

がみついた。そして、尻尾を敵の翼に絡みつかせる。

「お、お前まさか！」

「喰らえーーーーーっ！」

レッドキングが気づいた瞬間、エレキングは、最大の必殺技である、尻尾からの放電攻撃を放った。

「クワアワワア……」

体内にまで強烈な電気攻撃のダメージを受けて、苦しい声を上げるエアロキング。

「俺の電気、全部くらわせてやるうううううっ！」

「く、うぐうっ！」

そこに、ジャックが戻ってきた。ただし、一人ではなく、サタンモア内で眠っていた、生き残りの円盤生物らに追われながら。全身に攻撃を受けながら、少しでも敵の動きをかく乱しようと飛び回っている。

「す、すまん！ 敵が……増えてしまつて！」

円盤生物は80や五獣士にも襲いかかった。ゴモラやレッドキングは、パワーで敵を跳ね飛ばす。

そこに、円盤生物の一体……デモスが、ジャックに絡みつく。

「くっ！」

ジャックは赤熱化した手刀「ウルトラハンドスライサー」でデモスを切り裂いて逃れるが、そこにノーバが、口からの毒ガスを使う。ノーバが普通使うのは狂暴化させるガスだが、このノーバは敵にダメージを与える特殊な毒ガスを放っていた。

そんな苦しむジャックに突然、信じられないほどの威力の一撃を見舞う者が現れた。ジャックは者も言わずに吹き飛ばされ、瓦礫や岩にぶつかつてようやく止まった。

「な……ッ！」

それは、横に長い一つ目がついた大きな円盤で頭ができているような、恐るべき円盤生物、ロベルガーであった。

「あ、あれは……新種の円盤生物!？」

ノタニー博士が、驚いていた。UGMの面々も、ダメージを受けたベムスターを運びながら、息を呑む。

「ウルトラ戦士、抹殺　ウルトラ戦士、抹殺」

ロベルガーはそう呟きながら、ジャックに向けて投げるように光球を放つ。

「うぐ、うあつ、うああつ!」

成す術なくジャックは、光球が当たるたびに後退していく。

「ウルトラ戦士、抹殺!」

ロベルガーの目から放たれた光弾が、ジャックを再び吹き飛ばした。

「ぐああああ……!」

ジャックは、レッドキングが投げて使った瓦礫の破片の中へ消えた。

「て、てめええええつ!」

レッドキングの一撃が、ロベルガーにヒット。さらにバキシムが火炎を発して攻撃する。さらに二人の強烈な一撃を受けてよろめくロベルガーに対し、ゴモラは頭から飛び込んで鼻先の角を突き刺す。

「くらえつ、超振動波!」

「がががが……!」

超振動波を体内に流し込む。レッドキング達は再びエアロキングを見やる。

その後、長時間超振動波を流し込まれ、ロベルガーは粉々に砕け散った。

「す、すげえ、これが俺かよ……!」

ゴモラは、自分で驚いていた。

「うあーーーーーっ!　離れろオ!」

エレキングが叫んだ。上空を見上げると、残った円盤生物が全て、エレキングを攻撃していた。触手でからみついたり、火を吐いたり、体当たりをしたり。

「うぐ、いて、いででえ！」

動き回る円盤生物に、体を揺らすエレキング、そして電流を流されていることで、微妙な動きをするエアロキング。これでは、エレキングを助けるために攻撃をすることができない。

「僕が行くしかない！」

80が、飛び立とうとした、その時。

「くんな！　ここは俺に任せるッ！　円盤生物もエアロキングも、俺が倒すっ！」

エレキングが声を上げた。全身を敵に打たれ、多くの痣を作った姿で。首からも、血が流れている。

「エレキング！　無茶するな！」

レッドキングが声を荒げて叫ぶ。

「へへ……役立たずの俺でもよお、これ位は……できるぜっ！」

エレキングは手を放し、尻尾だけでエアロキングにぶら下がる形になった。それによって、尻尾に攻撃を受けることになる。尻尾の根元から、早くも血が出た。

「喰らえーーーーーっ！」

エレキングは装鉄鋼の両手を合わせ、周囲に向けて電流を発した。円盤生物は次々と黒こげになり、落ちていく。

「お、おおおおっ！」

その電撃を最も多く受けたのは、密着しているエアロキングだった。さらにダメージを大きくし、口からエネルギーの残骸のような液体をばたばたと垂らしている。

「だめだ……あの攻撃でも奴は……」

そう呟いたのは、バキシムだった。エアロキングを見上げ、彼は、打ち震えていた。

やがて、電気は止まった。前触れもなく、ぱちつと音を立て、光が消える。

「え、ね、き……」

ゴモラとレッドキングが、同時に呟いた。

「クガ……」

エアロキングが、顔を上げた。そして、羽根に絡みついたエレキングに向けて、口を開く。

「ウオォー……ッ！」

その時、誰かが叫んだ。叫ぶと同時に、ぎゅんぎゅんと回転しながら、エアロキングに向けて飛んでいく。

「ばっ、バキシム！」

バキシムトルネードアタック。槍のように尖った装鉄鋼を両腕と頭に装備した彼の最大の必殺技。回転して、装鉄鋼の先端を相手に叩きこむという、かつてはレオを倒したこともある大技である。

がきいいいっ、と音がして、エアロキングの首に、バキシムは喰い込んだ。捨て身だった。あまりの威力に装鉄鋼に亀裂が走る。バキシムも、気を失っていた。

エアロキングは、カハアと声をあげて、一瞬力を失った。

80 達には、それがエアロキングが落ちる瞬間かと思った。しかし落ちたのは、ずたずたになった装鉄鋼と、エレキングとバキシムだけ。エアロキング自身は、すぐに再び、舞い上がった。

「クケ、クカ、クハツ」

落ちてきた二人を抱え助け、レッドキングとゴモラは、呆然とした。

「もう……無理なのかよ……」

「せっかくの超振動波だって言うのに、結局、これかよ……」

「ベムスターも、エレキングも、バキシムも、捨て身でやったつていうのに……」

「……だったら、みんなで捨て身になろう」

「ああ？」

言ったのは、80だった。80が、一步前に出て、上空の敵を見上げる。

「最後の最後まで、力を振り絞って、たとえ死んでも次の戦士になげよう。これが僕たちの使命なんだ。そして、エレキング達のためにもやらなきゃいけない……」

80の重装鉄鋼の胸部にある星のマークに、エネルギーが収束される。同時に、腹部の星型のマーク、ウルトラバツクルに。ここからは、バツクルビームと言う強力光線が発せられる。そして、重装鉄鋼からは、より強力なスーパーバツクルビームが放たれる。

「ダブルバツクルビーム！」

両方のバツクルビームが放たれ、合わさった。そして、それはエアロキングの喉元に向かって飛んでいく。

「キギエ~~~~~~~~~！」

光線を受けたエアロキングの高度が、段々下がっていく。これまでのダメージも蓄積し、相当弱っているようだった。

「よし！ 今だ！」

ゴモラが超振動波を放つ。その攻撃を受けたエアロキングは、やはりぐらつき振動する。そこに、レッドキングが走ってきて、首をつかんだ。

「くたばりやがれ~~~~~っ！」

レッドキングの、強烈な一本背負いが決まった。地面にたたきつけられるエアロキング。

「よしっ！」

一瞬喜んだ3人だが、すぐに緊張感を取り戻す。今までからして、

エアロキングが倒れてはいないと、油断できないからだ。

「ケゴーーーーーッ」

その通りだった。エアロキングは一瞬で体勢を立て直し、高速で低空飛行する。3人は翼に勢いよく叩かれ、全身に衝撃が走った。

「くか……ッ！」

しかし、3人は、エレキングがしたように、エアロキングにしがみついていた。高速で飛びまわるエアロキングに、飛びついたのだ。

「くらえっ！」

ゴモラは角を敵に突きさし、超振動波を流し込む。それによって、次々と体の色々な位置から爆発が起こる。レッドキングは噛みつきたり殴ったり、頭を体表に叩きつけたりと攻撃する。そして80は、しがみつきながらダブルバツクルビームをし続けていた。しかし、これは同時に、敵の体の各箇所の爆発に対し、無抵抗になるということである。爆発の衝撃が、3人を襲う。

「カギヤクオーーーーーッ！」

エアロキングはとにかく叫んだ。叫びながら、一つの場所に向かっていた。

それは、スペーススマミー。スペーススマミーに飛び込み、その衝撃で3人全員を振り落とそうとエアロキングは考えていた。

「ま、まずい！」

エアロキングの動きが一直線になった時、ものすごい風圧が三人を振り落とそうとする。

「や、やべえ……まずいぞ！」

「ゴモラあ！ お前は超振動波を流し続けろおお！」

「いや、まて……あれは！？」

80が気づいた。1人の戦士が、強い光のまなざしをたたえ、飛んでくることに。

「行かせはしないぞ、エアロキングウツ！」

ジャックだった。ウルトラマンジャックが、エアロキングに向かって飛んできた。

「待てええッ！」

肩の、菱形の装飾が開き、そこから大きな穴が現れる。それは、強力な光弾「シネラマブレスター」が放たれる砲身。必殺のシネラマブレスターが放たれる。技は命中し、エアロキングのスピードがガクンと落ちた。

「じゃ、ジャックが……帰って来たぜ！」

レッドキングが笑って叫ぶ。ゴモラも、笑みを浮かべていた。二人の顔は、無理な攻撃と敵の体の爆発のせいで、血塗れだった。

「……私は……！ 私は……！ ウルトラマンは……！ 平和を守るためだったら、何度でもここに……」

叫びながら、左腕のブレスレットに手をやるジャック。ブレスレットは、一本の槍「ウルトラランス」に変身した。

「 帰ってくる！ 」

ジャックの魂の叫びだった。

「つああー………！」

ジャックがウルトラランスを敵に投げつけた。先ほどウルトラスパークでつけた傷跡に、それは突き刺さった。

「キゲッ！」

「うおー………！」

ジャックが左手を水平にする。そして、ピンと立てた右腕。右の手首と左手首が合わさる時、光となって敵を討つ。

「スペシウム光線だあー………！」

最後は、声がかすれた。しかし、その魂はその場にいる者達全てに響いていた。最後の一撃、スペシウム光線。それは、ウルトラランズに命中し、ランズを通してエネルギーをエアロキングの体内に流し込んだ。

エアロキングの全身に、エネルギーが強く流れ込む。全身が、強く響いた。

「キョ……ギョ……ワァ……ッ！」

エアロキングが、堕ちた。

体から高熱を発し、目や口、体に空いた穴すべてから、エネルギーの残骸の液体を垂れ流しながら、大きな音を響かせて、地に落ちた。

「おおっ」

スペーススミリーの中で、ノタニー博士が感嘆の声を上げた。その目から輝く涙が落ちる。

「お……おわ……った……」

ジャックも、80も、レッドキングも、ゴモラも、何も言わずに、その場に倒れた。

満足した笑みを浮かべて。

戦士たちの賛歌（後書き）

今回登場の円盤生物ロベルガー。メビウスになって初めて登場した新種です。

戦闘力はかなり高く、メビウスは仲間の協力とパワーアップ形態を使用して初めて勝つほどの強敵で、後にロベルガー？世（色と角の数が違う）も登場し、こちらは80とメビウスがタッグで倒しました。

さらに外伝（続編）でも初代と同じ姿のものが登場、今度はGUY Sとウィンドムに倒されたようです。

この戦いは、元々ジャックをメインにする筈でしたが、途中でゴモラが目立ってしまったためこうなりました。現在、大怪獣バトルの主役として活躍しているから目立たせた、というわけでは決して無いです。

あと、「シネラマブレスター」は、OVAに登場しています。設定上は「シネラマブラスター」らしいのですが、劇中で呼ばれていた方を優先しました。

激震の海上

地球の、とある海面の闘いの直後、闘士バルキー星人らの使っていた戦闘母艦サメクジラの中から現れた、竜巻怪獣シーゴラスの姿を模して造られた「アクアキング」に、エース、エースキラーS、レオ、アストラは大苦戦していた。

「ちつくしょう！ 何発撃つてもまともにダメージ受けやがらねえ！」

エースは得意の斬撃光線を連射しながら、敵の耐久力に驚いている。「エースキラー！ あの武器は使えないのか！？」

レオが言っているのは、エースキラーの必殺のビーム・バズーカ「キラー・ファントム」である。しかし、キラー・ファントムは先の闘いでエネルギーが尽きていた。

「ちえっ、こんな時に役にたたたねえやつだなあ！」とエース。

「バカヤロウツ！ ちゃんと一緒に攻撃してるじゃねえか！」

そう言いながら、胸のクリスタルから光線「キラーブレスト」を発射するエースキラー。

そして、レオとアストラも合体光線「ウルトラ・ダブル・フラッシュヤー」を放つ。

「ギュグウウウウウウウ！」

攻撃を受けながらも平気なそぶりで、顔を出したまま海中へ潜り、アクアキングの猛攻が始まる。

「きゅ、急に潜りやがったぞ！」

「いや、頭だけ出している……角が！」

アクアキングの鼻先に生える大きな一本角から、強烈な雷撃が放たれる。雷撃はいくつもの筋に分かれて海を跳ぶように駆け巡り、戦士達に向けてだけでなく、さまざまな方面へ抜けていく。

アストラは手を赤熱化させることにより、パンチで何とか防ぎ、エースキラーは右手をまっすぐにのばし「M87光線」で相殺した。
「げ、げええっ！ これじゃ、岸にまで届いちまうぞ！」

しかし、近隣住民に避難勧告を出しているものの、危険な状態だと感じたエースは、自分に向かっていている雷撃の事を一瞬忘れた。

「危ないッ！ エース」

「げっ！」

雷撃が当たる寸前、レオがウルトラマントでエースに向かってくる雷撃を防いだ。守られたエースは、素早く振り返り、エネルギーを手に溜めて、技を放った。

「ウルトラ……ギロチン！」

ギザギザの光の輪を放って敵を切り裂く「八つ裂き光輪」別名「ウルトラスラッシュ」。これを拡散して一度に多くの敵を切り裂く必殺技がこのウルトラギロチンである。

そして、さまざまな方向へ向けてかけていく雷撃全ての先頭に命中させ、撃墜させたのだ。

「あ、あつぶねえ~~~~~」

「さすが守護闘士……」レオが感嘆の声を漏らした。

「あ、いや、こっちこそありがとよ」

しかし、アクアキングの猛攻はこんなことでは終わりはいしない。目からビームを撃ち、大きく開いた口からは魚雷が放たれる。さらには、体のどこから発射しているのか、魚雷が海面から次々と撃ちこまれてくるのであった。

「くそっ！ とんでもねえヤロウだ！」よけながら攻撃するエースだが、やはりまともにダメージを与えられない。

「こうなったらエースよ、接近戦で勝負をつけねえか？」

エースキラーの提案に、全員がごくりと息をのむ。あの怪物を相手に、接近戦をしようと言うのか。

しかし、遠距離攻撃が効果を成さない以上、接近して直接エネルギー

「Iを叩きこんだ方がいいのは事実。うまくすれば、体内に攻撃ができるという可能性もある。戦士達は、思い思いの方面から、敵に飛びかかった。」

「敵に着く前に、撃ち落とされんじゃねえぞぉ！」とエース。

「はいっ！」アストラは勢いよく飛んで行った。

「レオキィー……ック！」

足を赤熱化させていち早く飛び込み、レオキックをアクアキングの口元に放つレオ。しかし、その強靱過ぎる装甲に、跳ね飛ばされてしまう。

「くっ」

「ギョオオゴゴゴ」

アクアキングの左目が、レオに向いた。ビームを放とうとしているのだ。

「ギョギョウッ」

目が、きらりと光り、ビームがはっしやされた。

「はあっ！」そのビームを、レオブレラで跳ね返すレオ。レオブレラとは、ウルトラマントが変身した武器で、傘のような形をした盾である。

「ギョオオオ！」

ビームは、そのままアクアキングのコメカミに当たった。たじろぐアクアキング。その隙を突いて、エースがメタリウム・ソードで、エースキラーがファントムスラッシャー（キラー・ファントムが分離してできた戦斧）で、アストラが手を赤熱化させたパンチ「アステカスマッシュ」で敵の各所を攻撃する。

「ギョムウウ……」

「す、少しは手ごたえある……か!?」とエース。

「いや、これらの攻撃がさっきまでの技よりも威力が高い訳じゃねえ、やつこさんもそのうち、何かしてくるだろうぜ！」

エースキラーの言った通り、後方（アクアキングにとっての前方）

の海面から魚雷が放たれ、アクアキングの上にいる戦士達に向けて次々と発射されてくる。

「や、やべえ！ アンだけの数のミサイルを喰らったら！」

後ろを振り返ったエースは、ミサイルの数に驚愕した。空を埋め尽くすような大量の魚雷が、降り注いできたのである。

「いや、大丈夫だ！ あんなもん、誘爆させてしまえばいいんだ！」
そう言つてエースキラーは、額からエメリウム光線を発射した。エメリウム光線は、一つの魚雷を爆破し、その爆発がほかの魚雷を巻き込んでいき、大爆発を起こした。

だが、それによつて、想像を絶するほどの爆風が舞う。魚雷の威力が、思つた以上に高かつたのだ。

「うわあああー………！」

ものすごい爆風に、吹き飛ばされる戦士達。その瞬間、アクアキングが、角の雷撃を放出する。

「う………わあああああああああつ！」

爆風に全員の動きが封じられてしまった所に、アクアキングの雷撃。戦士達は無防備な状態で、痛絶極まるダメージを喰らってしまった。
「たった一発で………この威力かよッ！」

エースが海に落ちた。それを狙うように、アクアキングの右肩部分内からアームが伸び、エースを捕らえてしまう。そしてエースは、深海に引きずり込まれた。

「がつ、ご、ごボボボボ………」

レオ、アストラ、エースキラーは、何とか体勢を立て直そうと必死だった。しかし、雷撃や爆風のダメージによつてまともに動けないうえに、アクアキングのさらなるミサイル・ビーム攻撃に苦しめられる。

「う、ぐう………こ、このままでは………」アクアキングの斜め上空で、苦しむレオ。それを見たアストラは、兄に向つて叫んだ。

「兄さん！ 僕が囹になつている間に、口の中に攻撃して！」

「な、何だと！？ そんな危険な事をさせられるか！」

迷うレオだが、やはり弟にそんな危険なことはさせられない。自分が囷になるうと考え、そう言おうとした瞬間、アストラは飛び立ってしまった。

「うおおおー……っ!」

向かうは口。手足を赤熱化させて、敵に飛び込む。案の定アクアキングは口をあけて、ミサイルを発射しようとする。

「あ、アストラ……」

悲痛な声を上げるレオ。そこに、エースキラーが言った。

「あんたの弟は、立派なウルトラ戦士だよ……」

そう言つて、手を十字に構え、スペシウム光線を発射する。

青白い光が、アストラよりも早く、敵の口の中へ飛んでいく。

「それで……いいんだ……」

そして、光線がアクアキングの口の中へと飛び込んだ。

「っ!」

アストラが、覚悟を決めた。しっかり前を見つめた。自分の最期を、自分自身で受け止める為に。

「馬鹿ヤロウ! ウルトラ戦士っつーのはなあ……」

「っ!?!」

突然、声がした。真下からだ。

「立派なウルトラ戦士っつーのはな! 敵を倒して、自分も死なずに帰って来るもんなんだよッ! 仲間や守った人たちを、悲しませたりはしねえんだ!」

「エースさん!?!」

深海に引きずり込まれたエースが、アームを引きちぎって脱出し、海面を割って表れたのである。

そして、スペシウム光線がアクアキングの口内に命中する寸前に、アストラを抱えてアクロバティックに飛び回り、起こった爆発の爆風から逃れ、レオ達の前に戻ったのだった。

「ギョガギャオオオーーーーー！」
アクアキングの口の中で大爆発が起き、アクアキングの顔の隙間から炎や煙、ガスそしてエネルギーの残骸の液体が飛び散る。叫びまくるアクアキングを前に、エース達は静かにそれを見守る。

「倒したか……それともまだか？」

「このまま終わってくれよ……」

風に乗って、黒い煙と白いガスが戦士達を包みこむ。それは驚くほどの大量に生まれ、空気の中を流れていく。

「チェツ、最期の最後まで迷惑な奴だな。地球環境を汚しやがって……」

しかし、それは単なるガスや煙ではなかった。それに気づいた時、戦士達は力を失い、次々と落ちていくのであった。

見せる ウルトラ魂！

アクアキングの体から放出されたガスは、ウルトラ戦士にしか作用しないが、絶大な威力を持つ毒薬であった。

さらに、同時に放たれた煙は、ガスが体内に回る速度を急速に早める効果がある。

エースキラース以外の戦士達は、次々と海に落ちてしまった。

「な、なんだ！？ みんな、どうしたんだ！？」

慌てるエースキラー。そこに、TACの戦闘機、タックアローが飛んできた。

「おい、応援に来たぞ〜〜〜！」

TACの山中隊員が、エースキラーに向けて言った。エースキラーはそれを見つけてふりかえった。

「敵は俺達で倒した！ それより、エース達がやられちゃった！ 救援を頼む！」

「なんだって！？ わかった！ すぐに救援部隊に要請する！」

「頼むぜ！」

そして、再び爆炎に飲み込まれていくアクアキングを振り返るエースキラー。

「強かったぜ、化け物め……ん？」

槍が、刺さった。エースキラーの腹を、貫いた。

「かは……ッ！？」

「ギギギジ……」

爆炎の中から、目が光る。光った眼の主は、アクアキング。口がずたずた、顔全体がボロボロになりながらも、再び活動を開始したのである。アクアキングは全体を海面に表した。

「く、くっそあ……まだ、まだだって言うのかよ！」

ロボットであるエースキラーは、腹を貫かれたくらいでは死ぬこと

は無いし、大勢に影響もない。しかし、たった一人。これまでと違い、たった一人で闘わなければならないのだ。

「山中さんよあ……命、捨てられるかい……」

「……ああ、マヤの所へいけるしな……」

そう言つて、山中はふと、かつての婚約者マヤが、メトロン星人「」に殺された時のことを思い出した。そして、顔をあげて、言った。「いやっ、生き残らなけりやいけないんだ……マヤのためにも。だから、あんたの言つた通りにはできない。きっと、きっと勝つて見せるっ！」

山中の言葉に、エースキラーは自分を恥じた。さっき、エースも言つたじゃないか。『生き残つてこそ立派なウルトラ戦士だ』と。自分も、山中も、ウルトラ戦士なんかじゃない。ウルトラ戦士じゃないけれど、その魂は持てるはず。

「見せてやるぜ、俺のウルトラ魂をな！」

「ウルトラ魂なら、俺にもあるぜ！」

「あっ！」

その上空から、一人の男が飛んできた。誰よりも頼れる、色の黒い男。真っ青な鎧に身を包んだ、宇宙最強の闘士怪獣……

「闘士ゼットン、参上！」

「ゼットン！」

「かつて俺達がぶつ壊した分だけでも、俺たちで守つてやろうぜ」

ゼットンの顔が光を放ち、発光した個所の横の、目のようなくぼみから、1兆度の火の玉、メテオ火球が飛び出る。

「トッ！」

その一発が、素早くアクアキングの額を捉える。

「ギャッジャー……」

「うおおっ、たった一発であの威力……さすが最強怪獣だぜ。ちな

みに俺は地球のどこも壊してねえからな？」

感嘆の声をあげ、エースキラーは余裕のある一言をゼットンに告げた。

「よし、やってやろうじゃねえか！」

そう言つて放つのは、M87光線。強力なエネルギーの閃光が、アクキングの角の上から下に向けて、なぞるように浴びせられる。

「ギユユウウ……！」

アクキングの角から、またしても雷撃が放たれる。今度は宙空にいる、ゼットンとエースキラーに向けて直接放った。

「うおおっ！」

雷撃がエースキラーに命中した。一発目、二発目を避けたところで、三発目が腕にわずかに触れたため、一気に電流が流れたのである。

「ぐおおおおああ……！」

空中で動きを止めるエースキラー。

「エースキラー……カタキは俺がとつてやる！」

そう言つて、山中が無謀にもタツクアローを駆り、機首からレーザーを撃つ。

「ギユギイイイ！」

しかし、この攻撃が効くはずもなく、敵の目から発射されたビームの的になってしまふタツクアロー。

「う、うおおっ！」

慌てて敵の攻撃をかわす山中だが、さらに魚雷を何発も発射されてしまふ。

「み、ミサイル発射！ 迎撃っ！」

しかし、これが功を奏した。アクキングは、山中に気を取られてしまったのだ。ゼットンはここぞとばかりに、体内のメテオ・エネルギーを両手に集中した。装鉄鋼の両胸に仕込まれた、クリスタル状の部品にも、光が集まる。

「いいぞ山中！ 後はまかせろ！」

そうしてゼットンは、アクキングの角を狙い、技を放った。

「喰らいな、メテオバスター……！」

メテオ火球のエネルギーは、一本のエネルギー波と化し、強力な一撃をアクアキングに見舞った。

「ギョギヤア……！」

爆音をとどろかせ、アクアキングの角は砕け散った。衝撃で、下顎もがくと外れ、垂れ下った。

「ギョ、ギョツ、ギャツ!？」

角の根元から、エネルギーが垂れ落ちる。

「こいつでお終いだ！メテオキャノン！」

先ほどエネルギーを溜めた時、同時に光っていた装鉄鋼のクリスタル部品から、メテオ火球に似たエネルギー弾が乱射された。赤々と燃えるエネルギー弾は、アクアキングのボディのさまざまな部分に撃ちこまれ傷つけていく。

「ギョアギヤア……！」

「おつ、す、すごい！」

飛びまわりながら、思わず笑顔になる山中。

「やったな、ゼットン！」エースキラーも称賛する。

「なあに、お前さん達の闘いのダメージがあつてこそ……」

ゼットンが横のエースキラー達の方を向いた時、敵の雄たけびが聞こえた。

ギョアオオオオ……

「まだまだ……か」

不気味な声だった。ゼットンやエースキラーが、目を丸くして敵を見る。

「ギ……ギア……ギアオオオオオオオオオオオオオオッ！」

空気が渦を巻き、波が立つ。波が、大きな渦を巻き、その場で回り

始める。

「た、竜巻……！」

巨大な、竜巻が起きた。あまりにも早く、巨大な竜巻が生まれ、ゼットン達は退避もかなわず、全員巻き込まれた。

「くそおつ！ 動けん！」

完全に動けなくなったエースキラー。その手には、タックアローをにぎっている。

「この状態でも……」

ゼットンは敵を狙おうとしたが、さらに飛んでくる魚雷の存在に気づく。

「何だと！？」

竜巻にのって、ゼットンらと共に回る無数の魚雷。一発が爆発すると、他の魚雷も誘爆し、爆風を飛ばす。それによって、ゼットンやエースキラーがダメージを受ける。

「ぐ、うおおおつ、こいつは……」

「まずいぜ！」

「くそつ、せめてあいつの方向を向くことができれば、メテオ火球を撃ちこめるんだが！」

魚雷の爆風のため、アクアキングの反対方向を向いてしまったゼットン、自由に動けず難儀することになってしまった。

「このままじゃ、本当に負けだ！　じわじわなぶるなんて、ふざけたヤローだ！」

エースキラーが怒りの声を上げるが、アクアキングは何も変わらず、竜巻を起こし続け魚雷を撃ち続けている。エースキラーは、目を閉じた。全てを覚悟したかのよう。

「いや、あきらめるな！　俺達があきらめなければ、まだ勝機はあるはずだ！」

ゼットンの言葉に、エースキラーは再び、生気を取り戻す。

「そうだったな……でなきゃ、ウルトラ魂なんて言えねえもんなあ。まったく、俺ってやつは！」

ゼットンをちらりと見たエースキラーは、ゼットンの装鉄鋼が少し割れているのに気づいた。

「ん……ゼットン？」

その時、エースキラーの頭に、一つの閃きが生まれた。

「そうだゼットン、あんた、俺の方向を向けるか！？」

「む、無理だ！ 竜巻と魚雷のせいで、ともに動けねえし、どの方向を向けるかも運次第だ！」

「くっ！」

「なにか、思いついたのか！？」

「ああ、あんたが胸に受けた光線を増幅して放つ技を利用して、あいつにぶち込んでやろうと思ったんだ……！」

「そういうことか……どうにか、やってみようじゃねえか！」

しかし、ゼットンがそういった刹那、竜巻の中心をとおって、4本の光線が飛んでいき、アクアキングの頭に命中した。

「ギャゴハアアッ！」

「竜巻の中心は無風地帯……攻撃も通る！」

「お、お前ら！」

そこに現れたのは、ウルトラマンジョーニアス。そして、レオ、アストラ、エースであった。

「よお、回復して戻ってきたぜ！」

「もう回復できたのか、しかし、あの毒ガスもこの竜巻の中に入っているはずだぜ！？」

「そこはそれ、ダブルレスト重装鉄鋼だ。これを使えば、肉体を侵す攻撃は無効にできる」

そうジョーニアスは説明した。最近では、強度と軽さを追求した装鉄鋼などを造るようになったため、80とジョーニアス、鋼魔四天王（こちらは簡易版だが）以外は装着しなくなっていたのだが、エース達も回復した後、以前使っていた装鉄鋼（MAC、TACに保管されていた）を装着して、ここにやって来たのであった。

「スーパードッキングスパーク！」

ジョーニアスの必殺光線が、アクアキングの角のあった箇所を撃ちこまれた。それによって、アクアキングはたじろぎ、竜巻が少しおさまった。

「よしっ、今だ！」

エースとレオが、それぞれゼットンとエースキラーを助け出す。

「助かったぜ、エース」

「それより、さっきお前、ゼットンの力でエネルギーを増幅するって言ったよな？」とエース。ゼットンが返事をしようとすると、彼はニヤリと笑った。

それからすぐに、エースの頭にあるエネルギーホールに、レオ、アストラ、ジョーニアスのエネルギーが注ぎ込まれた。

「よし、こんなもんでいいだろ、後はゼットン！」

ウルトラ戦士のエネルギーを、エネルギーホールに溜めこむことで放つことのできるエースの必殺技「スペースQ」に変換し、装鉄鋼を身から外したゼットンの胸に撃ち込んだ。

「ハアッ！」

同時に、エースキラーがM87光線をゼットンの胸に放つ。両方のエネルギーを収束するゼットン。

「ギガアア……」効果の無くなった竜巻をおさめ、戦士達を見上げるアクアキング。

「ウギギユ……」

「喰らいな……今度こそ終わりだぜ……」

「だああー……」

「ギョガア……」

ゼットンのエネルギー放出が、アクアキングの頭に直撃した。強靱な耐久力を持ったアクアキングも、この威力の前には完全に敗北する。その頭部は粉々に、砕け散った。

「やったあ……ついに終わった」とアストラ。

「アクアキングがやられたぞ！」と喜ぶ山中。

疲れきり、力なく喜ぶ戦士達。エースが、エースキラーとゼットンに言った。

「お前ら、すごかったな……へへ、見せてもらったぜ、ウルトラ魂」
「なっ、なんでそれ知ってやがんだ？」と、エースキラー。

「いや、地球に来てたミラクル星人いただろ？ あいつの魔法のビ
ー玉で、戦況をちよつとだけ見せてもらってんだよ。ジョーニアス
が来てくれたのも、あいつのおかげだしな」

「そ、そうか……」

「照れんなよっ」とエースキラーを叩く。

「う、うるせえっ！」

「へっ、何やってんだか……」

そう言ったゼットンも、どこか照れたような、満足した表情をして
いた。

暴虐！ グランドキング！

アクアキング、エアロキングが倒された頃も、ウルトラの星の闘いは未だにウルトラ戦士側が劣勢だった。

あまりにも多くのメタルモンスが、ウルトラ戦士達を襲い、星を傷つけていた。地上はガボラとネロンガとパゴス。上空はペギラとチャンドラーが埋め尽くす。

ウルトラマン、セブン、ネオス、21でさえも、敵のあまりの多さに苦戦し、未だにウルトラ小学校から離れない状況だった。敵は小学校を取り囲むように、ぎゅう詰めになって襲いかかって来ている。

「ウルトラマンでさえも苦戦する数の敵か……」

とある星で、その模様をテレビで見ている一人の宇宙人が呟いた。

大きな青い体に、両腕はハサミ状。傲慢な顔つきの男である。

「けっ、ついにウルトラの星もおしまいか……」

次に呟いたのは、黒い体に金髪、銀色のマスクをかぶったような宇宙人だった。

「我々も同様の運命をたどることになりそうだな……」

ホース状の口を持った、赤い体の宇宙人が言った。

「今では俺たちはただのザコ……どっちについても、良いことなさそうだな」

白い体に赤い玉が無数に生えたような姿の宇宙人が、嘆くように溜息をついた。

「しかし、役には立ちますよ」

「！？」

彼らの背後から現れた声の主……黒装束に身を包んだその男は紳士然とした口調で、ゆつくりと彼らに向かって歩を進める。

「な、なんだデメエ！」

黒い体に金髪の宇宙人　マグマ星人が突っかかる。

「フッ」

男は、マグマ星人に黒い小さな玉を投げつけた。

「ぐううああああー……っ！」

マグマ星人が、黒い光に包まれる。

「き、貴様、何をした！」

青い巨躯の持ち主　テンペラー星人が、手のハサミから光線を放とうとした。

「あなた達ですよ……！」

「うぐっ」

「ごあつ！」

「ギャあああつ！」

テンペラー星人も、ヒッポリト星人も、ナックル星人も、その暗黒の光に身を包まれていった。

「スペシウム・アタック！」

ウルトラ小学校の闘い　ウルトラマンの拳から一直線に放たれた光線は、直線上にいる殆どのメタルモンスを吹き飛ばした。しかし、横にいたメタルモンスがその隙間に入り込むと、撃つ前と比べて視覚的な変化は無くなってしまふ。

「何も変わっていない気がするの、私だけか？」

ネオスが光線を撃ちながら、汗をタラリと流した。

「さっきから何十体……セブン先輩やマン隊長（ウルトラマンの事）に至っては何百体も倒している筈なのに、ちっとも敵がへっている感触がねえよ！」

21も空中のメタルモンスに光線を撃ち続けながら、焦り顔を見せる。

「しゃべっているヒマがあつたら、とにかく攻撃するんだ！」

セブンが装鉄鋼からさまざまな光線やミサイルを発射しながら、二人に激を飛ばした。

「確実に敵の数が減っていることだけは確かなんだ……俺達が倒れなければ、きつと勝つ！」

その言葉に、ウルトラマンがうなずいた。

「セブンの言う通りだ。しかし、問題はグランドキングだ……タロウ、頼むぞ……」

「たああー……」

巨大な、金色の角を持つ超闘士。ウルトラマンタロウの蹴撃が、グランドキングの巨大な胸装甲にヒットし、その箇所を凹ませた。

「これだけ攻撃を受けておいて、動きが全く衰えないなんて……」

飛びまわりながらタロウと共に闘うバルタン、ザラブ、ダダ、ケムールの鋼魔四天王も、攻撃を続けていた。

「何発必殺技をぶち込んだと思ってるんだよ、一発だけでまともにダメージをあたえられてんの、タロウだけじゃねえか！」ケムールが、装鉄鋼をはめた掌から、エネルギー弾を飛ばす。

「愚痴を言っても始まん！とにかく撃ちこめ！」

バルタンがハサミから全エネルギーを放出する「バルタン・ミクスド・ノヴァ」を撃つ。ザラブやダダも必殺技を放つが、グランドキングには何発撃ってやっと少しのダメージ、といった状況だった。

タロウの攻撃は四天王の必殺技を超える威力を有しているが、やはりグランドキング相手にはあまり効果がない。

「パワーと防御はあるが、スピードとテクニックまで……恐ろしい敵だ。」

そう言ったのは、四天王最強の男ダダだった。確かに彼の言う通り。敵は攻撃力も防御力もスピードもある。まさに最強のメタルモンスだ。何とか持ちこたえている状況で、もし敵がさらなる戦力を隠しているか、多くの増援が来てしまえば、それまでと言って過言ではない。

「くっ」

タロウは迷っていた。この場で、あの宇宙最強の必殺光線、コスモ

ミラクル光線を放つべきかどうか。今この場で撃つて、もし完全に倒すことができなかったら？ その状況で、エネルギーを使い果たしてしまった自分に、敵を倒せるのか？ そう考えていた。

「このままやつても……いや、しかし！」

一度タロウは考えるのをやめ、ストリウム光線のエネルギーを強化して掌から放つ、「ストリウム超光波」を放った。それによって、胸の中心にダメージを受け、後ろへ吹き飛ぶグランドキング。自らが崩した、沢山の建物の残骸の中に身を落とした。

「グオオゴオオオオオオオオオオオオオ！」

「おおつ、すげえっ！」激しい威力に我を忘れてしまうダダ。

「我々も続くのだ！ せんぷうこうりんほうしやせん 旋風光輪放射線！」

闘士ザラブ星人が、立ち上がったグランドキングに対し新必殺技を放つ。これは、以前魔神相手に使用した光輪を発射する「旋風光輪波」の強化版で、前面のあらゆる縦角度に向けて光輪を連射する技である。それらすべてが、巨大な体を持つグランドキングに命中した。

「サイ P S Y バルタンよ、いけえっ！」

闘士バルタン星人が、炎のような姿の、自分の輪郭を写し取ったような分身体 P S Y - バルタンを放った。何十体もいるそれは、それぞれがバルタンの10分の一の力を持っている。全員がグランドキングに向かい、飛びかかる。

「よおっし！ いいぞいいぞ！」

闘士ケムール人も、両腕に装備したパワーグライドから強力エネルギー波「ファイナル・パワーグライド」を放つ。それぞれの攻撃が、ストリウム超光波の当たった箇所に当たり、グランドキングにダメージを与える。

「ググググ……」

そこで、闘士ダダが言った。

「バルタン、その分身……メタルモンス討伐に使えば良かったのではないか？」

「み、みんな、大丈夫か!？」

バルタンが無事だったのは、他の三人がかばったからであった。その理由は明快、P S Y バルタンの消滅を防ぐためである。

「すまん、みんな……俺がドジったせいで!」

「いいさ、バルタン……さあ、タロウと一緒にやっちまいな!」

ケムールはそう言っただけで気を失った。ダダとザラブも、疲れきった顔で意識を失っていた。

「くそ! よくもみんなをやってくれたな!？」

バルタンがハサミの先を敵に向けて吠える。タロウも戦闘態勢に入り、グランドキングを見据えた。

「ゴオオオオ……」

グランドキングは二人を睨みつけ、小さく唸った。

「……」

「……」

「……」

「……くるっ」

大きな音が鳴り響き、瓦礫の山が周囲全域に飛散した。それと同時に、巨大なグランドキングの重厚なボディが、ジェット機のように跳びタロウとバルタンに襲いかかった。

「うわああああああああっ!」

ストリウム光線を撃つタロウ。しかし、弾かれた。全身にバリアを張っているようだった。

「ば、バリアだっ!」

叫ぶバルタン。タロウは、バルタンに向けてこう言った。

「逃げてください! バルタンさんがやられたらP S Y - バルタン

も消えてしまいます！」

「そ、そんなことでき……ああつ！」

巨大な体当たりだった。全てを撃ち滅ぼし破壊してしまうような、史上最悪の体当たりが、タロウとバルタンを弾き飛ばした。

「うごああああああつ！」

「かふ……っ！」

「ゴルガア……！」

着地したグランドキングは、間髪いれずに、宙を舞うタロウを殴り飛ばした。タロウはボールのように弾き飛ばされ、地面に叩きつけられ、バウンドしてまた空中へ放たれた。

「ゴゴッ！」

グランドキングの額の砲台から光線が発射された。それは、空中を舞うタロウに命中した。

「ぐわああああああああああああつ！」

「ガゴーーーーーッ！」

さらに連射が続いた。肩と額の砲台から、とにかく光線が放たれ続ける。そして、それは地に落ちそうになるタロウを宙に舞い上げ続けた。弄ぶようにテンポよく、タロウは撃たれ続けた。

「ぐ、ぐぐぐ……このまま、終わってられるかよ……」

瓦礫の上で、体中から血を流しながらバルタンが立ち上がろうとしていた。

戦え！ 無限の新闘士

「うわあああーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！」

敵の攻撃を受け続け、タロウは意識を失いかけていた。超闘士の状態を解除することはしなかったが、殆ど戦えない状態になっていた。くぐ、ぐっ！ なにか……何か策は無いのか……コスモミラクル光線を、使っておけばよかったのか？」

グランドキングのパンチを受け、タロウの体はすっとなでいった。近くにあった建物を何棟も破壊し、遠く離れた所へ落ちた。

「く……！」

「グオオゴオ……！」

グランドキングが悠然と歩を進める。瓦礫や崩れた建物に隠れたタロウの居場所が正確にわかっていているかのよう。

「グギ……！」

「う……は」

少し休んだタロウは力を振り絞り、立ち上がった。しかしその時、グランドキングは地を強く蹴って、ものすごい速さでタロウの元へと跳んだ。

「っ！」

超スピードの滑空だった。建物を根元から破壊し、グランドキングはタロウの元へ頭から飛び込む。光線を撃ったところで、バリアで跳ね返されてしまうだろうこの事態に、タロウは戦慄した。

「ストリウム超光波……効くだろうか……コスモミラクル光線は……だめだ、今の体力じゃ放つことができない……今はストリウム超光波までが限界だ」

ぐっ

「だったらストリウム超光波を……撃てばいいんだーーーーー！」

「っは、っは、はあ、はあ……」

その時、一人のウルトラ戦士が飛んできた。

「タロウさー！ん！ 大丈夫ですかさー！っ！？」

ヒレのように曲線を描き、正面から見れば三角状の頭に、薄いプロテクターを張ったような胸。そしてその胸に輝くのは、菱形のカラータイマー。左手首には赤く光る玉を埋め込んだブレスレットをはめている。その名は……

「め、メビウス。メビウスじゃないか」

「タロウさん、しっかりしてください！」

その名は、ウルトラマンメビウス。ネオスや21のさらに後輩にあたる、宇宙警備隊学校に通う青年であった。

「こんなになるまで戦って……今すぐ、ウルトラの母の所まで行きましょう！」

「ダメだ、まだ僕はここから離れることはできない」

「えっ」

「まだ倒れていないよ、奴は」

「そんな……！」

グランドキングが立ち上がる。自力で、ずっしりとした巨体を支えている。それに対し、タロウは、メビウスの肩を借りて立ち上がるのがやっとだった。

「どうすれば……いいんだっ」

メビウスはところどころ凹み、空いた隙間からびゅり顔を出すコードや流れ出すエネルギーが不気味ながらも恐ろしい、グランドキングの顔を見上げた。その目には燃えあがるような殺気が込められ、タロウとメビウスを見下ろしている。

「グルガア……」

しかし、まだ攻撃はしてこない。ダメージが大きく、回復を待っているようだっ。

「タロウさん、ここは僕が！ はやく、母の元へ！」

メビウスが言った。それを聞いて、タロウは慌てた。

「な、何を言っているんだ！ 君はまだ学生……こんな闘いができるわけがないだろう！」

しかし、メビウスの決心は、揺るがない。

「いいんです。少しでもみんなを助けられる可能性があるのなら」

「メビウス……」

タロウは、メビウスの学生生活を知っている。成績はトップクラス。ウルトラの父からも期待されている戦士の卵だが、どこかお人好しで素直で、頼りない彼を知っている。

そんな彼が、初めて見せた。自分に危機が迫っても人を助けようとする、平和の戦士の心意気を、タロウははつきりと感じ取る。

「……わかった、君を信じよう」

「あ、ありがとうございます！」

「僕は母の元へ行って、回復したらすぐに戻って来る。その間、君はこれを着て頑張ってくれ」

「こ、これを！？」

タロウは、自分の装鉄鎧を脱ぎ、メビウスに渡した。

「頼むよ、闘士ウルトラマンメビウス」

「……は、はいっ！ 頑張ります！」

グランドキングが動き出した。わずかに雄たけびを上げ、口から光線を吐きだす。

「たのむぞっ！」

タロウは光線を避けつつ、メビウスにもう一度言葉を放ちながら、飛び去った。

「……はいっ！」

メビウスも、敵の足元に飛び込むことで、光線を避けた。

「メビウムシュート！」

手を十字に交差させ（手首どうしをつけるのではなく、右手首を左手の親指の付け根と手首の間に密着させる）、メビウスの必殺光線が放たれる。光線は空を切り、光線を吐きだす敵の顎に命中した。

「がっ！？」

ダメージを大きく受けた頭にさらに衝撃が走り、グランドキングは思わず口を閉じた。光線が口内に吐き出され、爆発を起こした。

「ボゴガアッ！」

「やった……いくぞっ！」

メビウスが飛んだ。素早く敵の頭上に上がり、キックを放つ。

「ヤアッ！」

「グッ!？」

傷口に蹴りを入れ、そのまま回転。それによって摩擦熱で炎を起こす「メビウスピンキック」が発動した。

「ゴッ！」

炎と回転蹴りの二連ダメージで、さらに傷口を広げられたグランドキング。二股尻尾の先端を上に向け、そこから光線を発してメビウスを追い払おうとする。

「うっ、危ない！」

メビウスはとつさに、円形のバリアー「メビウスディフェンスサークル」を発動して、光線を防いだ。かに見えたが、バリアーは破られ、メビウスは光線（威力は落ちているが）をともに食らってしまう。

「うわああああっ！」

メビウスは、一撃で体力の殆どを持っていかれた。そのまま、地に落ちる。

「ぐあっ！」

地に落ちたメビウスは、立ち上がろうとしたが、グランドキングはそれを許さない。肩のビーム砲がうなり、赤い光線を撃ち放つ。

「く、う、うああああっ！」

転がりながら攻撃を避けるメビウスだが、瓦礫に当たって、腕や足に傷を負ってしまい、そのスピードも徐々に下がっていった。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

その頃タロウは、ウルトラの母のいるであろうウルトラタワーに向

かつて飛んでいた。あちこちにメタルモンスの残骸が見える。

「他のメタルモンスはどこだ？ まさか……全て小学校に動員されているんじゃない」

ボスの闘士ザム星人を倒し、戦艦ドレンゲランを叩いたは良かったが、これでは……と思うタロウ。一瞬、小学校を見に行きたくなかったが、そんなことをしている暇はない。

「は、早く母に……」

そこに、二人の影が飛んできた。片方はバルタン星人、もう片方はウルトラの母だった。

「タロウ！ グランドキングは倒したの！？」

「母さん！ どうしてここに！？ それにバルタンさんも」

バルタンが説明した。

「あの後、絶対にウルトラの母の力は必要になると踏んだんだ。だから連れて来たってわけさ」

「それよりタロウ、グランドキングはどうしたのですか？」と母。

「っ、そうだった！ はやく、僕を回復してください！ 今、メビウスが戦っているんです！ たったの一人で！」

タロウから事情を聞いた母は、すぐに回復技「マザー光線」でタロウの回復に当たった。しかし、タロウの受けたダメージは、なかなか全回復しない。タロウの体力の高さとダメージの深さに、母は改めて驚いた。

「よし、メビウスの方は俺が加勢してくる」

そう言つて、バルタンは、グランドキングのいる方向に飛んでいた。

「気をつけて、バルタンさん！ あなたがやられたら、P S Y バルタンも」

「大丈夫だよ、任せとけ！」

タロウは、グランドキングの方を見て、二人の闘士の無事を祈るのだった。

発動 コスモミラクル光線

ウルトラマン達の長い戦いとPSY-バルタン軍団の加勢によって、やつとのことでメタルモンス軍団との数に減少を感じてきた戦士達は、士気を取り戻して戦えるようになっていた。

「ちえっ、俺達より先輩のくせに、だらしない奴らだぜ」と21は余裕交じりに言った。

「無駄口を叩くな、それより一体でも多くの敵を、一秒でも早く倒すんだ」とネオス。

「わかってるよ、ったくお堅いな」口をとがらせる21だった。その足元が、急に盛り上がる。

「っ!？」

「ギャオーーーーーッ!」

地を砕いてそこに現れたのは、エンペラ陸軍の闇闘士、テレスドンであった。

「くらえい、ギャオッ!」

叫びながら意気揚々と、口から火を吐くテレスドン。

「うわっ!」

顔面に火を吐かれ、たじろぐ21。

「大丈夫か!」

ネオスが、光線技の構えをとる。

「安心しな、こんな奴にはやられないぜ! ……うっ!」

テレスドンに気を取られ、メタルモンスネロンガの角から放たれる光線を浴びてしまう21。

「21!」

「すまねえ、こいつは任せたぜっ!」

力を振り絞り、21は肩鎧を変形させてグローブ状にし、テレスドンを殴りつけてネオスの方に吹っ飛ばした。そして、ヴェルザードでネロンガを真っ二つに切り裂き、腕をし字状に組んで「レジア・

ショット」を別のメタルモンスに放つ。

「わかった、この敵は私が！」

自分の方に飛ばされてきたテレスドンを、ネオスは思い切り蹴り飛ばした。

「ギャオツ！　いつていつ！」

「喰らえ！　フェザーブレイズ！」

ネオスの装鉄鋼の翼部分から、エネルギーが放出され、それは一つのエネルギーの塊として集約された。必殺技「フェザーブレイズ」を撃つネオス。

「おおつとい！　あぶねえ！」

しかし、テレスドンはそれを素早く地に潜ってかわした。そして、地中から素早くネオスの背後に回り、背中に装備した巨大ドリルで背中を突いた。

「ぐふつ、うがあああつ！」

前のめりに倒れるネオス。

「ギャオオオつ！」

さらにテレスドンの吐く火炎が、ネオスの体を焼く。フェザーブレイズを放つための翼が、根元から解けてぼろりと落ちた。

「ギャオオオつ！　どうだ、新入り闘士めい！」

さらにドリルで突きにかかるテレスドン。

「負けていられるかつ！」

背後から突進してきたテレスドンをジャンプで避けるネオス。そして、上空から、両腕をクロスして放つ金色の光線技「ネオマグニウム光線」で攻撃する。

「ごはあああああー！　つ！」

テレスドンの装鉄鋼が砕け散っていく。

「とどめだ、テレスドン！」

ネオスがもう一度ネオマグニウム光線の構えをとった瞬間、近くの地面がボコッと崩れ、中から小さなテレスドンが現れた。

「ま、まって！　兄ひゃんを殺さないで！」

「で、デットン！」

現れたのは、テレスドンの弟デットンであった。まだあどけない小怪獣を目の当たりにし、ネオスは一瞬気が抜けた。

「え、エンペラ星人にめいれいされただけなの、殺さないで！」

テレスドンの前に立ちあがるデットン。ネオスは、ふふつと笑って、戦いの構えをといた。

「わかったよ、デットン。君のお兄さんは、殺しはしない」

「い、いいのかい、ウルトラマン……」

テレスドンは、驚いた表情でネオスに言った。するとネオスは、こう返した。

「『ウルトラマン』ではない。私は闘士ウルトラマンネオス。覚えておいてくれ」

その頃、タロウは再び、グランドキングと相対していた。空に浮かぶタロウの後方には、ダメージでボロボロになったメビウスとバルタンが、瓦礫と化した建物の上で戦いをじっと見ている。

「ごめんよ、二人とも。今すぐ、終わらせるから……」

タロウのやさしい目つきが、燃える瞳に変わった。同時に、角を巨大化させた超闘士になっていた。

「さあっ！」

右腕を勢いよく斜め上に上げ、かまえる。そして、体内のエネルギーを敵に向ける。

「行くぞ……コスモミラクル光線！」

「ゴゴゴガー……」

グランドキングのパンチが、タロウに決まった。しかしタロウは、動かない。エネルギーを、じっと集中させる。コスモミラクル光線を、より高めるために。

「あの一撃で……全く動かないなんて」驚くメビウス。

「強い！ 敵のダメージを計算に入れても、これは強い！」とバルタン。

「私達も行こう」

二人の後ろで、声がした。

「お、お前ら！」

バルタンは思わず驚嘆の声を上げた。そこに立っていたのは、ダダ、ザラブ、ケムールの、鋼魔四天王のメンバーであった。

「いや、お前一人に苦勞かけたからな……ここは俺達でやってやるぜ！」

ケムールの言葉を合図に、三人は飛び立つ。

「援護するよ、タロウ！」

ザラブの旋風光輪波と、ケムールのファイナル・パワーグライドが敵の足を撃つ。バランスを崩すグランドキング。

「よし、次は私だ！ クローススラス！」

ダダの新技、クローススラス。両掌にエネルギーを込め、高速で射出する技。これを喰らった者は、真つ二つになっってしまう。

「はああっ！」

しゅばつ、という音が鳴り、グランドキングの角が一本、切れた。

「おおつ、見たか、どうだっ！」

角は、巨大な音を立てて地面に突き刺さった。

「待て待てえ、俺にもやらせてもらうぜ！ みんなで作ったあの技を、試す時だ！」

そう言つて、バルタンは三人の元へ飛んだ。そして、全員でエネルギーを集中する。

「よし、手早く発するぞ！ 超魔集包陣！」
ちゅうまじゅうほうじん

エネルギーの塊は拡散し無数の光の玉となつて、タロウを攻撃しようとするグランドキングを取り囲んだ。

「ゴ……グオオ？」

「くらえっ！」

四人が叫ぶと同時に、光の玉はグランドキングに集中された。激しい爆発が起こり、グランドキングは全身を爆炎に包まれる。

「ゴガアアアアアアアア！」

「いまだ、タロウー……！」

「コスモミラクル光線！」

タロウの体全体から、虹色の光線が放たれる。強力なエネルギーは、全てグランドキングに注ぎ込まれる。

「オゴオオオオオオオ…… オオオオオオ……」

「あ……あ……あ……」

悶え苦しむグランドキング。それを見て、涙を流すメビウス。

「オオオオオ……」

ぐらぐらと崩れるグランドキング。体が一つ一つの塊に分かれ、ロボロとそれらは落ちていく。土の塊のように。

「アゴオオオ……」

それが、グランドキングの最後の声だった。それからは何も言わず、ただ自らの終末を感じつつ、崩れていくのみだった。

「終わった……倒したんだな」

「ああ、俺達の勝ちだ」

燃えて崩れていくグランドキングを見つめながら、勝利をかみしめる四天王。

「いや、まだまだ終わりはしません。エンペラ星人を倒さなくてはならないんだから」

タロウは、エネルギーを消費して疲れ切った体で、四天王に言った。「そうだな……」とバルタン。力尽きて、倒れた。

「う……グググ……」

そのまま、四天王たちも倒れていった。満足感を胸にして。

「はは……まだメタルモンス達が残っているというのに」

タロウはやさしく笑って、メビウスの方を向いた。

「た、タロウさん」

メビウスは、立ち上がるうとして、崩れ倒れた。

「いたた……」

「メビウス」

メビウスに、やさしく語りかけるタロウ。

「ありがとう。君が居てくれなかったら、僕もみんなもやられていた」

メビウスは慌てて立ち上がり、ピシッと起立する。

「は、はいっ、あ、ありがとうございますっ！ これからもがんばります！」

「ああ、ガンバレっ！」

タロウは多少面食らいながらも、しっかりとメビウスを見つめ、力強く言った。

それから少しして、ウルトラマン達の活躍によって、エンペラ陸軍は全滅した。

暗黒鎧闘士

エンペラ三軍団とグランドキング、エアロキング、アクアキングの三大メタルモンスが滅び、ウルトラの星、地球、惑星ポポルの危機は一応の終局を迎えたと思われていた。

しかし、グランドキングとの戦いの最中にウルトラの星で、さらなる一つの戦争が起きはじめていた。

「グアアアハハハハッ！ 我ら暗黒鎧闘士！」
ダイクブレスト

黒く輝く金属の肉体を持つ、8人組。「暗黒鎧」に全身を包みこんだ新たな敵が侵入していたのである。

二本の長い首のそれぞれに狂暴性あふれる角のある別々の顔を持ち、胸にも顔、二本の尻尾にも鳥のような顔があり、さらに四本腕とういでたちで、この8人組のリーダーと思われる「ギガマイラ」が、高らかに笑う。

ここはウルトラタワー。現在、ウルトラキーとウルトラミラーを守っている中心の塔。

「くっ、また新たな敵がこようとは！」

タワーにはウルトラの父と十数名のウルトラ戦士がいた。青い体を持つ科学者「ウルトラマンヒカリ」もその中にいた。

「ウルトラの父よ、ウルトラキーとウルトラミラーをよこすんだな」
「お前達に渡しはしない、早々に立ち去れ！」

ウルトラ戦士の一人が猛々しく叫ぶ。

「ウルサイッ！」

顔のない、宇宙船が分離して人型に集合してその形を作ったような暗黒鎧闘士『ギガドラ』が、そのウルトラ戦士に丸いエネルギー弾を撃ち込み、沈黙させた。

「ああっ、トロム！」

別のウルトラ戦士が声を上げた。すると、次に、ギガマイラが右の頭の角から電撃光線を放ち、トロムと呼ばれたウルトラ戦士に駆け

寄ろうとしたウルトラ戦士の足元を撃つ。

「うあわっ！」

驚き、尻もちを突くウルトラ戦士。

「ハハハ、まぬけな姿だ。こんな奴がこんな大切な場所を守っているとはな」

巨大な翼を背中に持ち、怒り叫んでいるような恐ろしい顔つきの「ゾグテン」が、甲高い声とは裏腹に意外にも冷静な口調で言った。そして、頭が巨大な螺旋を描いた殻のような形をし、前面に上下が逆転した不気味な顔を持つ暗黒鎧闘士が一步前に出て、ゆっくりと話し始める。

「さて、グダグダ言っても始まらないのでね、ちょっとした自己紹介をして、すぐに戦闘と行こうじゃないか。私はガタノズだ」

「わたしはイズマラ」

体中に不気味な顔を持ち、頭部と思しき場所に巨大な一本角を持つ暗黒鎧闘士も、自己紹介した。

「俺はダーカース。よろしくな」

額にクリスタルを掲げているという以外の点は、全てにおいてギラギラとした野性的な姿と表情をした暗黒鎧闘士ダーカースが、ウルトラの父を見て言った。

「ワシはキングボスじゃっ」

狂暴という言葉を実現したような野蛮な顔をして、羽根を背に刺を胸に持つ暗黒鎧闘士が、両手を振り上げる。

「最後に、ボクはサンドラだよ。どうも……」

三本の角を生やして、直角になっている長い首に、花のような形をした両手の、暗黒鎧闘士サンドラ。おどおどしたしゃべり方だが、彼が喋るたびに、黒い粒が足元にパラパラと落ちる。

「暗黒鎧闘士……聞いたこともない敵だ……」

ウルトラの父は戦慄した。しかし、すぐに戦闘の構えをとった。

「ここは絶対に破らせんぞ、私達が居る限りな」

「私達も、戦うぞ！」

ヒカリ達ウルトラ戦士も、ファイティングポーズをとって、敵の攻撃に備える。暗黒鎧闘士達は、見下したような笑みを浮かべて、戦闘態勢に入る。

「ハホーーーーー」

おどおどしていたと思っていたサンドラが、一番初めに奇声をあげて、口から猛火炎を放つ。

「うおおっ！」

ウルトラ戦士のうち2人が、火にのまれた。もがき苦しむ戦士達。

「な、なんてこった！」

「は、早く攻撃を……」

燃える火炎の中で、片方の戦士が仲間を促した。戦士たちは、表情を変え、敵に向かっていく。

「行くぞ、暗黒鎧闘士！」

ウルトラの父が、野性的な暗黒鎧闘士ダーカースに飛びかかり、チョップを放つ。

「フフフ……俺を選んでくれるとは、ありがたいぜっ！」

ダーカースのパンチが、先に放たれたはずの父のチョップよりも早く、相手の顔面を捉える。

「グふっ！」

「フフ……ううっ!？」

父のチョップは、ダーカースのパンチを受けながらも、敵の脳天を打っていた。

「ハハッ、さすがだウルトラの父よ。そうでなくっちゃあおもしろくねえ！」

ダーカースはさらにパンチを打ち込む。父はそれをかわしながら、角から発せられる「パワービーム」で攻撃する。

「グウオッ、これは効くぜ……おもしれえ！」ダーカースは笑っていた。

「カアアアッ！」

ダーカースの額のクリスタルから、一閃。強力な光線が放たれる。
「むっっ！」

ウルトラの父が両手をし字型に組んで放つ必殺技、ファザーショットで相殺する。互角の威力だったがしかし、父自身は危機を感じていた。

「クレセントショット！」

三日月型の光弾を放つ父。それと同時に、敵に向かってダッシュした。

「ヒヒッ！」

ダーカースは、クレセントショットを完全に無視した。そして、ダッシュして来た父の体を受け止める。同時にクレセントショットが命中し爆発を起こすが、ダーカースは表情一つ変えずに父を投げ飛ばした。

「うがあああっ！」

父は頭から叩きつけられた。そして、勢い良く踏みつけられた。顔を。

「くっ、うぐっ」

「ハハハ……あんたがこれじゃ、他の奴の戦いを見るまでもないなあ。俺は本当に幸運だよ。ここで一番強いあんたとやれたんだからな」

「ぐ……」

父は、敵の足に踏みつけられながらも、ウルトラホーンで周囲の状況を察知していた。状況は想像よりはるかに悪かった。科学者であるウルトラマンヒカリが、ゾグテンを相手にそこそこ善戦している以外は、戦士であるはずの他の全員が大悪戦という状態だったのだ。「しかし、ヒカリだけでもうまくやってくれているのならば、まだ最悪ではない！」

そう言つて父は、ダーカースの足を両手でつかみ、転ばせた。

「おっ！」

どしんと床に体の前面を叩きつけられたダーカース。父はその足か

ら手を放さず、そのままジャイアントスイングに持ち込んだ。

「はああーーーーーっ！」

父に投げ飛ばされたダークスは、一番残虐にウルトラ戦士を痛めつけていた、リーダーのギガマイラに激突した。

「ぐごあっ！」

「な、何をしている！」

そして父は、両掌を開き腕を上下に開いた、見慣れない構えをとった。

「ん？ なに？」

そのかまえの中にある強大なエネルギーに、サンドラが気づいた。その刹那、父の肉体から驚くべき量の大エネルギーが放出された。

「……秘技・ビッグ光線！」

ビッグ光線とは、かつてウルトラの星で『最大の威力』を持っていた超絶光線である。後にその称号はゾフィーのM87光線に奪われることになるが、その破壊力は未だ、敵にとっては脅威である。

「グオアアアアア……！」

その光線は、3人のウルトラ戦士を同時に相手にしているギガドラに命中した。ギガドラは光線の流れるままに吹っ飛び、その一部が砕けた。

「グガガガ」

砕けたのは腕だった。そこから、一本の真っ白な生身の腕が現れた。その腕には、赤い球のようなものが張り付いたように生えている

「そ、その腕は、ナツクル星人！」

父が叫ぶと、ギガドラはすぐに、父に向かって飛び込んだ。

「お、おい、俺の敵だぞ！」

ダークスが制止しようとしたが、ギガドラは聞かない。

「オノレ、オノレウルトラノチチ」

ギガドラの体の中心部が光を発し、そこからまばゆく輝く閃光が放

たれる。父はそれをファザーショットで迎撃しようとしたが、横からもう一閃の光がとどろき、ギガドラの胸に命中した。

「オゴゴゴオゴ！」

「ぞ、ゾフィー！」

そこに現れたのは、宇宙警備隊隊長ゾフィーだった。胸のスターシンボルが、輝いている。

「父よ、私も戦わせていただきます！」

「おお、頼むぞ！」

ギガドラの体は、すでに胸まで失われ、ナックル星人の姿が大きく表れていた。

暗黒鎧闘士（後書き）

今回の敵は、ゴードス五人衆をモデルに平成シリーズの強敵を使わ
せていただきました。

それぞれ

ギガマイラ 「大決戦！超ウルトラ8兄弟」のギガキマイラ

ギガドラ 「ウルトラマンコスモスVSウルトラマンジャスティス」
のギガエンドラ

ゾグテン 「ウルトラマンガイア」の根源破滅天使ゾグ。（ゾグ＋
「天」使のテン）

ガタノズ 「ウルトラマンティガ」のガタノゾーア

イズマラ 「ウルトラマンネクサス」のイズマエル

ダーカース 「コスモス」のカオスダークネス（もじりが多くなっ
てますが）

キングボス 映画版「ガイア」のキングオブモンス

サンドラ 映画版「コスモス2」のサンドロス

です。

よみがえった魔王……？

ゾフィーの登場により、ウルトラタワーの戦いに動きが見え始めていた。ナツクル星人の肉体に覆いかぶさっていた暗黒鎧ダークブレストギガドラはゾフィーと父のダブルパンチで頭を砕かれて完全に崩壊。中身のナツクル星人が横たわる。

「これは、ゴードスの使っていた邪生鋼エヒルブレストにそっくりだ」

邪生鋼とは、暗黒鎧と同じで、意志を持った悪の装鉄鋼である。これを着たものは二十倍の強さを得るが意識を占領されてしまう。

「その通り。我らは宇宙に散らばるバカ怪獣とザコ宇宙人の肉体を奪ったのだ」

リーダー、ギガマイラが怪しく笑う。

「バカ怪獣……ということは、その中には怪獣もいると言うことか」
ゾフィーがそう言うのと、ギガマイラは何も言わず、ゾフィーに飛びかかった。同時に、ダーカースも父に飛びかかる。

「くっ！」

二人は敵に応戦し、激しい格闘戦を繰り広げる。

「おまえらよわい」

イズマラは最も多くの戦士達を相手にしているにも関わらず、余裕だった。体中にあるさまざまな顔から、火炎、冷凍波、電撃、エネルギー光線、毒ガスが放たれ、ウルトラ戦士らを苦しめていく。

「ハハハハハ、なかなかやるじゃないか、青い体の科学者殿」

ヒカ리를相手にしている暗黒鎧闘士ゾグテンが、甲高い声を出して笑う。ヒカリは、どうすれば勝てるか考えを巡らせていた。

「ここはこの方法を試してみる他ないか」

ヒカリの腕に輝く、ナイトブレス。そこから光の剣「ナイトビームブレード」が飛び出す。

「ホオ」

そしてヒカリは、ゾグテンに飛び込む。そして、ナイトビームブレードを振り上げた。

「ハハハハハ」

ゾグテンは再び甲高い声で笑い、口から電撃を放つ。

「ぐあっ！」

ブレードを振り下ろす直前に、ヒカリは撃たれ地に落ちた。

「猪突猛進な技が通用すると思うてか」

ゾグテンは、足元に転がるヒカリを見下ろした。

「まだまだ！」

ヒカリは後転して距離をとり、再び飛び上がる。

「はああああっ！」

「マヌケめ」

ゾグテンの両手から光の糸が飛び出る。それがヒカリに絡まって、動きを封じる。

「しまった！」

「死ね！」

ゾグテンが口から電撃を吐こうとした瞬間、ヒカリの表情が変わった。するとヒカリの右腕から、ナイトブレスがはがれおちた。そして、落ちたナイトブレスの先端から放出されるブレードが、糸を切り裂いた。

「な！？」

自由になったヒカリは、ナイトブレスを拾い上げ、ブレードを消し、両手を十字に構えた。スペシウム光線と違う点は、右手が前に出ている点。そして、必殺技「ナイトシュート」を放つのであった。

「ぐうっっ！」

青い閃光がゾグテンの顔面に放たれる。さらに、ヒカリはゾグの目に光線が当たるように手をずらす。視界を遮られたゾグテンは、ヒカリの次の一撃を読めなかった。

「はああっ！」

ヒカリの一撃。ナイトビームブレードで、ゾグテンは顔面にさらに傷を負った。

「ぐくふっ」

「たああああっ！」

さらに連続で、ゾグテンの顔が切り裂かれていく。

「うぐ、ぎいい、貴様っ、やめろ！」

ゾグテンは怒りをあらわにし、電撃を吐いてヒカ리를後ろに吹き飛ばした。

「うがあっ」

「消え去れえ！」

ゾグテンは突進した。ヒカリに向けて、全エネルギーを前面に集中し、低空に飛んだ。

「今だ！」

ヒカリはジャンプした。ジャンプして、ゾグテンを飛び越える。そして、上を振り向いて電撃を吐こうとするゾグテンに向けて、剣を振り上げる。

「おそいわあっ！」

ゾグテンが電撃を吐く。やや高い上空にいるヒカリは、剣が絶対に当たらない場所にいる。しかし、ヒカリは、その場で剣をふるった。「ブレードショット！」

剣先から放たれる光弾、ブレードショットが、電撃をくぐり抜けて、ゾグの顔面に命中した。

「ぎっぎぎいい！」

「お前はお終いだ！」

素早く降り立ったヒカリは、ナイトビームブレードの一撃で、敵の顔面の傷を集中的に切り裂いていく。傷は見る見るうちに広がり、やがては崩壊に至った。

「ぎゃががが……そんなあ……」

最後の言葉を発し、ゾグテンはバラバラになってその姿を消した。残ったのは、彼に操られていた泥棒怪獣ドロボンだけであった。

「はぁ、はぁ……これはど、ドロボン？　やはり、ゾフィーの言っていた通り、怪獣ものつとられていたのか」

疲弊したヒカリがあたりを見回すと、ウルトラの父とゾフィーが敵と互角に戦っている以外、全ての戦士が劣勢で、ボロボロの状態だった。

「ウルトラハンマー！」

ウルトラ戦士の一人が、左腕のブレスレットをハンマーに変えてキングボスに殴りかかるが、キングボスのパンチ一発で粉々に打ち砕かれた。そのウルトラ戦士は絶望に打ちひしがれながら、キングボスの口から放たれた「クリメイト光線」に倒されていった。

「グフフフ……」

「貴様！」

ヒカリがキングボスに向かおうとした瞬間、ウルトラ戦士の一人がヒカリを突き飛ばした。

「うわっ！　何を……」

「！？」

ヒカリは目を見張った。そのウルトラ戦士は、石に変わっていたのである。

「私だよ。ちゃんと、見ていないといけないな」

ガタノズだった。ガタノズは口から敵を石化させる光線を発することができる。ニタニタと不気味な笑いをたたえるガタノズ。そして、キングボスもこちらを向く。ヒカリは戦慄した。

その時、ウルトラタワーの入り口付近に、一人の男が現れた。

「俺が出るまでもないと思ったが……そうもいかないようだな」

「だれだ？」

入口付近で闘っていたイズマラがその男の存在に、気づいた。

「……ザコが」

拳の一振りで、イズマラは後ろへ吹っ飛び失神した。

「……かはっ」

「暗黒鎧闘士……もう少しはやってくれると思ったんだがな」

そして、黒い肉体に、青白く輝く装鉄鋼。目は青く鋭く、ギラギラとした闘争心を表している。

その姿を見たウルトラ戦士達は、一様に一つの名前を呼んだ。

「メフィラス！」

「な、なにっ、メフィラス……!？」

ギガドラが戦いの手を止め、メフィラスを見やった。そこには、確かに、メフィラスが立っている。

「ど、どういうことだ、復活したのか!？」

父が、驚きを隠せないといった表情で、大きく空気を吐きながら、そう言った。

「メフィラス星の新技术……で命を生み出せたのだよ」

メフィラスは静かだった。静かに歩を進め、静かに語る。そして、ギガドラの目の前まで行った。

「マヌケが……!」

メフィラスの一撃が、ギガマイラを通路の奥まで吹き飛ばす。あまりの強さに、戦慄する暗黒鎧闘士達。

「あ、あっちにはウルトラキーとミラーが」

ウルトラ戦士の一人が、思わずそう言ってしまった。一変して目を光らせる暗黒鎧闘士達。

「近寄るなッ！」

メフィラスが一喝した。暗黒鎧闘士は全員、すくんでその場から動けなくなった。たった一人、戦闘狂のダークスを除いて。

「へへ……あんた、おもしれえなあ……」

メフィラスはダークスに目もくれず、両拳を前に出して、そこか

らギガマイラに光線を撃ち込んだ。

「うわああっ！」

ギガマイラはそれをかわした。雷のようなその光線は、壁に穴をあける。

「ああっ、あそこは……」

ゾフィーが叫んだ。その壁は、ウルトラの星で最も強固な壁であり、その奥には、ウルトラキーとミラーが同時に保管してあったのである。壁が崩れて、キーとミラーが丸見えになった。

「まずい、ギガマイラがあれを手にしては……」

「ならば、俺が手にすればいいッ！」

メフィラスが跳んだ。跳んで、高速でキーとミラーを抱きかかえた。

「メフィラス！ 秘宝を頼む！」

父が叫ぶ前から、メフィラスの行動は決まっていた。キーとミラーを抱きかかえ、一気に入口の方まで飛び、そしてそのまま、ウルトラタワーから出て行ってしまったのである。

「……なに？」

メフィラスの姿は、ものすごい速さで小さくなっていき、すぐに見えなくなった。

「め、メフィラス………どういうことだ！」

「おまえらばか」

イズマラがゆっくりと立ち上がり、嘲笑った。

対決！ 暗黒鎧闘士

「ま、まで、メフィラス！」

ウルトラの父が追った時にはもう遅く、メフィラスは空の彼方へ消えていた。

「ば か」

「ぐふっ」

動揺した父は、イズマラの鋭い角を背に突き立てられ、倒れてしまった。

「だ、大隊長！」とゾフィーが叫ぶ。

「イズマラっ！ てめえ、俺の敵を！」

ダーカースが吠え、イズマラにつかみかかる。

「やめろ、仲間割れをするな！」とギガマイラが制止した。

「チッ！」ダーカースは、イズマラから離れ、口から唾を吐いた。

「みんな……もう、ここいいよね」

その時、サンドラが口を開いた。ぼろりぼろりと、黒い粒が落ちる。

「ギガマイラ、もういいよね」

サンドラの口が、等分に四つに割れた。一瞬震えるウルトラ戦士達。

「ああ、もういい。この場に用は無い」

その言葉と同時に、サンドラは口と目を大きく開く。

「きゅかーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！
っ！」

その全身から、真っ黒な煙が噴き出し、タワー内部に一瞬で充満した。

「う、うぐわあああ……こ、これはっ！ この煙は！」

この煙は、ウルトラ戦士達の肉体を一気に蝕んだ。力が抜け、痛みが全身をかけ回りながら神経細胞の一つ一つを刺激する。

「うぐああああ……ま、まずい……！」

次々と煙の中で倒れて行く戦士達。そしてゾフィーもついにその力

に耐えきれず、倒れてしまった。

しかし、一人平気な者がいた。ウルトラマンヒカリである。右腕に装備したナイトブレスは、重装鉄鋼と同じように光の力を増幅し、毒の煙を防いでいたのだ。ヒカリはすぐに煙を掻き分け、外へ出た。「やはり！」

案の定、暗黒鎧闘士らは外へ出ていた。上空へ飛んで行こうとする彼らに、ヒカリはすぐさまナイトシユートを撃つ。

「おっと！」

ナイトシユートは、ガタノズに当たった。

「ザコめ……ゾグテンをたおしたくらいでいい気になったな。はあっ！」

ガタノズは、足に負傷しながらも、口から石化光線を放つ。

「っ！」

しかし、それがヒカリに届くことは無かった。石化光線は、一閃の光に阻まれた。

「だ、誰だ！？」

「こんな所にまで敵がいるなんて……いくぞっ！」

そこに現れたのは、超闘士タロウであった。ウルトラの母にエネルギーを再び回復されており、高速で飛んで、ガタノズを殴り飛ばす。「ぐあああっ！」

そのまま何もできずにただ地に落ちるガタノズ。

「己、超闘士だからって舐めるでないわあ！」

キングボスが力にものを言わせ、タロウに殴りかかる。しかし、超闘士の力は彼を大きく上回っており、手を水平にのばして放つ「シューティングビーム」で反撃すると、キングボスは一発でその腕を碎かれた。

「が、はおおおおおっ！」

碎けた腕の中から出てきたのは、ヒッポリト星人の腕であった。タロウは隙を逃さず、敵の顎を蹴り上げる。

「ぐひっ！」

顎にひびが入ったキングボスだが、胸の刺を一気に伸ばしてタロウをその間に入れ、噛みつかせるようにそれを閉じた。

「あっ!？」

タロウは、キングボスの伸ばした刺につかまる形になった。

「う、うごけまい！」

「ふうっ」

しかし、タロウは軽く息を吹いた。

「ぬ!？」

そして、タロウは角から「ブルーレーザー」を発して、キングボスの体に浴びせる。

「うがああああー!」

ビキ ビキ ビキ

一気にヒビを増やしていくキングボス。ギガマイラは、不満そうな顔で、タロウに向けて二つの顔から光線を吐く。

「おっと！」

タロウは、自分を捕らえていたキングボスの胸の刺をかるく打ち破り、光線を避けた。そして、腕をクロスして、「ネオストリウム光線」で反撃した。

「がぎやおおおおおおおおおおおおおおっ!」
ギガマイラは一瞬で粉々になった。中からはマグマ星人がでてきて、そのまま地面に落っこちた。

「ま、マグマ星人? これは一体。それにあっちはヒップリト星人の腕が……」

「す、すごい、これほどの力があるなんて、これが超闘士!」
戦いの一部始終を見ていたヒカリは、あまりの超闘士タロウの強さに驚愕していた。

そこに、さらにウルトラマンが飛んできた。

「ウ、ウルトラマン！ 最強のウルトラマンまで！」

「タロウ！ これは一体……」とウルトラマン。

「闘士マン！ こいつらが、ウルトラタワーを襲ったようなんです！」

「な、なんだあの煙は……む、その君、中に誰がいるのか！？」

ウルトラマンは、ヒカリに尋ねた。ヒカリは、父やゾフィーが中で倒れていることを告げた。

「ならば、父達を助けてくれ！ なるべく早く頼むぞ！ 私達も、すぐに終わらせて手伝う！」

ヒカリは、すぐに返事をして、タワー内に駆け込んだ。

「な、何を……！」

いきり立って襲いかかる暗黒鎧闘士らだったが、超闘士が二人揃ってはまるで勝ち目なしだった。真っ先にキングボスが叩き割られ、イズマラも体中からエネルギーや火炎などを放出したもののバリアーで防がれてダブルエネルギーキックで粉々。先ほどタロウに吹き飛ばされたガタノズも、遠くから石化光線を放つも、ウルトラマンがスペシウム光線で反撃して一撃で吹き飛んだ。

「あ……あ……」

残るはサンドラだけだった。二人に挟まれ、おびえたような声を発するサンドラに、二人はいささか面食らっていた。しかし、それはサンドラが普段から呼吸のように発しているだけの声であり、彼の精神状態とは何も関係がなかった。

「あきや——————！！」

悲鳴のような声をあげ、サンドラは全身から黒煙を噴き放つ。しかし、超闘士の二人のオーラにそんなものは通用せず、最後はタロウの「アトミックパンチ」によって、粉々に砕け散った。

「ぐ……っ」

中から出てきたのは、アストロモンスであった。アストロモンスは、何も言わずに崩れた。タロウはアストロモンスを抱え、一息ついた。

「ふう、何とか終わりましたね」

「ああ。なめてかかつては危ない相手達だった。しかし、これでの星は守られたな」

「はいっ！ あ、早く彼を手伝わなくては」

それから、タワーから父やゾフィー、ウルトラ戦士達が運び出され、暗黒鎧闘士に乗っ取られていた宇宙人、怪獣らとともに並べられたガタノズに石化されたものも、ガタノズの死と同時に元の姿に戻っていた。ただし、そのせいでサンドラの黒煙を吸ったが。

「テンペラー星人にヒツポリト星人、ナツクル星人にマグマ星人。

彼らは、かつて強豪宇宙人と呼ばれていた者達ですね」とヒカリが言った。

「ああ。さらにこちらは、ドロボンにダストパンにアストロモンス。第三回銀河最強武道会で、パワードに軽く倒された者達だ」とウルトラマン。

「どれも、かつてはボク達と闘った強敵……後に強さについていけなくなってしまったヤツらだ」救護にやってきたユリアンら銀十字軍のメンバーを迎えながら、タロウが言った。

「彼らは意気揚々と大会に参加しながらも簡単に破れた……その精神的なダメージや人々からの白い視線をうけて悔しがっていたに違いない。そこをエンペラ星人に利用されたのだろう」

その時、ヒカリは重大な事実を思い出した。ひきつった顔でウルトラマン達に頭を下げる。

「そ……そうだ、大変です！ メフィラス大魔王に、ウルトラキ―とウルトラミラーを奪われました！」

「な、なんだって……！？」

ウルトラマンとタロウは、この事実に驚愕した。ウルトラキ―とミラーが奪われたことよりも、その犯人がメフィラス大魔王だということの方が驚きであった。

「め、メフィラスさんが、生きていたってこと……ですか!？」

「そ、そんなはずは……」

ウルトラマンは、以前夢の中に出てきたメフィラスの事を思い出していた。そんな彼が、復活したのはともかく、敵に回ることなど考えられない。そこで、ウルトラマンは一つの結論に達した。

「そ、そうか。別のメフィラス星人だ! それに違いはない!」

「しかし、父もゾフィーもメフィラスに会って、違和感なく話していたようですが……」とヒカリ。

「そんなのさあ、戦いの中だったんでしょ? いくら父やゾフィー隊長でも、わかんなかったかも知れないじゃない」と、ユリアンが顔を出した。

その頃、エンペラ星人の元に、三大秘宝がすべてそろっていた。

「良くやったぞ、闘士メフィラス星人」

「ハッ」

「お前がここまでうまくやれたのも、奴のおかげだな」

エンペラ星人の横にいる三人の闘士の内、一人がそう言った。

「フフッ、嫉妬かな」

呼ばれた男が、メフィラスを睨む。

「だまれ、だれが取ろうが関係無い。全ては皇帝のためだ!」

「下らん小競り合いはよせ。それより、ジェロニモン」

「ハッ」そこに、ジェロニモンも現れた。

「お前の力、今こそ使う時が来たぞ……」

怨霊軍団の来襲

エンペラ陸海空軍と暗黒鎧闘士の猛攻撃から数日が過ぎていた。それぞれ襲われた星では、復興と共にグランドキング、エアロキング、アクアキングの三体の残骸を調べ分析していた。

「どうだ、ヒカリ。何かわかったか？」

ウルトラの星の研究所で、メビウスがヒカリに尋ねる。コンピュータに向かったまま、ヒカリが答える。

「ううむ、こちら側の攻撃でめっちゃめっちゃになっている。簡単にデータを引き出すことはできないな。そのためには、多少の修復も行わねばならない」

「そうか……」

グランドキングの残骸、但しそれがどの部分かも解らない。残骸にむけて、周囲のアームを伸ばしてその先に接続されている、注射器型の機器から電気のようなエネルギーを照射しながら、ヒカリはコンピュータにタイピングを続けていた。

「ふう、あれから何にもおこんねえな。まさかよお、エンペラ軍が怖気づいたって訳でもあるまいに」

ウルトラタワーの周囲を警備している21は、退屈で体を伸ばしながら空を見上げていた。

「……」

ネオスはただ黙っていた。同じように、空を見上げて。

「ところでよお、暗黒鎧闘士って8人いたらしいけど、一人だけ逃げのびたって話だぜ。話によればタイラントって怪獣の体をのつとったダーカースとかってやつがそれらしいけど」

「……」

「ったく、この間の戦いからずくずくとだんまりかよ」

21がネオスを横目で見た。ネオスは、その視線に気づかないのか無視しているのか、ただ空を見上げ続けた。

「……」

ネオスは、自分の無力を嘆いていた。敵の軍勢を相手に、自分達は精一杯の戦いを見せながら、結局星の半分以上が被害を受けてしまったことに。あの超闘士ウルトラマンと一緒に戦ってくれたというのに、あの有様……

「なあ21、私たちは、あまりにも無力だな」

「ああ？」

「隊長やセブン先輩まで一緒に戦ってくれたのに、あれしか……」

21は肩をすぼめた。

「バーカ、メインで闘ってたのは隊長やセブン先輩だぜ？ あの二人が戦ったのにあれだけの被害が出たんだ、お前……いや、俺達がガックリすることねえよ」

「む……」

「敵もさる者ってことさ。それを撃退できた俺らは凄い！ 隊長や先輩はもつとすごい！ でもよ、いつか超えようぜ……エンペラ軍も、超闘士もよ」

胸を張る21。ネオスには、この親友の希望にあふれた表情が、どこまでも誇らしかった。

「そうか……そうだな」

二人は、同時に空を見上げた。雲ひとつない青空を。

蘇れ、悪霊たちよ

真つ暗闇の宇宙空間。何にもない、宇宙空間。ただただ黒い、宇宙空間。その中で、ひとときわ黒くて暗い、邪気が燃え広がっている。

「ふおおおおおおお……はあああ……」

暗黒司祭ジェロニモンである。ゴツゴツとした皮膚がざわめきゆれ動き、頭から尻尾にかけて生えそろっている羽根が、ぞろぞろとうごめいている。邪気は彼を中心に広がっていた。

「ウルトラ兄弟に敗れし怨念よ、レオ兄弟に叩かれし執念よ、闘士に消されし悪の命よ……」

よ み が
え れ

その時から、再びエンペラ軍の猛攻が開始された。ジェロニモンによつて、絶大な数の怪獣・超獣、怪人・宇宙人が復活して、さまざまな星に現れたのである。

「しまった……ジェロニモンがいた時点でこのことを予想するべきだった！」

ウルトラマン達はずぐに、各星々に出動した。人員を裂き、とにかく一つでも多くの星へ行く。

「行くぞっ！ 怨霊軍団！」

ウルトラマンが降り立ったキガン惑星では、かつて倒したテレスドン（闘士テレスドンとは別物）や、ドラコ等が大挙していた。

「たああっ！」

すぐに超闘士の力を全開にし、敵集団へと飛び込んでいくウルトラマン。

「ガギユオオオオ……！」

怪獣の内一体が、一撃によつて倒された。

「お前たちでは、相手にならん！」

ウルトラマンの言った通り、再生怪獣たちは次々と倒れていった。

ジェロニモンによって復活した怪獣は、元よりも大きく弱くなってしまうという特徴があるからである。再生ドラコはウルトラマンに投げ飛ばされ、泡を吹いてしまい、再生テレスドンも「スラッシュ光線（連射のきく小型弾）」を1発受けて、倒れた。

「こんなことをする必要があるのか……？　少しでも戦力補強を狙っているのだろうか。それとも時間稼ぎか？」

敵をなぎ倒しながら、ウルトラマンは疑問を感じていた。何故こんな弱い敵を送り込む必要があるのか。先の言葉通り、戦力補強か、時間稼ぎか、それとも警備を手薄にするためだろうか？

「ならば、いつきに終わらせるのみ！　スペシウム・アタック！」
拳から放たれたエネルギー波に、吞まれていく再生怪獣たち。

「ギャオオオオ……！」

「ギガ……！」

粉々になった怪獣達。最後に、一人原形をとどめたケロニアが、うずくまっただけからしばらくして、爆発したのだった。

「ありがとう、ウルトラマーン」

「よし、すぐに戻らねば」

星の人々に笑顔を送り、その歓声を聞きながら、空を見上げた時だった。

「……ふおん」

「えっ？」

1人の青年が、その声を聞いた。

「つい……ふおん」

「あっ！」

倒したと思っていた再生ドラコが、目を開けたのである。

「つい、ふおん！」

再生ドラコの目が緑色に光り、体がひび割れていく。

「ウルトラマン！　まだ敵が！」

青年が叫ぶと同時に、再生ドラコはウルトラマンに飛びかかった。
「つい、ふおん！」

「なにいいいっ!？」

再生ドラコはすでに、姿を大きく変えていた。人間的な真つ白な顔に、緑色の鋭く尖った眼。そしてたくましく太い指を持った両手。ゴツゴツした黒い体と、そこに走る白い線は、変わらなかった。

「まさか、これは……ツイフォン!？」

彗星戦神ツイフォン。かつてウルトラマンを苦しめ、メフィラス大魔王を殺した最悪の敵。彼もまた、再生され復活していたのである。再生ツイフォンはウルトラマンにしがみついた。

「つい、ふおおおん……」

しかし、その力は半分以下に落ちていた。体を形成するいくつもの他の特徴が消え、かつては生えていた五本角を失い、飾り気の無くなった体からそれは明白だった。

「はああっ!」

ウルトラマンのパンチが顔面にぶつかり、再生ツイフォンは後ろへ吹き飛んだ。

「今の私には、今のお前では絶対に、勝てない!」

「っ、い、ふお、ん……」

「スペシウム光線!」

「ぐおおおおー!」

ウルトラマンは手を十字に組み、必殺のスペシウム光線で敵にとどめを刺した。そして、再び空へと帰っていく。

「ありがとー!っ、ウルトラマーン!」

再び彼らの声援を受けながらウルトラマンは、飛んでいく。しかし、その表情は、優れない。

「ツイフォンにしる他の怪獣にしる、明らかに弱い……あんなやつらを復活させる必要があると言うのか? 小細工を張っているのか? エンペラ星人はあれだけの自信を持っていたというのに……私でない、別の戦士がこの星に来るのを期待していたとでもいうのだろうか……」

考えても、わからない。エンペラ星人の考えていることは、いった

い何なのか。あれだけの自信を持っていたエンペラ星人が、警備を手薄にするためだとかの理由でこんなことをするだろうか。さまざまな疑問を持ちながら、ウルトラマンは帰っていった。

用心棒闘士？ ブラックキング！

「どおりやあああつ！」

「ガアア！」

闘士レッドキングの鉄拳が、再生ギガスと再生チャンドラーを吹き飛ばす。

「ショック光線でつしゅ！」

バルタン星人Jrの操るビルガモの頭頂部から、怪光線が発射され、再生ツルク星人のバイク部隊を蹴散らした。

「……ふう、あらかた片付いたな」

ここ、R惑星にて、再生怪獣が全滅していた。

「いやあ、悪いね、まだ怪我も治りきつてないのに」

ZATの荒垣副隊長が、戦闘機スカイホエールの中から、レッドキングらに礼を言った。

「へへっ、なあに。みんなのためだからな」

少し照れながら、レッドキングは礼に答えた。

現在、闘士五獣士の中でまともに動けるのは、レッドキングとゴモラとバキシムの三人。それぞれで別々に行動し、他の仲間と共に敵と戦っていた。

「いつまた敵が来るかわからないから、我らZATと君たちはこの星に残っていることに決まった、体を休めたら、再び警備についてくれ」

荒垣の指令に、レッドキングは握り拳を強く作った。

「……おうっ！」

他の星でも、多くの再生怪獣がこの調子で叩かれていた。数で劣勢かと思われたウルトラ戦士たちだったが、意外なことに、テンペラー星人達宇宙人が新しく宇宙人連合を結成して、戦える宇宙人を募ってそれぞれの星を守らせることにしたのである。特にミステラー

星のように軍隊のある星は、周辺の星を守りに人員を割くなど活躍している。

さらには、パワード流派の闘士達も動いた。一人ひとりがゴーデスとともに戦えるほどの力を持つ彼らは、一気に再生怪獣を叩いていき、一躍脚光を浴びることに。

それから数万光年離れた惑星・カンダラ星。ここでは、守護闘士グレートが派遣されていた。

「くらいやがれええええっ！」

グレートの必殺技、「バーニング・プラズマ」が多くの再生怪獣を撃ち滅ぼす。続いて向かってきた者達も、両腕から出る光の剣「グレートスライサー」で切り刻まれて敗れていった。

「ウルトラマンは復活したツイフォンと戦ったって言うけどよ……まさかシーダやゴーデスまででてきやしねえだろうな？」

グレートの胸に一筋の不安が訪れた。もし、彼らが復活してしまったとしたら、そして、それが今の超闘士にはかなわないとしても、我ら守護闘士以下の強さのものよりはまだ、強かったとしたら……汗がタラリと流れた。

「グレートサン！ アッチニマダ、テキノコツテルヨ！」

地球人と良く似ているが、肌の色の真っ赤なカンダラ星人が、グレートの前を走ってきた。

「分かった、今すぐ行く」

カンダラ星人の言う通りの方向に、グレートは飛んでいった。

「……ん？ なんだあれは？」

飛んで行った先　半ば荒野と化していた廃墟（怪獣に襲われる前から廃れていたと思われる）にあったのは、数十はある再生怪獣の死体であった。

「なんだと！？」

その場に降り立ったグレートは、死んでいる再生再生デッパラスの

死体を調べてみると、胸に大きな焦げ跡がある。次に、再生バサラの死体を見ると、ものすごい腕力で引きちぎられた跡が。そして、再生オカリヤンの死体には、顔面に巨大な爪痕が残されていた。

「これをやったのは、相当のパワーの持ち主だな……」

そこに、数名のカンダラ星人がやってきた。再生怪獣の死体を見て、驚く面々。

「ファイター！ ファイター！」

「スゴイスゴイ！」

「お前ら、こいつらを倒した奴の事を、何か知っていないか？」

「エ？ アンタガヤツテクレタントチガウ？」

カンダラ星人達は、互いの顔を見やって相談した。そして、そのうち一人が、あることを思い出した。

「ソウダ、コノホシイチバンノカネモチ、ヨウジンボウヤトツタ」

「よ、用心棒だつて？」

グレートは、そのカンダラ星人に教わった場所にいる金持ちの家を訪ねることにした。

「アツチノヤマノオクニ、イエガアルヨ」

そして、グレートは山の奥にある豪邸をすぐに見つけた。すると、豪邸の屋根がゆっくりと開き、そこから赤い豪華な服に身を包んだ赤い顔の男　カンダラ星人の大富豪、ウマーが現れた。

「アンタ、ウルトラセンシ？ マサカ、カイジュトマチガエテ、ウチノヨウジンボウ、コロシテナイヨネ？」

「いや、たぶんそれはねえ。俺もあんたの用心棒のうわさを聞いてここまで来たんだ……」

その時、後ろから、豪快な声が響いた。

「今帰ったぜえ、ウマーさんよお！」

「！」

後ろを振り向くと、そこにいたのは、白銀の鎧を身にまとったブラツクキングであった。

「ぶ、ブラックキング！」

「ああ？ アンタ、ウルトラマン……グレート？ そうだ、グレートじゃねえか！」

ブラックキングは用心棒として雇われ、この装鉄鋼を貰ったという。装鉄鋼は、ブラックキングのつま先から腕を除いて、喉や後頭部までを覆い尽くしたデザインで、背中や尻尾の刺をそのまま覆うことで補強し、腹部から胸部にかけて、閉じた牙のような形状をしている。そして、右腕の鎧は3本の刺が、左腕は非常に厚いシールドで武装されていた。

「凄いな、個人でこんな豪勢な装鉄鋼を用意できるなんて」

思わず感心するグレート。しかし、すぐに表情が険しくなった。ブラックキングの一言のせいで。

「この星の事はこのオレ様に任せておきな。アンタは別の星を守れよ」

真っ直ぐな目をしていた。熱い視線がグレートに突き刺さる。

「でもよ、オマエにこの星を守り抜けるのか？」

グレートの一言で、ブラックキングも表情を変えた。

「なんだと？」

そこに、ウマーが割って入る。

「オ、オイマテ！ ブラックキングドノハ、ワタシヲマモルタメニヤトッタノデアッテ」

「黙ってる！」

言い途中で、ブラックキングに阻まれてしまう。

「……ウッ」

ブラックキングは再び、グレートに言った。

「てめえ、一体どういう意味で俺が駄目だって言うんだ？」

グレートは毅然とした表情で、答えた。

「確かにオマエは強えよ。しかし、闘士として本当にここを任せられるかわからねえ。なにせ相手があいつらじゃな」

昔の怪獣が再生し弱くなった者を何百人倒した所で、今後もこの星

を任せきれるかは分らない。元々ブラックキングは強豪怪獣、それが武装をただけだとも考えられる。それだとするとエンペラ軍の参謀ら以上の者が襲ってきた場合、負けてしまう。

ずしん、と音がした。ブラックキングの方足が、地を響かせる音だった。

「なら、テストしてくれねえかな、守護闘士様よお」

ブラックキングの赤い目が、さらに赤くギラギラと燃え始める。真っ黒な唇がじわじわとせりあがり、中から真っ白な、食いしばった牙と、真っ赤な歯茎が顔を出していく。

「いいだろ、やってやるぜ」

グレートも、戦闘態勢に入っていた。隙のない表情だった。同時に、ブラックキングの口が大きく開く。

「ごあああつ！」

吐き出されたのは、溶岩熱線。真っ赤な真っ赤な、熱い光線だった。「たあつ！」

グレートはそれを、素手で受け止めた。ただ素手で受け止めたのは違う。そのエネルギーを増幅し、自分の光線技として放つ「マグナムシュート」としたのであった。

「こいつでお終いだ！」

マグナムシュートの光線が、ブラックキングに飛んでいく。

「俺の武器はあ……この腕だあつ！」

ブラックキングはぶわっ、と拳を振り上げ体をひねり、体全体を振り回すようにして体制を戻していく。その勢いを加えながら、その恐るべき腕力のみでマグナムシュートを殴り飛ばしてしまったのである。

「な、何だと!？」

「ハハっ、なめんじゃねえぜ！」

マグナムシュートは、エネルギーを空气中へ逃がしつつ空へと吸い込まれるように飛んでいき、やがて消滅した。

「さあ、まだやるかい？」

ブラックキングが再びグレートに向かい合って戦いのポーズをとると、グレートは一瞬でブラックキングのそばまで近寄り、パンチを見舞った。

「うおっ！」

顔を殴られ、ブラックキングはぎろりとグレートを睨んだ。同時に、頭の巨大な一本角を振り下ろす。黄金の角を。

「ウオツ……と」

グレートの装鉄鋼の、一部に傷がついた。

「ナツクルシューター！」

グレートは拳を構えた。拳から光線が発せられ、ブラックキングの頭の角に命中した。

「ぐうう！ チツ、やりやがらあ……ん？」

ブラックキングがたじろがずに向かつて行こうとした時、グレートはふつと笑い、かまえをといた。

「なんだ？ 止めるのか！」

すると、グレートは笑顔のまま、ブラックキングに言った。

「ああ。ここで力を出し切っちゃったら、再生怪獣からここを守れねえからな」

「つて、ことは……」

「凄えな、オマエにならここを任せられる」

「認めてもらえた……みてえだな」

互いを認めあった二人は、力強い笑顔を互いに見せ、目を見合う。

そこに、一機の宇宙艇が飛んできた。ゴツゴツとした赤い宇宙船であつた。

「誰だ？」

「わ、私です！ パワード総帥の弟子のひとり、^{パワード}Pピグモンでございます！」

ハッチを開けて現れたのは、Pピグモンであつた。

「どうした？」

グレートが訊くと、Pピグモンは慌てた調子のまま、答えた。

「ぱ、パワード総帥が、パワード総帥が、暗黒司祭ジェロニモンに、連れ去られてしまいました！」

用心棒闘士？ ブラックキング！（後書き）

この話を書く以前に闘士をデザインした事があり、ブラックキングはその中の一人です。

ブラックキングは、人気の割に映像作品の登場が少ないですね。そこがまた良いんですが。

また、再生ツルク星人のバイク部隊というのは、かの内山まもる先生の漫画に登場したツルクライダー隊を意識して登場させました。

あと、カンダラ星は、言うまでもなくオリジナルです。顔の青いチャムダ星人（ウルトラセブンXより）を意識して作った…わけじゃありません。

パスワード救出指令

パスワード
Pピグモンの宇宙艇に乗ったグレートが行った先　暗黒の空間、
怪獣墓場。

普段なら大量の怪獣達の魂が浮かんでいるこの空間だが、圧倒的に
何もない空間の方が多かった。この戦いで多くの怪獣が復活したた
めと、その一部が倒されたためであった。宇宙艇が地面に降り、グ
レートとPピグモンは、周囲の空間を見渡ししながら、ハッチを開け
た。

「さっき倒したやつらがいるぜ……」

「そうですね、私達が倒した敵も浮かんでいますよ」

「……ん？」

グレートは、何かに躓きそうになった。地面を見下ろすと、一体の
怪獣が。魂ではなく、生身の肉体であった。

「こいつ、お前らの仲間じゃなかったか？」

「ああ、ジャミラ！」

そこに倒れていたのは、Pジャミラだった。Pジャミラはグレート
達に気づくと、長い腕でグレートの肩を抱いた。

「あ、ああ、ぱ、パスワード、総帥、連れてかれ、たっ」

「パスワードが!？」

「く、くうろい闇、総帥達を、呑みこんで、いつて、しま、った」
Pジャミラの話によると、突如開いた怪獣墓場の入り口にジェロニ
モンを発見したパスワードとレッドキングとPバルタンとPジャミ
ラは、一緒にいたPピグモンの目の前で敵の超能力を受け怪獣墓場
へ引きずり込まれてしまった。超能力から逃れ、そこから脱出しよ
うとしたところで突然Pジャミラが攻撃され、さらにパスワードら三
人は黒い闇に引きずり込まれてしまい、その闇はどこかへ飛んで行
ってしまったという。

「パスワードを無理に引きずり込むほどの超能力だと……まさかエン

ペラ星人！？　おいピグモン、なんでこんな大事な話すぐにしなかつたんだ！」

「い、いや、すみません、あわてていたので……」

グレートはその場をピグモンに任せ、黒い闇の向かった方向へと飛んだ。

怪獣墓場に居れば居るほど、目に見えて怪獣達の魂たちが増えていくさまが見える。仲間達が活躍している証拠だが、どこか恐ろしく不気味な感覚があった。

「うわっ！」

目の前に、以前グレートが倒した風魔神デガンジャの顔が飛び込んできた。驚くグレート。

「でけえ顔でいきなり現れやがって」

それからまたしばらく飛んでいくと、グレートは奇妙な空間を見つけた。紫と青と黒と赤が、互いの色を侵食せずに混ざり合い、どぶどぶと周囲に流れるように、広がっていく。かと思えば、周りの空間の黒色がその空間に黒を流し込んでいるようにも見える。

「なんだこいつは……うっ」

グレートは、その中にただならぬ気配を察知した。暗黒のエネルギー。闇の力。

「くそっ、拝ませてもらおうか！」

意を決して空間に飛び込むグレート。

暗黒の空間の内部では、重苦しい感覚が全身を襲う。耳にはギンギンと高い音が鳴り響き、あまりの暗さに視力もあまり役に立たない。目から透視光線を発するが、役に立たなかった。

「パスワード……いるのかっ」

自分の声が発せられているのかも、良く分からなかった。

グレート、グレート！

「ば、パスワード!？」

周囲を見回すグレート。しかし、パスワードはおろか、一步奥さえよく見えない。

「ど、どこにいるんだ!？」

テレパシーでお前と話している。お前もテレパシーで会話するんだ。脳波にエネルギーを込めるから、それを伝ってここにきてくれ……レッドキングとバルタンが、危ない……

グレートは、パスワードのテレパシーの通りに、その脳波に込められたエネルギーをテレパシーで感知し、その方向へと向かった。

「おお……」

そして、ついにその拠点を発見した。そこは、これまでの空間より幾分かマシな場所だった。そして、そこには、十字架状のエネルギー体に張り付けになったパスワードと、その横でほくそ笑むジェロニモン。そして、レッドキングにバルタンが、一体の怪獣と闘っていた。

「なんだあいつは……」

その怪獣は全身に巨大な角や刺が生えており、口の牙も強靱そうであつた。しかし、何より強そうなのは、爪である。

「処刑怪獣マクダター。面白い奴だよグレート君」

「ジェロニモン……」

ジェロニモンは、下品な笑いを浮かべた。

「今は実験の最中なのだ、邪魔せんどくれ」

「グギョオオオオっ!」

レッドキングに強力な爪で一撃を加えるマクダター。レッドキングの装鉄鋼にひびが入る。バルタンが、ハサミから赤い光球「バイオ・ビーム」を撃ちますが、角を振るって弾かれてしまう。

「チッ、あいつらだけじゃダメか!」

グレートが援護しようと足を上げた瞬間、ジェロニモンは羽根を一本、グレートの足元へ打ち込んだ。

「くっ！」

「邪魔せんどくれ、と言ったじゃろつが……」

「このままでは……総帥が！」

後ろに下がるPバルタンと、それをじりじり追いつめるマクダター。

「ぐおおおっ！」

Pレッドキングが敵を背後から、その剛腕で捕らえた。

「ぬうつうつおおおおおおお」

気合を入れ、踏ん張って、敵を持ち上げるPレッドキング。

「ドギョラア！」

マクダターはじたばたと抵抗するが、効果がない。

「貴様などに、いつまでも、やられていられるかあッ！」

「その通りだレッドキング！」

敵を持ち上げてそりかえるPレッドキング。そして、持ち上がって水平になったマクダター。Pバルタンはマクダターに向けてハサミから「フラッシュ念動波」を放った。

「グガヤッ！」

「どおらあああッ！」

フラッシュ念動波の衝撃で、Pレッドキングの背後への投げ「バツクドロップ」にさらに勢いがついた。それによって、マクダターは強烈な勢いで地面に頭を叩きつけられ、沈黙した。

「……ふう、やったな……」安堵するPレッドキング。

「ぬう、マクダターをやりおったか……」

歯ぎしりするジェロニモン。ギリリと言う音が、割と離れていた場所にいるグレートにまで聞こえた。

「へっ、これで残るはアンタだけだな」とグレート。

「何を、馬鹿者！ まだまだ切り札は残っておる！」

「なんだと？」

その時、パワードを捕らえていたエネルギー十字架が、光を発した。黒い光である。

「うつつっ！」

「な、なんだこれは!？」

苦悶の表情を上げるパワードと、おどろくPレッドキング。

「今から実験の開始じゃあ……巨大な光のエネルギーを、闇エネルギーに変換する実験のなあ……」

ジェロニモンは下品にグフグフと笑いはじめた。グレートは、そんなジェロニモンをよそに、エネルギーを両手に溜めこむ。

「ぐわあああー……」

光のエネルギーが闇に変わっていく。パワードの体内が、闇に染まりつつあった。

「そんなもん、待ってられるかよッ！」

グレートは、ジェロニモンの顔に向けて、ナツクルシューターを撃ちこんだ。ジェロニモンはそれを数枚の羽根で相殺したが、その間にグレートは、ジェロニモンの真横のパワードの逆隣りに跳んでいた。

「ぬ、ぬうつっ！ 邪魔はさせんぞ！」

そこに、PレッドキングとPバルタンが、同時に攻撃を加える。うつ伏せに倒れるジェロニモン。

「ぎええっ」

そしてグレートは、もう片手に溜めておいたエネルギーを、エネルギー十字架のなかにパンチで叩きこむ。

「マグナム・エナジー！」

かつての闘士バルタン星人や先の闘士ブラックキングとの戦いで使ったマグナムシューターの完成版である。片手にエネルギーを集中し、その手をエネルギーの中に入れることで、エネルギーを吸収して増幅することができる。これをエネルギー十字架と、それにつながっているパワードの闇エネルギーを吸収してしまおうというのだ。

「や、やめろお、やめろおお」

押さえつけられながら、うめくように叫ぶジェロニモン。プレッドキングとPバルタンのダブルパワーの前には、まともに抵抗もできず、次々とちぎられて羽根を飛ばすこともできない。

ジェロニモンは考えた。どうにかして、敵の動きを止めなくては…

…そうだ！

「はああっ！ 蘇れマクダター！」

ジェロニモンは、マクダターの復活を試みた。再生すれば力は弱まるが、足止め程度にはなる。

「グオオオオオ……」

立ち上がる、再生マクダター。

「おそいぜっ！」

グレートの手に凝縮された巨大なエネルギーは、マクダターを一瞬で粉々にした。エネルギー波は、闇の空間を掻き散らしながら、どこかへと消えて行った。

「すまん、グレート」

ジェロニモンに目をやるパワード。闇に変換された分のエネルギーがなくなったため、力が弱まっているものの、充分に戦える。

「ジェロニモンよ、好き放題してくれたな」

「ぐ、ぐうっ」

ジェロニモンは、覚悟を決めていた。

「バルタン、レッドキングよ。彼を放してやれ」

「なにっ？」

「教えてくれないか。なぜ、私のエネルギーを変換しようとしたのか。この実験に何の意味があったのかを」

うつ伏せに倒れているジェロニモンに、パワードは跪いて訊いた。

「グ、グフフ、聞いたところで無駄、話したところで無駄よっ」

「なんだとテメエ、痛い目見たいのか？」とグレート。指をコキコキと鳴らす。

「ち、違っわい、だから、話してやると言っておるのじゃ！」

パワード救出指令（後書き）

今回の敵マクダターは、ザ ウルトラマンの最終回の敵です。

ザ は全話観たのですが、敵はあまり印象にのこなかったです・・

・シーグラ、ギバルーガ、スパイラル、レッド・スモーギ、コンビ
ユーゴン、ネオドストニー・・と、そのくらいで。

折角なので最終回に出た敵くらいは、と思い出してみました。

誕生、究極怨念獣

ウルトラの星の巨大会議室に連れてこられたジェロニモンは、多くの戦士たちの目の前で、話し始めた。

すでに再生怪獣は全員倒され（シーダは魔神であつたためか、蘇らなかった。マザロンやジャンボキングらも復活したが、科学警備隊とジョーニースとタロウの活躍に敗れ去った）、再びエンペラ軍の脅威は去っていた。

「よし、教えてやろう。我が軍団の計画をなっ」

エンペラ星人の計画。それは、ウルトラ三大秘宝の変身形態である、究極最強の装鉄鋼ウルトラクロスを得る事であつた。

「ウルトラクロス……あの伝説の、真の最強戦士が身にまとうという鎧か！」とゾフィー。周囲が驚くが、同じように驚いているウルトラの母の横で、ウルトラの父は冷静な顔をしていた。

「しかし、あれは正義の……光の戦士しか、使えないはずだ」

「フ、フフフ、だから、ワシらは闇のエネルギーに光のエネルギーを変換する術を見出したのだ！」

一応、光を闇に変換することはできた。しかし、強大な光のエネルギーを変換できるかといえば、不安が残った。そこで、強大な光の力を持つ戦士を実験台にして、ウルトラクロスをも変換できるかを試そうとしたというのである。

「なんだと……では、再生怪獣はその罔か」と、レオ。

「フフフ、どうだかなあ……」

「なんだよめえ、話してもいいつつたじゃねえか！」エースが憤慨した。掴みかかるうとしたところを、ジャックが止める。

「フフフ……所で、お前ら。気づかないか？」

ジェロニモンが、またあの下品な笑い顔を浮かべる。身構える戦士達。

「なんだ！？ なにかたくらんでいるのか！？」エースキラーが、

武器をとる。

「フ、フハハハ……グランドキングらが襲った星……ウルトラの星、地球、惑星ポ波尔。この三つと皇帝陛下が用意した怪獣墓場への入り口の特殊空間……この位置関係からして、気づくことは無いかのお……」

ヒカリが、すぐに宇宙の地図の映像を、会議室の天井に映し出した。
「ウルトラの星、地球、ポ波尔、暗黒空間、この四つの位置関係……これは!？」

天井を見上げながら、ウルトラ戦士たちは驚愕した。暗黒空間の入り口をのぞいた三つの星は、丁度正三角形を描く点であり、暗黒空間の入り口はその三角形の中心点にあったのである。

「し、しかしつ、惑星ポ波尔にエアロキングを連れて行ったのはこちらの判断……あんな遠い星に、わざわざ連れて行くと予想できるはずが!」

ジャックがそういうと、また笑うジェロニモン。

「ククク、あの星には丁度近くに、天才科学者ウルキュース・ノタニーが居た。そのタイミングをはかって、ワシはブラック司令に攻撃する時期を選ばせたのじゃよ」

「でもつ、一体なんの意味があるんだ、この三角形に!」

これまで黙っていたタロウが、声を上げる。

「あれらの星には、奴らのエネルギー……暗黒空間からは、怪獣達の怨念……そして三大秘宝」

「なにっ!？」

ジェロニモンがそう言っている頃、ウルトラの星に残されていたグランドキングの体内から流れ落ちたエネルギーの残骸と思われた液体が、気体となって宇宙空間を超スピードで飛んでいった。この現象を見ているものは、なかった。

同時に、ポ波尔や地球においても、エアロキングとアクアキングから流れ出したエネルギー残骸らしき液体が、同じように気体となって宇宙へ飛び立った。

そして、グレートらが突入した、あの暗黒空間の入り口から、怪獣達の魂がぞろぞろと出てくる。

三つの星からエネルギーが同時に、暗黒空間の入り口に到達し、魂と融合した。そして、グニョグニョとうごめく気体が液体かも良く分からない物質の中に、輝く三つの光が入り込んだ。

「グオギョキカ……」

謎の物質は、徐々に形を作っていく。大きくなり、広がり、増え、その体を作っていく。

獣のような、機械のような、怪物のようなその姿が、生まれていく。

その姿は、グランドキングの胸部と両腕に、分離したエアロキングが、そして脚部に、分離したアクアキングが武装されたものだった。どこかの光に照らされて、エアロキングのものであった両手の爪が光る。

「ゴオゴオゴオ……」

誕生、グレイテストキング。

重厚なボディから、溢れるような怨念の声が燃え広がる。重厚なモンスターが、体内でぎぎぎと音を立てる。動き始めていた。

猛攻 グレイテストキング

究極怨念獣グレイテストキング。その強大な力は、あらゆる戦士のエネルギーを弾き返し轢き潰し叩き落とす。闇の力を全身から発し、周囲の星は次々と活力を奪われていく。

星の上で木は枯れ、川は腐り、空は光を失う。

地の中で人は悶え、動物は苦しみ、怪獣は暴れだす。

やがて、全ての物質が枯れ果てて、消滅していく。

メインの戦力となる闘士たちは、すぐにグレイテストキングの元へとやって来ていた。

「あ、あれがグレイテストキング……ジェロニモンの言った、最強の敵か！」とウルトラマン。

「体内にウルトラクロスがあると云うが、そのエネルギーを闇に変えられる前に、早く叩かなければ！」パワードが、両腕を十字に構え「メガ・スペシウム光線」を放とうとする。それを、グレートが制止した。

「までパワード。焦るな。お前はまだエネルギーが充分じゃねえ」「う、ウム、すまない」

現在の陣営は……

ウルトラマン

セブン

ジャック

エース

タロウ

レオ

アストラ

80

ジョーニアス

グレート

パワード

Pレッドキング

Pバルタン

エースキラーS

ゼットン

ビートルジャイアント（科学特捜隊のロボ）

ネオス

セブン21

の、18人である。

「よし、取り囲んだな？」

セブンが周囲を見渡して確認した。18人の内の12人、パワードを除くウルトラ戦士らで等間隔に並び、グレイテストキングを囲む格好になった。他の者たちは、その内側。

「いくぞ、ウルトラ・ビッグ・バリアー！」

ウルトラ戦士たちの体から、光のエネルギーが放出され、巨大なバリアーを作る。それは、グレイテストキングの周囲数十キロを完全に覆ってしまう、巨大なバリアーであった。当然、発せられる闇の力はそこでストップ。超鏡クリスタルの特性を持つバリアーによって吸収され（技術提供　ウルキウス・ノタニー）、クリーンエネルギーとしてバリアー外へ放出されることになる。また、バリアー内にいる戦士たちも、装鉄鋼に超鏡クリスタルを装備し、重装鉄鋼にしているため（ロボットは体内に移植）、闇エネルギーに侵されることは無い。

「ーーーーッ！」

「スペシウム・アタック！」

ウルトラマンのスペシウム・アタックがグレイテストキングの胸を撃つ。張られたバリアーと衝突したエネルギーは、ウルトラマンの拳に後押しされてバリアーを掻き散らしていく。そして、穴のあったバリアーの隙間から、エネルギーをまとった拳がグレイテストキングの装甲に向けて、押しこまれた。

「ギュグウ？」

「たああッ！」

スペシウム・アタックのエネルギーが、グレイテストキングの体内に入り込む。厚い装甲を抜け、さらに厚い装甲を抜け、エネルギーは内部へたどり着く。

「ゴ……ッギャアーーーーッ！ーーーーッ！」

グレイテストキングが叫ぶ瞬間と、ウルトラマンが拳を引くタイミングは同時だった。その瞬間に再びバリアーが、壊れた部分を修復するように元通り体を覆う。

「ストリウム・アタック！」

タロウの必殺技、「ストリウム光線」のエネルギーをまとった、スペシウム・アタックと同様の一撃が、グレイテストキングの顔面に叩きこまれた。グレイテストキングは大仰に首を振り、同じように苦しむ。

「グワギャアーーーーッ！ーーーーッ！」

「おおっ、かなり効いている！」

さらにレオキックやグレートスライサーが敵を撃ち、歓喜する戦士たち。しかし、すぐにグレイテストキングは目を光らせる。グレイテストキングの攻撃が始まった。

「ゴゴゴギャーーーーッ！ーーーーッ！」

グレイテストキングのバリアーから、巨体の全身を覆うバリアーから、攻撃のエネルギーが発生し、ビッグ・バリアー内部全体へと走り抜けた。

「うわあああつ！」

戦士たちは吹き飛ばされ、ビッグ・バリアーの壁へと吹き飛ばされたり、最下部に落ちたりした。

「ググオゴゴアアア……！」

グレイテストキングの攻撃は、それだけで終わりはしない。腕を振っただけで強烈な波動が戦士達を吹き飛ばし、足を上げれば闇のエネルギーが戦士達を下から襲う。

「ギギオガーーーーッ！」

「うおっ、あちちっ！」

グレイテストキングの胸の一部（エアロキングの口）から、強烈な火炎。バリアーを張って防御するエースだが、バリアーがびしぴしと割れていく。

「げ、げええっ、こりやまずいぜ」

「援護します！ プラニウム光線！」

ジョーニアスの必殺技「プラニウム光線」。腕をL字型に組んで、そこで溜まったエネルギーを凝縮して、光弾として打ち出すものである。それを、グレイテストキングの胸に打ち込んだ。

「キギョカツ！」

しかし、グレイテストキングはそれを軽々と、ジャンプするような格好でかわした。身軽な動きに、驚愕する戦士達。

「あの身軽さ、じょうだんじゃねえぜ！」とエースキラー。

「で、でも俺は助かったぜ」と、エース。

「しかし、このままじゃどうにも……わああつ！」

アストラが叫んだのは、自分らの方向に、猛スピードでグレイテストキングが突っ込んできたからだだった。いち早く気づいたアストラはどうにか逃げたものの、その巨大な腕力によって、ビートルジャイアントが砕け散った。

闇に染まる輝き

「そ、そんなあ、ボク達がやられるなんてえ！」

科学特捜隊のメンバーは全員吹き飛んでしまった。ビッグ・バリアーに触れる寸前、ウルトラマンが特殊なバリアーボールを放ち、メンバーをその中に入れる。これに入った者は、バリアーに守られ、普通に活動できるようになるのである。

「すまん、ウルトラマン！大した役にも立たないうちに戦線離脱とは……」

「いいんだ、それより、怪我をしているようだから治療に専念してくれ」

「すみません、僕が近くにいたのに……」アストラはバリアーボールの前に立ち、謝った。

「グギユアアアアアアアッ！」

グレイテストキングの攻撃は続いた。口から巨大なエネルギー波を撃ち放ち、戦士達を脅かす。Pバルタンがバイオ・ビームを放つがまるで効かず、先ほどの「バリア・エネルギー光線」に撃たれて倒された。

「き、貴様あ、よくも……」

Pレッドキングが、フルパワーで突進する。その強烈なパンチが当たる寸前に、グレイテストキングは左手の爪でPレッドキングの顔を引き裂いた。

「ぐあああああああああああああああああつ！」

その叫びと同時に、Pレッドキングは沈黙する。胸にも光弾を喰らい、力を失ったからである。

「れ、レッドキング！バルタンも……！」

戦慄するパワード。しかし、すぐに気を取り直し、メガ・スペシウ

ム光線の態勢に入る。

「くらえ……ッ！」

「ようし、俺達も攻撃だ！ 集中して放てっ！」とエースキラー。
エースも、光線技の態勢をとる。

「狙いは頭だっ！」

グレートがバーニングプラズマ、エースがギロチンショット、タロウがストリウム超光波、レオがシューティング・ビーム、アストラがエレクトロン・ビーム、80がスーパーバツクルビームと、強烈な光線を頭に浴びせる。

「グウッ」

少したじろいだグレイテストキングに、さらにネオスと21が同時に光線を浴びせた。先ほどと同じ箇所にある。

「レジア・シヨット！」

「ネオマグニウム光線！」

「ギイッ」

「す、すこししか効いていない……！」

「いやっ、ここからだっ ……くらえっ」

バリアーに穴が開き、そこから、エネルギーを溜めていたパワードのメガ・スペシウム光線が入り込む。グレイテストキングは直接頭を焼かれ、悲鳴に近い叫び声をあげた。

「グギャオオオオオ……！」

「おーしっ、バリアが再生する前に、攻めて攻めて攻めまくれっ！」
エースの叫びと同時に、ジャックとセブンが同時に光線を放つ。ゼットンも素早く、メテオ火球を撃ちこんだ。

「喰らえ……！……っ！」

しかし、それらの攻撃は全て弾き飛ばされた。バリアが復活したかと考えた戦士たちであったが、実際はそうではない。バリアは、完全に消滅していた。

「あ、あれ……？ あいつ、体がなにか違う……」

アストラが異変に気づいた。グレイテストキングの巨体が、それまでと違う『輝き』を放っている事実。次に、レオが口を開く。

「光っている……と言うより、光を反射しているんじゃないでしょうか？ 鏡のように」

鏡 それを聞いて、戦士達は一瞬、思考が止まった。その次の瞬間には、自分たちの姿が敵の体に映り込んでいるのが見えてくる。そう、鏡のように。

「これってよお、考えたくねえけど……これってよお！」

エースが、がくがくと足を震わせる。同時に、グレートが歯ぎしりした。

「間違いないね……ウルトラミラーの力をとり込んでやがる！」

そう、グレイテストキングは、体内のウルトラミラーの力をそのまま使っていたのである。ギラギラと光るボディは、あらゆる技を、そして今は、あらゆる光を跳ね飛ばす。

「あんな奴にどうやって立ち向かえば……」と、ジョーニース。

「いや、光線が効かないのならば、取る術は一つだ！」

レオが猛々しく叫び、両足を赤熱化させる。両足でレオキックを放つつもりである。

「エイ、ヤア……」

グレイテストキングに飛び込むレオ。しかし、グレイテストキングの口から放たれた光弾に、撃ち落とされてしまう。

「ぐうふ……っ」

「まずい！ レオが……！」

「グゴガガ……」

セブンが叫ぶと同時に、グレイテストキングの攻撃が再開される。一瞬で頭の砲台や、口から赤い光線を大量に吐き、尻尾の先からも青い光線を撃つ。さらに、胸のエアロキングの口から火炎、そして両脚のアクアキング部分から連続で無数のミサイルを放ってくる。戦士たちは、ぞわっとした何かを感じ、それぞれで避ける態勢に入

った。しかし、精神的なショックが反応を鈍らせ、さらに、それらの攻撃のスピードはあまりにも速かった。

「は、速いっ！」

ジャックがミサイルを受けた。背中から煙を出し、ガクガクと震える。もう、戦闘態勢はとれなかった。

「そんなんっ！」

アストラが、火炎に全身を包まれた。装鉄鋼は消滅し、全身が真っ黒になり、ピクリとも動かなくなった。

「みんな！ レオのしようとした通りにするんだ！ 接近して攻撃しろ！」

ゼットンが攻撃をよけながら叫ぶ。そして、両肩に装備された剣「メテオセイバー」を合体させ、ブーメラン状にして投げた。

「ハアッ！」

「メテオブーメラン」は勢い良く回転しながら敵へと向かって行く。途中、撃ちはじかれそうになったものの、逆になめらかな刀身が光線を弾き返していたため、無敵の状態で敵本体まで到達した。

「効くか……？」

心配そうに敵の体を覗き込むゼットン。見えたのは、グレイテストキングの胸のヒビであった。その中心には、メテオブーメランが刺さっている。

「おおっ！ みんな！ あれを攻撃しろ！ 伝道させて内部に行きわたらせるんだ！」

それを聞いた戦士たちは、すぐさま光線をメテオブーメランに向けて発射した。

「へへ、接近する必要もなかったな……？」

しかし、何かがおかしい。これまで、グランドキングの時から、超巨大なボディで身軽に素早く動き回っていたグレイテストキングが、これしきの攻撃をよけようとしなかった。爆炎で見えなかったのだらうか？ その答えは、光線がメテオブーメランに放たれた瞬間に、分かった。

「な……なんだ！？ まったく効いていねえぞ！」

これまで、戦士たちの光線はグレイテストキングにダメージを与えていた。しかし、今回は内部に放たれたというのに、まるで効き目がない。弾幕をかわしつつも、戦慄の表情を浮かべる戦士たち。

「つ、強くなっただんでしょか……この戦いの間に」とタロウ。

「いや……あれはおそらくウルトラベルだ！」

セブンが、力を振り絞るように叫んだ。絶望のなかから、足掻くように。

「グオオオオオゴオオオオ……」

セブンの言った通り、グレイテストキングがウルトラベルの力を使ったのである。闇を振り払う力を持つウルトラベルは、グレイテストキングの闇の力によって、暗黒の力を持ち、光をかき消してしまう最悪の存在へと変わっていたのである。

「外からは弾き返し……中へは無効化……こんなやつ、どうすれば

！」

セブンの推論を聞いた戦士たちは、がっくりと肩を落とした。

闇に染まる輝き（後書き）

どうもこんにちは。読んでくださっている方々、いつもありがとうございます。ございます。

所で今回、お詫びがございます。

実は、レオとバルキー星人の戦いの話が、すっぽりと消えていることに気づきました。

何が原因だったのかわかりませんが、何故か消滅してしまったその話を、再び書き、今日割り込み投稿で「海面の大戦」と「全力の闘い」の間に入れさせていただきました。

「戦え！ レオ兄弟対エンペラ海軍」です。申し訳ありませんでした、これからも宜しく願います。

倒れゆく戦士達

「そんな……ウルトラ戦士たちがぜんっぜん、かなわないなんて！」
バリアーボールに入った科学特捜隊のイデ隊員が、涙を流して嘆く。

「いや、彼らを信じるんだ！」

普段なら、そんなムラマツキャップの声が聞こえても良いだろう。
しかし、だれしもが黙ったままだった。沈黙し、ただただ戦況を見るだけ。時には、声を荒げたり、足元のバリアを叩いて自らの手を傷つけている。絶望的な状況だった。

「このまま……終わるの……？」

バリアーボール内に、フジ隊員の一言が、ポツリと響き渡った。

「ガグゴゴゴオーーーーーーッ！」

グレイテストキングが叫び声とともに、戦士達を攻撃する。ビームや火炎の攻撃はストップし、主に各党攻撃に切り替えている。その巨体からは信じられないスピードで腕を振るい足を鳴らし、尻尾を薙ぐ。

それらの攻撃に、戦士たちはなすすべなく打ちのめされていく。そのパンチによって80が吹き飛ばされ、尻尾を喰らってジョーニアスが叩き落とされた。

頭に向かって飛び込んだエースは砲台に撃たれ、その衝撃でビッグ・バリアにまで飛ばされた。

「みんながやられていく……しかしっ！」

ウルトラマンの一撃が、グレイテストキングの胸を打った。すでにバリアは張られていない。強烈な、鍛えられた拳の連打が、鏡張りのようなグレイテストキングのボディにダメージを与えていく。これを見て、先ずはタロウが奮起した。

「ようし、ボクだって！」

ウルトラマンの少し上の方で、タロウの「スワロー・キック」が轟いた。それからタロウは、アトミック・パンチやハンドナイフと、必殺の格闘技を連発する。

「グ、グギゴオ……」

グレイテストキングの表情が変わった。超闘士2人分の強力な格闘技はたしかに効いていたのだ。

「おおっ、効いてるぞ！ 俺も俺も！」

エースが、セブンが、グレートが、パワードが、次々と敵の方へ飛んでいき、体の各所に一撃、そして連撃を見舞う。レオやジャックも復活し、必殺のキックを敵に撃つ。

「きりもみキック！」

「流星キック！」

「ゴグハアッ！」

「ぼく……だつてっ！」

アストラも力を振り絞って敵を打つ。必殺の「アストラアイアンパンチ」。「アストラスパイクキック」を使って攻撃していく。その威力は確かなもので、敵の腹部に傷を負わせた。

現在行動可能なすべての戦士が、グレイテストキングの体の周りを飛び回りながら連打を浴びせようと、接近できるだけ接近した。

リンゴオン、リンゴオン……

「……？」

リンゴオン、リンゴオン……

「これは……この音は？」

リンゴオオオオオ……ン

「鐘の音……ベル……ああっ！」

セブンが気づいた時には遅かった。グレイテストキングの周囲にいたすべての戦士の、光の力が失われた――そう、ウルトラベル。闇を払い光とするウルトラベルの力が、グレイテストキングによって全く逆の力に変えられてしまったのであった。

「そんな……しまった……」

「グオゴゴゴ……」

全員が、倒れた。セブンもエースも、レオもネオスも。グレートもパウードも。超闘士　ウルトラマンと、タロウでさえも。

「あ、あ、あああ……」

アラシ隊員の顔から、生気がなくなった。イデ隊員も、フジ隊員も、ムラマツキャップでさえも、まったく同じ顔をしていた。

宇宙空間のウルトラ・ビッグ・バリアーの中で、力なく浮かぶその姿に、かつての英雄たちの姿は全く見えなかった……一部を除いては。

「俺たちは光の戦士じゃねえ……まだ、やれるぜ」

エースキラース。闘士ゼットン。彼らは、まだ動ける。

「俺も……寝ていられない」

^{パウード} Pバルタンも、起き上った。

「たった三人……でもよ、なにかこいつらに、残せたらいいなあ……」

……

エースキラースが、キラースファントムを分離させ、斧と盾に変えた。ゼットンも、いつの間にか敵の体から抜けて漂っていたメテオセイバーを手に取った。バルタンは、長いハサミを閉じ、槍のように変えた。

彼らは、傲然とそこに居続ける、グレイテストキングを見上げて言った。

「さあ、いっつぜ……」

「だあああああああああああああああつ！」

一斉に飛びかかる三人。しかし、グレイテストキングは彼らを、何も思わずに、ゴミを捨てるようになぎ払った。

「ぐこあはあああつ！」

「うぐ……！」

「かはっ！」

全員、ビッグ・バリアに衝突した。背骨が折れるような衝撃を受け、びくびくとししか動けなくなる。特に、エースキラーが重傷であった。

「う、うごけねえ……」

「大丈夫かエースキラー？」とゼットン。

「くそつ。だ、だめだ……」エースキラーは、悔しそうに返した。

「ゼットン、あとは俺たち二人だけか」

Pバルタンが、震えた。敵を見上げて、恐怖した。

「おう……一体、何ができるのか……」

「誰かに、何かを残せたら……それさえ出来るかわかんねえな」

「しかし、ここで諦めたら……永遠に希望が失われる！」

「！？」

ウルトラマンだった。ウルトラクラウンの奥底にほんの少しだけ、残っていたエネルギーが彼を動かしていたのである。

「おまえ、ウルトラマン……動けるのか？」

ゼットンの心配をよそに、ウルトラマンはグレイテストキングに向かって、吼える。

「負けんぞ！ 悪の手先……エンペラ星人の造った兵器などに、私は絶対、負けはしない！」

「そうであつ！」

ゼットン達も、叫んだ。そして、敵に向かって飛んだ。最後の力を振り絞り、それをたった一つの手に込めて。

「喰らえーーーーーっ！」

グレイテストキングは、頭の砲台で三人を狙った。しかし、その瞬間、ゼットンらがウルトラマンの体を押し上げた。それによって、砲台の光線はウルトラマンに当たらず、ゼットンの胸にのみ、命中した。

「き……吸収……へへ」

ゼットンの装鉄鋼は砕け散った。光線のエネルギーは吸収したものの、その衝撃が彼の意識を奪い取る。落ちるゼットンを、Pバルタンが受け止めた。

「いいのかよ、デカブツ！ 大事な相手を見逃していて！」

「……ゴッ？」

「たあーーーーーっ！」

ゼットンらに押し上げられていた、ウルトラマンが頭上から襲う。その右手は、鋭い手刀。強烈なチョップが、グレイテストキングの首に、大きな切り傷をつくるのであった。

「ウルトラかすみ切り！」

「ゴガーーーーーっ！」

グレイテストキングの傷口から、エネルギーが放たれた。

「なんだあのドロドロした光は？ 体内のエネルギー……それとも怨念か？」

Pバルタンが、ゼットンをおろしながら言った。

「はあ、はあ……」

ウルトラマンも、バリアに着地した。そして、グレイテストキングを再び見上げる。

「どうやら、少しはきいたようだな」

ウルトラマンが、片膝をついた。フウフウと息を吐きながら、汗をたらず。

「だ、大丈夫かウルトラマン」とPバルタン。

「私の事は良い。それより、君があゝの傷口に攻撃してくれ。光の戦士でない君なら、光線を撃つても今のウルトラベルの効果は受けないだろう」

グレイテストキングの傷口を指さすウルトラマン。Pバルタンはごくりと唾を飲み、ハサミを開いた。

「俺の力がどこまで効くか……やってやる！」

倒れゆく戦士達（後書き）

先日、超闘士激伝のガシャポン大百科を入手しました！ 漫画やウイキペディアなどでは分からない情報も色々とありまして、嬉しい限りです。

しかしその中で、ちょっと残念なことが……。

以前、ベムスターの腹部に装鉄鋼をつけてどうするんだ、とあとがきしたことがありましたが、どうやらあの装鉄鋼にはエネルギー吸収の力があるようです。いや、ミスってしまいました。とはいえ、あれだと固形物は食べられませんけど。

しかし、ああいう本を手に入れると、やっぱりガシャポンが欲しいです！

完品で手ごろな値段があればいいのですが。中古で売ってるお店とかでは、装鉄鋼や外れる部品がなくなってしまうものも多いですが、ネットオークションでは値段の高さと信用の低さが怖い。

すでに家で持つてるガシャポンも、装鉄鋼がないものばかりですよ。あるのはエースとベムスターだけ！ ウルトラクラウン付きのマンや、エンペラ星人とかが欲しいです……。

奇跡の援軍

「バイオ・ビーム！」

「フラッシュ念動波！」

「闘士バルタン直伝……バルタン・ミクスド・ノヴァ！」

^{バード}
Pバルタンの攻撃はすさまじかった。首を切られて吼えるグレイテストキングに対し、その傷口に向けて強烈な光線を浴びせかけた。しかし、相手はグレイテストキング。ダメージを受けたPバルタン力では、内部に対する攻撃でさえも、それほどの効果を成さなかったのである。

「グウウガ……」

「だ、だめか……！」

ばつんっ

グレイテストキングにはたかれて、Pバルタンはビッグ・バリアーの光壁に叩きつけられた。

「ぐふっ、ぐほああああ……！」

光壁に叩きつけられたことは問題ではなかった。グレイテストキングのはたけだけの一発の攻撃が、彼の力を奪い去っていた。かくかくと震えるPバルタン。立ち上がることが、できない。

「すまん、闘士ウルトラマン……」

倒れた。顔が、バリアについた。

「Pバルタン星人……！ くっ！」

「グゴガガ……！」

グレイテストキングの視線が、再びウルトラマンを捕らえた。目が真っ赤に光を放ち、口が笑ったように見える。ウルトラマンの目の

光が、曇った。

セブンもタロウもエースもやられた。Pバルタンもエースキラーも今は意識を失い。

残っているのは、私だけ。

「たった一人……」

呟いた。ウルトラマンの精神を、闇が覆う。黒い闇だった。

「たった一人……」

「ならば1人で最後まで戦う！」

ウルトラマンが立ち上がった。闇が、去った。ウルトラマンの心が、肉体が、金色に輝く。装鉄鋼が吹き飛んだ。

「グゴッ？」

「グレイテストキング……おまえの好きにはさせないっ！」

金色に輝く超闘士の姿を目の当たりにして、ギリリと口を鳴らすグレイテストキング。口から強烈な火炎を放つ。赤々と燃えるそれは、ウルトラマンの全身を襲う。

しかし、それはすべて、光のオーラにかき消された。

「ハアッ！」

「ギイイ」

リンゴオン……リンゴオン……

「これは……ウルトラベルの鐘の音！」

グレイテストキングは再び、その力を使う。ウルトラマンの強大な光の力を、闇へと変えてしまおうというのである。体内に闇のエネルギーを宿しては、ウルトラ戦士は立ち上がれない。

「どうすれば……」

敵から遠ざかりながら、ウルトラマンは考えた。今自分にできる事。それを考える。

「今できる事……今は、少しでも私のエネルギーが闇に染まらないようにすることだ！」

その結論に達したウルトラマンは、超闘士のオーラを全身に張り巡らせる。その表面が闇に染まった瞬間にそれを捨て去り、さらにエネルギーを発するという作戦に出たのである。

しかし、それは危険な賭けであつた。装鉄鋼と共に、ウルトラクラウンも壊れてしまったため、超闘士でいられる時間はわずかに3分間。それも、このオーラパワーを使っている状況では、光のエネルギーはさらにさらに急速に、消費されていくのである。

「く……っ」

なにか、何か強力な一撃を叩きこむことはできないだろうか。この状況で、何らかの一撃をぶつけられたら。しかし、光線技は跳ね返され、光のエネルギーは闇に変わってしまう。あの傷口を狙って光線を撃つたところで、この距離からでは確実にかわされる。近づくことのできない最悪の状況だった。

ピコン、ピコン、ピコン、ピコン……

バリアーボール内の科学特捜隊の面々が、最悪の鐘の音に絶望する。

「ああっ！ ウルトラマンのカラータイマーが！」

「これじゃあ、もう終わりだ！」

「もう、ダメなんだあ……」

その時であつた。

「いや……まだだ……」

「？」

彼らの横に、一つの大きな影が。

「光の戦士は……」

「だれ……？」

その影は、赤紫色の肉体となり、ゆっくりと敵へ向かって歩を進め

ていく。その雄弁な動きに、誰もが目を奪われた。

「絶望せん……」

彼は、ウルトラマンの横に立った。力強く、涼やかに。

「お、お前は……！」

「ヤプール……！」

ヤプール。かつて、ウルトラマンエースの活躍に敗れた異次元人「ヤプール人」のはるか上に立つ、ヤプール次元最強の男である。彼らとこの宇宙の戦士たちの決戦は、「ヤプール大戦」と呼ばれている。タロウとの最終決戦は、傍から見ても激しく強く壮絶だった。

「見よっ！ 時空を超える我らの奥義ッ！」

ヤプールが両腕をかざすと、周囲に無数の穴が開いた。真っ黒な、次元の穴である。その穴から、一人、また一人と銀色、青色、紫色、赤色に輝く巨人がその場に現れたのである。

「か……彼らは？」

ウルトラマンゼアス。

ウルトラマンティガ。

ウルトラマンダイナ。

ウルトラマンガイア。

ウルトラマンアグル。

ウルトラマンコスモス。

ウルトラマンジャスティス。

ウルトラマンネクサス。

ウルトラマンマックス。

ウルトラマンゼノン。

「そいつらだけじゃねえぜ」

「レッドキング！」

ウルトラマンの真後ろに、レッドキングにゴモラ、バキシムにメビウスが立っている。さらに、ゴモラの頭の上に、紫色の体の男レイモンが立っている。驚愕するウルトラマン。

「ウルトラ・ビッグ・バリアの中に入れるはずがない……」

そこで、ウルトラマンははっとした。

「そうか、ヤプール！」

「そうだ。転送したのだ。この多次元に存在する、貴様らの仲間をな」

以前、ゴモラの前に怪獣使い　レイモンが現れたのも、この技「ディメンショナル・ゲート」のためであった。その時は技は未完成で、少しの間しか持たなかったが、今度はかなりの長時間、戦士達を居させることができるのである。

「しかし、どうして……」

ウルトラマンが訊くと、ヤプールは笑った。

「太陽神だ……太陽神が、我らの世界を救ってくれたのだ」

太陽神。ウルトラの星の太陽、「プラズマスパーク」に宿る神の意志である。ヤプール大戦終了後、崩壊しかかったヤプール次元を侵略しにあらわれた「ダークベンゼン星人」軍団。対してヤプール軍団は消耗しきっていた。

さらには魔石を使って唯一の脅威であるヤプールを封印しようとし

た彼らに対し、太陽神は自らの使いであるゼアスとその仲間ティガを送り込み、見事戦いを勝利に導いたというのである。そしてさらに、太陽神は自らのコピーとなる強大なエネルギー体を造り出し（プラズマスパークの消滅を危惧していたため、昔から造り始めていた）、ヤプール次元に差し出したのである。

「それで我らは救われた……だから、こんどはお前達にそれを返してやらんとな」

「さあ、行こう！ 光の道を！」

ゼアスが先頭を切って敵に飛び込む。

「まずい！ 光のエネルギーは闇に染められてしまっんだ！」

「安心しろ。奴の腕のブレスレットを見る」

「何？」

ゼアスらの腕に装着されているのは、赤く輝くブレスレットだった。その一見何の変哲もないブレスレットには、ヤプールの施した次元技が彫り込まれている。「ヤプールブレス」は、ヤプール次元の太陽神のコピーと通じており、光のエネルギーをほぼ無限に、彼らの体内に送り込むことができるのである。

「なんだって！ じゃあ、彼らは……」

「ああ！ あんな奴に負ける事は無い」

そう言つて、ヤプールは血を吐いた。

「どうした！？」

膝について、ヤプールはすぐに立ち上がった。

「フフ、この力には相当骨が折れる……さあ、お前もこのブレスレットを持って、戦えっ！」

突入 邪悪の体内へ

「トタアーーーーーッ！」

ゼアス得意のかかと落としが決まる。

「はあああッ！」

ティガ、ダイナ、ガイアの同時パンチも放たれる。一点に攻撃を受け、グレイテストキングの腹部にヒビが。

さらに、アグルのアグルブレード（右腕から放たれる光の剣）や、ネクススのジュネッスパンチが敵の傷口を広げていく。

「グゴガッ！」

さらに、レッドキング、ゴモラ、バキシムの三人のヘビータックル、マックスのマクシウムソード（アイスラッガー状の武器）やゼノンのキック、闘士メビウスのキックが、敵の傷口を増やしていく。

「闇の力に負けはしない！」

コスモスとジャステイスが合体し、ウルトラマンレジェンドとなり、さらに強烈な一撃を顔面に打ち込んだ。

「ゴガアアアッ！」

唸り声を上げるグレイテストキングだが、ウルトラマンの目にはどこか、それが余裕に見えていた。

「あの素早い動きはどこへいったんだ……？」

敵は、まったくといっていいほど攻撃をよけようとしなかった。時折、脚からミサイルを放ち肩からエネルギー波を放つ程度で、まともにも抵抗もしない。

「なめた真似しやがって……そらああッ」

レッドキングの強烈なパンチが轟音を響かせる。さらに広がる傷口。しかしそれでも、グレイテストキングは動かない。

「ギョグギィ……」

グレイテストキングがうなる。唸っただけで何も起こらない。やが

て、全ての反撃をやめた。

「超振動波を受けやがれっ！」

「どうしたデカブツヤロオ！」

ゴモラとバキシムの連射攻撃。グレイテストキングの装甲にさらなるダメージを塗り重ねていく彼らの攻撃は、長時間続いた。同時に、他の戦士たちも攻撃を再開する。

「このまま終わるはずがない……」

「なんだと？」

ウルトラマンの声に、ヤプールが反応した。

「お前もそう思ったか。いくらこちらに戦力があるうと、あのデカブツにそれに耐えうる耐久力がないなどとは思えん」

「ああ、なにかあるのだ」

ウルトラマンがうなずいた。そして、考えた。ウルトラベルも本来の能力も無効。ウルトラミラーの防御能力も直接攻撃に対しては役に立たない。そんな状況で、グレイテストキングがとる戦法は

。

「……みんな……」

ウルトラマンが、戦慄した。震えた声を発し、汗をタラリと垂れ流す。

「逃げる……」

小さな叫びだった。ウルトラマンの想像したことは、あまりにも

「グググゴゴ

」

光が、放たれた。真っ白な光。明るい光。照らす光。闇を消す光。グレイテストキングの傷口から放たれた、大量の光

「ウルトラキーだ……」

あつ、と誰かが言った。誰かがいう間に光は全てを包みこみ収束していた。

ウルトラマンとヤプール、そして科特隊以外の全員が倒れていた。

「そんな……まだこんな奥の手が残ってたなんて」
イデがぼつりとこぼす。

「なぜ、このことに気付かなかったんだ……」

ウルトラマンは後悔した。ミラー、ベルと続けば、必ずキーがあるだろう。その存在に気付かなかったのか忘れていたのか　　な

にも、覚えていない。その時の自分の意識を。

ヤプールが、ウルトラマンの前に立った。

「俺とお前だけ……か」

「ああ……」

「ひとつだけ、方法がある」

ウルトラマンははっとしたような顔でヤプールの前へ回り込み、その顔を見る。ヤプールの顔には、不安と自信の入り混じった複雑な表情を浮かべていた。

「行くぞ……グレイテストキング！」

ヤプールの全身を覆う筋肉が、ぐいぐいと音を立てて膨らんでいく。太く、強く、幅広く、その厚さを上げていく。そして、全身が光に包みこまれた　　。

「筋力強化変身」

ヤプールの食いしばった歯。その隙間から、一筋の赤が垂れる。ウルトラマンの目にそれが映った時、異次元の王は飛び立っていた。

「待てヤプールっ！」

ウルトラマンはヤプールを制止しようとした。彼が何をしようとしているかが、分かっているからだ。しかし、すぐに思いとどまった。

ヤプールの覚悟を、あの一筋の赤い色に見たからである。ウルトラマンは、視線をグレイテストキングに移した。

「いくぞオオツ！ グレイテストキングうつつ！」

「ゴガギヤウウー！」

グレイテストキングの光線がさまざまな場所から放たれる。ミサイルや火炎も次々飛んでくる。

ヤプールの筋肉強化変身したボディは、あらゆる光線を弾き飛ばす。ミサイルは叩き落とし、火炎は避けながら飛んだ。

「ウオオオオオオオツ！」

叩き落とされた。

敵の巨大な腕は、ヤプールのかわす間もないスピードと耐えきれないほどのパワーで、彼の背面全体を叩いたのである。ヤプールは白目をむいて、下方向へと叩きつけられ、前面を打った。

「か は……っ」

「ヤプール！」

「グギギギゴガ……」

グレイテストキングの大きな目が、足元のヤプールを睨んだ。ヤプールの周りにも、闘士たちが倒れている。グレイテストキングは、そんな彼らに向けて、口から光線を吐きだした。

「グガー………ッ！」

真っ赤な雨のような光線が、ヤプール達に降り注ぐ。しかし、それがヤプールの体を触れる寸前に、ふた筋の光がそれを阻止した。

「タロウ！ パワード！」

タロウとパワードが光線を発し、ヤプールらを救ったのだった。ヤプールは跳び起き、二人を見る。

「危なかった……」タロウがほっと一息ついた。

「何故助けた！ 俺を救っている間に奴を打てばよかったろうに！」とヤプール。

「仲間を失う訳にいかない。それに、奴を倒せる方法があるのだから？」

パワードが言った。

「く……っ、しかし、奴のスピードの前には、それも無理かもしれない」

「スピードが問題だというなら、私に任せろ」

そう言ったのは、ウルトラマンだった。

「う、ウルトラマン？」

作戦が決行された。グレイテストキングを倒すための、最後の作戦。ウルトラマンとヤプールが並び、タロウとパワードがグレイテストキングの頭上に飛んだ。

「行くぞっ！」

タロウとパワードが、グレイテストキングの頭上で旋回する。グレイテストキングは、それを半ばふまじめにじろじろと見、気まぐれのように光線を吐く。

「いいぞっ、うまく囿になってくれ！ 私たちも……行くぞ」

ウルトラマンはヤプールの肩に手を置き、精神を集中した。そして、二人の姿が少しずつ消えていく。

テレポーション。

一瞬にして、ウルトラマンとヤプールは敵の体内にもぐり込んだ。それは危険な賭けであった。敵の体内には、多くの怪獣の怨霊や闇のエネルギーが充満している。闇と怨念が空気のように全身を包みこむこの空間の中、超闘士ウルトラマンと筋肉強化ヤプールが泳ぐように動いている。

「この感覚……ヤプール次元ともさらに異質な最悪の環境だ」

「超闘士と言えどもこの力の中では、いい気分ではないな」

そんな事を言っている二人の前に、一つの怨霊がやってきた。

「お前たち……ワシらの仲間になりに来たのか？」

「ゴードス！」

ゴードスの怨霊……醜悪な顔を見せ悪辣にうごめくその様は、まさに怨念の塊であった。

「ふはああっ！」

ヤプールが剛腕でパンチをその顔面に叩きこむと、ゴードスの怨霊は散り散りになって消えていった。

「ごがひやははは……」

最後に残ったのは、ゴードスの笑い声だった。後は、怪獣とも宇宙人ともつかない不気味な物体がうごめき続けるだけであった。

ヤプールの決死行

黒い、闇のような。赤い、血のような。青い、海のような。白い、光のような。

怨念と憎悪の凝り固まった、有象無象の怨霊の重圧の中、ウルトラマンとヤプールは、苦しみながら進んでいった。

「まだ、見つからないか……」

二人が探しているのは、グレイテストキングの中にあるはずの三大秘宝であった。

それらを奪ってしまえば、グレイテストキングも倒せない敵ではなくなる。ウルトラマンはそう考えていた。

「見つけたぞ……見る」

ヤプールが指さした先。そこには強い光を放つ一つの鏡があった。ウルトラミラーである。

「おおっ、あれはまさしくウルトラミラーだ！」

歓喜するウルトラマン。しかし、それを取りに行こうとした瞬間、何者かが阻害した。立ちほだかる黒い影。ウルトラミラーの放つ光の逆光のせいで、そう見えているのだった。

「誰だ！？」

「余だ……」

「お前は……エンペラ星人！」

エンペラ星人……宇宙に宣戦布告した、ウルトラ戦士達に対する最大の悪魔。その本人が、ここに現れたのだった。

涼しい貌^{かお}だった。怨念の重圧や波動に軽く耐えているというより、その力を体に吸引しているような、そんな雰囲気を持っていた。

「貴様がエンペラ星人か！」

ヤプールがかまえた瞬間、ウルトラマンが制止した。

「さて、この場所でこいつと闘ってはならない！」

ウルトラマンの必死の表情を見て、エンペラ星人の目が笑う。

「さすがだ……余が前のような幻影でないこともこの場が自分たちにどれほどの不利を与えているか、理解しているようだな」

「まさか、お前がこの中にいたとはな」

エンペラ星人が、呆れ顔で息を吹いた。

「ウルトラマンよ……何故、グレイテストキングが存在しているか、知っているか？」

「何？」

「彼の存在意義は、余の強化ただ一つ」

「何だとッ！？」

制止されてから黙っていたヤプールが、再び口を開いた。口から、小さな赤い粒がいくつもとんだ。

それに気付き、ヤプールの背をさするウルトラマン。

「闇の力によってウルトラクロスを暗黒の鎧とするためだな」

「それだけではないのだよ……」

グレイテストキングの中には、怪獣・超獣・宇宙人・円盤生物等の悪の生命体の魂が大量に存在している。

その魂は、怨念や憎悪だけでなく、戦いによって生まれた苦しみ、悲しみ、怒り、絶望、恐怖と言った負の感情のエネルギーも大量に存在している。

「ジェロニモンによって一度蘇り……その負のエネルギーをもう一度ずつ造っていたのだ。貴様ら光の戦士の力を借りて」

さらに、かつての強戦士だったツイフォンやゴードスは、ジェロニモンの再生技の特性により、格段に力を落としていた。自分の力の消滅による愕然とした絶望感も、エンペラ星人の狙いだった。

「そして、その膨大な負のエネルギーを余の体内に送り込むことによって、余の肉体はさらなる力を得ている、ということだ」

涼しい貌のまま、エンペラ星人は小さく笑うように声を出していた。その笑いに比例するかのように、ウルトラマンの心に、怒りが湧き

上がっていく。

「お前は、自分の力をより強くするために、多くの悲しみや恐怖を造っていったというのか……」

みぎり、と手が鳴った。強く固めた黄金の拳。力。

「ゆるさん……」

飛び立つウルトラマン。超闘士ウルトラマンの凄絶なパンチが、エンペラ星人の顔面に向かって飛ぶ。

「ふっ」

ウルトラマンの金色に輝く腕がのびきった瞬間、エンペラ星人の顔面が、ウルトラマンの拳に向かって走る。ほぼ頭突きであった。

ぐちっ

「……うああー……」

「う、ウルトラマン？」

ヤプールが驚いた瞬間、すでにウルトラマンの体はヤプールよりも後ろまで吹き飛んでいた。

「バカな奴よ。いや……、これを勇氣と言っのかな。……光の戦士よ」

一瞬にして、エンペラ星人はウルトラマンの真上に存在した。ウルトラマンを踏みつけ、エンペラ星人の足はぐりぐりと回り踊っている。

「や……やめろっ！」

ヤプールが後ろを向いて飛びかかる。しかし、エンペラ星人はヤプールに対して背を向けたまま、右手をふいとかざし、強く振った。

「ぎふあっ！」

ヤプールが後ろへ吹き飛んだ。先ほどまで向いていた方向へ、長い距離を飛ばされる。

「ぐあああ……！」

どこまで飛んだかも解らず、ヤプールは何とか止まった。筋力強化変身をしていなかったら、今の一撃で死んでいたかもしれない。

「くっ、何だ今のは……光線でも物理攻撃でも……一体……ん？」

ヤプールのすぐ近くに、ウルトラミラーがある。ヤプールは、しめたと思い素早くミラーを手にする。

「よしっ、待っているウルトラマン！」

ヤプールは再び飛んだ。さっき吹き飛ばされてからの時間、相当にウルトラマンはやられてしまっているに違いない。その思いをかき消すように、飛んだ。

「エンペラ星人……ッ！」

叫ぶヤプール。エンペラ星人に向けてミラーをかざし、突っ込んだ。ウルトラマンはエンペラ星人の右手に、首をつかまれつりさげられている。

「まだくるか……しかもミラーを持っている。……ふああっ！」

エンペラ星人が叫んだ瞬間、ヤプールとミラーが離れた。ばつんっ、ともばちんっ、とも取れる音が鳴り響き、ヤプールは上へ、ミラーは下へとはじけ飛んだ。障害物は無い筈だったが、バウンドするように二つの物体は何度も飛び、落ち、あがった。

「よくも！」

吊りあげられたままのウルトラマンのパンチが、キックが、エンペラ星人の体を打つ。エンペラ星人はほんの少し顔をゆがめたものの、すぐに笑いを取り戻した。

「さすがだな……哀れな光の戦士」

エンペラ星人の左拳が、ウルトラマンの顔面を捉える。ウルトラマンの顔はとてつもない衝撃によって、体と共に一気に押し流され飛んで行ってしまった。

「あ……！」

その声だけがその場に残った。ウルトラマンは飛んでいき、ヤプールもすでに居なかった。エンペラ星人とミラーだけがその場に残っ

ていた。

「はあ、はあ……あ……あつた……」

ヤプールは、飛ばされた先で、一つの物を見つけていた。まばゆい光を放つ、大きなカギ。ウルトラキーである。

「これさえあれば……とりあえず、現状は打破できる」

「ほほう、面白い事を言うのだな」

「！」

ヤプールがキーをつかもうとした瞬間、エンペラ星人が真後ろに現れていた。

「死んでしまえ……」

エンペラ星人の貌は、殺意と憎悪に充ちていた。ヤプールは振り返った時、その顔を見て、思わず恐怖した。さっきの涼しい貌とは全く違う、死を連想する悪意の貌。恐怖を描いたら、キャンバスにうつるのはこの貌だろう。そんな思いを抱かせるのは、エンペラ星人だった。

ずぶり

エンペラ星人の右手の指が、ヤプールの肩を貫いた。ずぶずぶとさらに深く潜り込んでいき、ヤプールの肉を裂いていく。血がどつぷりと出ていき、ぐぶりと肉が鳴った。

「欲しいか、ウルトラキーが」

「が……ぐ……」

「欲しいのだな……ウルトラキーが」

「がああ……」

うめくヤプールを見下ろしながら、キーをとるエンペラ星人。よくみると、すぐ後ろの方にミラーとベルが浮かんでいる。ミラーはエンペラ星人が持ってきたのだろうが、ベルは元からあったのか、エンペラ星人が持ってきたのか、はたまたエンペラ星人が隠し持って

いたのかは分からなかった。どうしても良かった。

「喰らえ、光の戦士の希望を！」

ウルトラキーからエネルギーが放たれた。狙いは、ヤプールの顔面ただ一つ。

その瞬間、笑うヤプール。

「何がおかしい……」

「筋力強化変身は光線技が使えない……しかし、あらゆる光線を弾く体質になれるのだ……！」

光が、駆け巡った。

戦火の行方

無限に広がる漆黒の世界　大宇宙。

星が光り、闇が蠢き、命が飛び交う大空間である。

そんな宇宙のただ一部に、真っ白な光を見た者がいた。

それは、昼食をとるものであったり、ただ歩いているものであったり、釣りをしているものであったり、獲物にかみついているものであったり、友を守るために戦っているものであったりした。

輝きであった。

暗い宇宙を、真っ白な光切り裂き灯る。彼らは不思議に思った。一体、何故？

爆発であった。

巨大な爆発が、巻き起こったのである。その爆発の光が、遮るものさえも越えて、彼らの元へと届いたのだ。

「ウルトラマン……大丈夫か!？」

ウルトラの星において、モニターで戦況を見ていたウルトラの父が、大きく放った言葉がこれであった。

「タロウは!？　レオは!？　セブンは!？」とエレキング。

ベムスターも、言葉なくただただ目を見張る。彼の視線の先のモニターは、ただ白しか映していなかった。

「な……なにがあったんだ!？」

科学特捜隊ムラムツキャップが、バリアの中で目を覚ました。イデ、フジ、アラシの三人も同様であった。

バリアの周囲には何もなく、ただただ暗い空間が見えるだけ。一瞬、自分が死んだのかと思う彼らに向かって、一筋の光が飛んできた。ゼアスである。

「地球人のみなさん、ご無事でしたか!」

ゼアスは、バリアを包むように両手で抱え、中の4人を見た。

「あ、ああ。一体、何が起きたんだ？」

ムラマツが良く見ると、ゼアスの肉体は傷だらけであった。焦げた跡、打った跡、擦った跡や切り傷もある。しかし、ゼアスは苦痛の表情を見せはしない。4人に不安を抱かせないためであった。

「グレイテストキングが、爆発を起こしたんです」

あの時、ヤプールがウルトラキーの光線を弾き、グレイテストキングの体内で暴発させた。ウルトラキーには、エンペラ星人の強大過ぎるエネルギーが上乘せされ、さらに倍加されていた。そんな超パワーがグレイテストキングの装甲を破るには、あまりにも簡単だったと言える。この詳細をゼアスは知らない。

「彼らは……？ ウルトラマン達はどうなったのですか！」

ムラマツの問いに対し、ゼアスは一瞬、ためらってから、再び口を動かした。

「わたしは太陽神様のご加護が強いため、この軽傷で済みました。他も全員、命は助かりました。しかし、重傷です。そして、ウルトラマンと三大秘宝は行方不明」

時を置き　ウルトラの星に、グレイテストキングと戦った戦士達が次々と搬送された。ウルトラ戦士達も、怪獣も、死んでしまったように動かない。特に多大な衝撃を受けたヤプールの生命は圧倒的に低下していた。

「チクショウツ、こんなにやられちゃったのかっ！」

ベムスターが、すっかり広くなった作戦会議室の床を蹴った。

「これでまともに戦えるのは、俺とエレキングと……」

現在戦力と呼べる存在は、先のエアロキング戦で受けた傷がようやく癒えたエレキング、ベムスターに、ウルトラの父、ゾフィー、ヒカリ、そしてゼアスクらいのものであった。特捜チームも再生怪獣達との戦いで殆どの戦力を使い果たしていた。鋼魔四天王は、まだ傷が完治していない。

「なんとか、援軍をまた呼べないものか……」

会議室に立っているのは、現在の戦力である彼らと、あの爆発の中でなんとか無事だった科学特捜隊、そしてレイモンであった。あの爆発の寸前、ダイナとガイアが素早くバリアを張ったため、彼も無事だったのである。ウルトラの父の言葉に対し、レイモンが言った。「ダメだ、時空を超えるにはヤプールの力が必要になる。今戦えるのは、俺達だけだ」

「うむ……」

ウルトラの父が唸り、呟く。

「ウルトラ三大秘宝も行方不明……」

「我々四天王さえいれば、今の宇宙を制圧するには十分すぎる人数だっ！」

突然モニターから声が響いた。全員、モニターを振り返る。

「お前は……メフィラス！」

モニターに姿を現したのは、黒い姿に漆黒の装鉄鋼そ身につけた一人の宇宙人であった。その名を、メフィラス星人。

「め、メフィラス大魔王じゃねえか！？ い、生きてたのか！？」

驚くエレキングとベムスター。

ウルトラの父とゾフィーは思い出していた。確かに、一度、メフィラス大魔王と思いきメフィラス星人が、暗黒鎧闘士との戦いに現れた。しかし、味方として現れたかと思いきや、三大秘宝を奪って飛び去ってしまった。そしてその姿は、今モニターの中にある。そして、その後ろにも三人の黒き鎧の闘士が居た。

「闘士デスレム」

「闘士グローザム」

「闘士巨大ヤプール」

しずかに自分の名を語る三人の闘士。

デスレム　骨格が筋肉を覆う姿の宇宙人。

グローザム　全身が氷の鎧のような姿をした宇宙人。

巨大ヤプール　　禍々しい刺や毛、うろこ状の物体に覆われた異次元人。

「そして私、闘士メフィラス星人。以上を持って、暗黒四天王と申します」

「め、メフィラス大魔王……」

ゾフィーが呟くように放つと、闘士メフィラス星人はしずかにゆっくりと笑った。

「違いますよ、私は単なる普通のメフィラス星人です」

ウルトラの父は、暗黒鎧闘士との戦いで彼の言った言葉を思い出していた。

「あの時、メフィラス星の新技术で命を作りだしたと言っていたのは……」

我々を騙したのか、と言おうとした父の言葉を、メフィラスが遮った。

ダイクフレスト

「はっはっは。あれは、暗黒鎧の事です。誰も、メフィラス大魔王と名乗った偉大なるメフィラス星人が復活したとは言っていない。まあ、私も彼の強さを尊敬する身。つつい、口調や声を真似てしまう事がありますし、誤解するの無理はありません」

いつしか、メフィラスの声が変わっていた。じつとりとした響きの声だった。

「おのれ貴様、よくも、よくも……!!」

ウルトラの父が拳を握りかためる。それをみて、グローザムが口を開く。

「我ら、エンペラ星人配下の暗黒四天王。これまで戦ってきたお前らの敵の全てを超える最強の集団だ」
デスレムも一歩、前に出る。

「今の貴様らに勝ち目は無い。まともな戦力が大きく欠けた貴様らではな。カーカカッ、我らとしても張り合いがないわい！」

最後に、巨大ヤプールも、モニターの外の戦士達を見下すように笑った。

「貴様らの仲間になった我らが首領も、宇宙制圧の暁には超獣に改造してくれるわ！」

巨大ヤプールの笑い声を響かせながら、モニターはゆっくりと暗くなっていき、完全な黒に変わった。その直後、再び画面が光を放った。

「っ！」

その画面に映っているのは、ウルトラの星。そこに飛び近づいてくる、異形の集団。そう、今まさに、新たなエンペラ軍の兵士が星に集って来ていたのである。

「なんと……いうことだっ」

さらなる強敵の出現に、戦士達は固唾を飲み込み、震えた。

光の殲滅戦

「う……」

ウルトラマンが目覚めたのは、ある一つの小惑星の上だった。真っ暗な宇宙の真ん中の、小さな星であった。

「どこだ……ここは……」

動けない。体が全く動かない。激痛が走る手足。

「う、あああつ」

装鉄鋼もなくなっていた。右耳に、ウルトラクラウンの一部が残っているだけであった。それも、すぐに落ちてしまっただろう。

「このまま死ぬわけには……いかないっ」

死ねはしない。仲間も、多くの人々も、メフィラスも、自分の事を信頼している。その期待にこたえなくてはならないのだ。しかし、動かない。

それにしても、エンペラ星人。

あれだけの強さを持った敵がいた事に、ウルトラマンは驚愕した。しかも、奴は100%ですらなかっただろうその上に、絶望と怨念の籠った闇のウルトラクロスまで身につけようとしている。エンペラ星人。

「私は、勝たなくてはならないんだ……」

その時、一つの影、いや、光が、ウルトラマンを抱きかかえた。銀色の老人だった。

「ウルトラマンキング！」

「大変であったな、ウルトラマン」

キングは、ウルトラマンを抱え、飛んだ。それと同時に、右耳のウルトラクラウンがぼろりと外れ、どこかへと落ちていった。

宇宙を飛ぶキングは、自分の腕の中にいるウルトラマンに、ぽとりと言葉を投げかけた。

「エンペラ星人……奴はな、誰よりも光を憎んでいる」
「光を？」

エンペラ星　今は、存在しない星である。彼の星は、質素ながらも平和な星であった。小鳥が歌い、風がそよぎ、子供達が笑っていた星だった。

「そんなある日　光が断たれたのだ」

太陽が消えた。星の寿命が尽きたのである。周囲の星々の命は消え去り、やがて銀河全体が死を迎えた。

しかし、一人の生き残りがいた。少年であった。彼は。闇の宇宙を飛びまわり、光を探した。

「彼　あのエンペラ星人の事ですね。彼は、光を探せたのですか」
ウルトラマンが、キングに尋ねた。キングは首を縦に振った。

「ああ、見つけた。それは、彼が永い永い時間、闇をさまよい続け、すっかり心が暗黒に満ちてから、さらに時間が過ぎた後のことだった」

「そんな……！」

そんな時、「彼」が見つけたのが、ウルトラの星だった。プラズマスパークの光が充ち満ちた光の星。平和を絵にかいたような美しい輝きの星。

その時彼は、こう言ったという。

「……死ねっ」

その日から、エンペラ星人の攻撃が始まった。すでに仲間に取り込まれていた怪獣や、新しく連れてきたり作りだしたりした怪獣、ロボットをウルトラの星に次々と送り込んだ。当時の英雄、ウルトラマンケン　現在のウルトラの父によって、それは防がれたが、エンペラ星人自身はその戦いに参加することなく、一時的に姿を隠したのであった。

「奴は、光を憎みきつておる。自分を見捨て苦しめた、光をな。今

では闇の皇帝となつたわけじゃが……」

その時キングは、気付いた。ウルトラマンの目に浮かぶ、一粒の涙に。

「ウルトラマン？」

「エンペラ星人……どれほど辛かったか……」

ウルトラマンの頬を伝う涙。彼の心に、激しい感情が湧きあがり吹き荒れる。

「救いたい……彼をッ！ 救いたい！」

ウルトラマンが、キングの腕から飛び出した。そして、頭上の宇宙を見上げ、雄たけびを上げた。

「ウルトラマン……！」

「私は、助けたいっ！ 守りたいっ！ 『彼』を！ 光に見放された少年を！ エンペラ星人を！」

ウルトラマンの体が、光った。

その頃、ウルトラの星は未だかつてない被害を受けていた。

親衛隊長、アークボガールとボガール軍団。

破壊参謀、ジオルゴンと遊撃隊長エンデイル星人。

巨大ヤプールの送り込んだ、Uキラーザウルスを初めとする超獣軍団。

メタルモンス・ギガバーサークとインペライザー軍団。

海軍・空軍・陸軍の生き残りに、エンペラ軍に賛同した怪獣・宇宙人。

あまりの数の敵に、戦士達は一気にその戦力を失い、苦しめられていた。

「まだ……これほどの戦力があつただなんて！ どこまで底が深いんだ、エンペラ星人軍は！」

全身から光を放ち、敵を攻撃しながら、叫ぶゼアス。この攻撃によ

る敵の被害は、せいぜいが光に触れたものの体力の1%を削る程度であった。100度も使えるほどの体力はゼアスには無い上、全ての敵がこの光に触れるものでもない。

エレキングの放電光線、ベムスターの破壊光線、父のファザーショットにゾフィーのM87光線。どれも、敵との戦力を覆すには効果を成さないものばかりであった。これが、個々にいる敵との一対一であれば、戦士達が敵に勝つことは十分にできる。しかし、あまりの数　敵はあまりに多すぎた。

ヒカリや仲間の戦士達も攻撃するが、殆どが無意味に終わってしまふ。時間稼ぎすらできない状態であった。強豪宇宙人やロボット軍団、かつてのゴモラの仲間達も参加し、ジョーニアスの故郷、U40からも戦士団が駆けつけたが、こちらも大劣勢となる。

「くっ、我々だけではどうしようもない……」

父が、ボガールを殴り飛ばしながら、弱音を吐く。誰も周りで聞いているものはいなかった。いや、聞いていたとしても、意識として頭に入れる余裕もなかっただろう。

その時、一人の男が、父の目の前に立った。

「誰だ？」

「よお……」

額にクリスタルを掲げているという以外の点は、全てにおいてギラギラとした野性的な姿と表情をした、闇の輝きを放つ男であった。

その名を、ダーカース。

「お前か、暗黒鎧闘士！」

あの時、殆どの暗黒鎧闘士がマンやタロウらに敗れ去った。しかし、あの時、ダーカースとダーカースに取りつかれたタイラントだけが、どこにも居なかった。

「エンペラ星人さんが宇宙をブツ潰すのは確実　でもよ、俺はお前と決着がつけたいんでね」

ダーカースの体には、多くの傷があった。

「その傷は……」

「お前もダメージ受けただろ？ んだから、俺もインペライザーの10台や20台、叩きのめしてきた訳さ」

「なんという奴だ……戦いに生きる、戦闘者と言う訳か」

「そうさっ！」

ダーカースが、拳を握った。

「ダアアーーーーーッ！」

ダーカースの素早い突きが空を切り、父に向かって飛んだ。父は見事な大ジャンプでそれをかわし、上空からファザーショットを放つ。

「とっ！」

Ｌ字型に組まれた父の腕から放たれる帯状の強力光線。ダーカースは飛びのいてそれをかわした。代わりに地面が直撃を受け、爆炎の塔を作り上げた。

「はああっ！」

爆炎の中、ダーカースは額のクリスタルから、「カオスデストロイヤー」の光線技を放った。すでに父が着地したことを見抜いており、煙越しに放ったのである。それは、確かに直線上にいる父に向かっていた。

「ふんっ！」

しかし、父もそれを見抜いていたかのように、光線を放った。角から放たれるエネルギー光線「パワー・ビーム」である。二つの強力なエネルギーがぶつかり合い、火花を散らす。

「ぬうううん！」

「ぎいいいいいいっ！」

互いに光線を撃ちだす箇所が、輝きを失い始める。父は汗をかいていた。

「ふぐ、ぐぐうぐ」

ダーカースも、疲れた様子だった。

「へ、へへ……ギガドラの腕を吹っ飛ばした、あの技はどうしたんだよ……」

挑発のような口調で言葉を放った。ウルトラの父最大の必殺技、ビ
ッグ光線を要求しているのである。

「ぬううう、あれを出せというか……」

しかし、父にはもはや、そこまでのエネルギーはなかった。いまビ
ッグ光線を放てば、例えばダーカースを倒せたとしても、その場で力
を失い倒れてしまう。今、ここでそれをやってしまう訳にはいかな
かった。

「さあ、来やがれ、ウルトラの父！」

「ぐうううー……」

ウルトラの父の角のエネルギーが、破裂するように弾け飛んだ。弾
けたエネルギーは、空气中に拡散され膜を作り、カオスデストロイ
ヤーから一瞬、父の身を守った。

「ぢいっ」

ダーカースが口牙を軋らせ唸る。次の攻撃に転じるべく、構えをと
る。両手に生える鋭い爪を凶悪な形に曲げ、口を開き鋭い針のよう
な牙を露わにする。

その瞬間、ダーカースの顔面にヒビが入った。

「ぐおうつ！？」

ウルトラアレイであった。父の持つ神秘のパワーを持った武器。そ
れを、直接ダーカースは顔面に投げつけられたのであった。

「うぐああああ……」

よろめくダーカース。アレイが顔面に突き刺さったまま動かない。
ヒビは少しずつ、広がっていく。

「とどめだ……！」

父の言葉とともに、アレイが光を放つ。強烈な光だった。白や黄色、
銀、赤い色のフラッシュが焚かれ、光のドームを作りだす。

「があああああつ！」

ダーカースの体が、木っ端微塵に吹き飛んだ。黒く光る粒が、鎧内
部のタイラントに降り注ぐ。そして、タイラントが倒れるとともに、
粒は全て落ち切った。

「さらば、ダーカース……」

楽しかったぜ、ウルトラの父……

「!？」

初めて戦った時、あんたが俺を選んでくれなかったら、ここま
で楽しく終われなかった。短い命だったけどよ

「ダーカース……」

魂の声が聞こえた気がした。戦闘狂のダーカース。強い敵と戦いた
かったんだな、ダーカース。ウルトラの父は少しの間、彼の為だけ
に空を見上げた。

光の殲滅戦（後書き）

今回登場した敵軍は、言うまでもなくウルトラマンメビウスに登場したエンペラ星人の軍勢です。まんがやショーでしか登場していないキャラもいるので、興味のある人は調べてみてください。

ギガバーサークのみマックスの怪獣ですが、インペライザーの着ぐるみの足は彼の足の流用ですので、使わせていただきました。

黄金の光と七色の流星

エンペラ星人の大軍隊に襲われたウルトラの星は、未だかつてない危機を迎えていた。誰もが苦しみ、誰もが倒れ、誰もが崩れていく。巨大なギガバーサークが、建物を次々と破壊しながら進んでいく。向かってきたものは、光線で撃ち落とされた。

ウキラーザウルスが、次々と人を襲う。ウルトラ戦士を叩き、打ち、時には喰らう。

ジオルゴンが、体を分離し強固な岩石群となり飛びまわる。後ろから、上から、奇襲して痛めつけてから、最後は頭を打ち砕く。

アークボガールが、全てを喰らう。腹部の口から、全てをのみこむ竜巻を放ち、体内へと誘うのだった。

そして、逃げたり隠れたりしたものは、エンディール星人の部隊によってすぐに見つかり、討たれた。

そんな戦火の中、瓦礫に囲まれる二つの影があった。

「ちつくしう……俺達だけでどうしろってんだ」

倒れ伏すベムスターとエレキングの上空を、ボガールの集団が飛びまわる。一口にボガールと言っても、種類は多く居た。

コブラのような皮膜を持ち長い尾と短い爪を持つボガール。小さく、広く広がる口を持つボガール。

口だけが大きなボガール。

舌が長いボガール。

一本角のボガール。

腹に口のあるボガール。

槍を持つボガール。

全身が銀色のボガール。

それらが何体もいる。まだ種類はいるかも知れなかった。そのうちの何体ものボガールを、ベムスター達は倒してきたのだが、やはり、

敵の多さに苦戦し敗れたのである。

彼らは、喰っていた。星に生きる命も、ただそこにある瓦礫も、その「元」となった建物も喰った。やがて、その目は倒れ伏すベムスターとエレキングに向く。

「ぎりる……」

一番数の多いと思われる、小さなボガールのうちの一匹が、ベムスターまで飛んできて、地に立った。ベムスターの体が反撃の態勢を取る間もなく、その身に牙を入れる。さっくりと入ったその牙は、すぐに赤く染まった。

「は、離れろてめえっ！」

横にいたエレキングが、装鉄鋼を纏った腕を振り回してボガールを叩いた。ボガールはぎっ、と声を鳴らして、建物に叩きつけられ、死んだ。

「べ、ムスター、ここは危険だ……」

「お、おお……」

ベムスターがゆっくりと立ち上がる。装鉄鋼はすでに無いも同然の状態だった。尾の先の鉄球状の装鉄鋼は別として。

「がりゆる！」

「うらあ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!」

仲間の死を察してか、餌を欲してか、ボガール達が突如として、二人にむかって急降下を始める。勢いよく向かってくる爪や刃の切っ先が二人に向けられた。

「やばいぞっ！」

「みてろお！」

エレキングとベムスターが叫んだのは同時だった。その直後、エレキングの両腕の装鉄鋼がドッキングする。それによって、エレキングの全身から周囲に向けて電流が放たれる。

「ぴがーーーーーっ！」

「ぎゃばば……」

ボガール達は、向かってきた傍から吹き飛ばされていく。彼らが電

気に弱いことは、先ほどまでの戦いでエレキングは重々に承知していたのである。しかし、まだ半数も倒せていない状態であるが、ここでエレキングのエネルギーは尽きることになる。

「え、エレキング！」

膝をついたエレキングを心配するベムスターだが、次の攻撃に備えなければならぬ。

「くそつ、くそおおっ！」

頭の角から光線を放つベムスター。小さいボガールは倒せるものの、大型のボガール（普通のサイズの事ではあるが）を倒すには2、3発では不可能。すぐに彼らは、ベムスターの目の前に迫った。

「く……くそおおっ！」

ベムスターが素早くジャンプし、敵の頭の上を飛び越す。それに気を取られた敵は、尻尾の鉄球を顎に浴びることとなり、倒れた。

しかし、他のボガールはそうはいかない。ベムスターを捕らえ、再びエレキングの所へと投げ飛ばした。

「ぎ……ぐぞおお……」

ベムスターが悔しがり叫んだその時、一つの光がベムスターの目の前の敵を吹き飛ばした。

「こ……これは!？」

「大丈夫か、ベムスター！」

「ぞ、ゾフィー！」

ゾフィーであった。光輝く装鉄鋼に身を包み、赤いマントを翻す隊長ゾフィーが、ボガールを吹き飛ばしたのである。

「ここは私が戦おう！ 援護を頼むぞベムスター！ エレキング！」
ゾフィーが二人の前に立ちはだかる。ベムスターが、叫んだ。

「お……おう！ そ、そうだゾフィー！ あいつらは電気に弱いぞ！」

「……そうか、ありがとう！」

いつの間にか、戦士達は壁を背にした状態でボガール軍団に取り囲

まれていた。ボガール達はぎひやぎひやと笑い声のようなものを発し、ゾフィーを狙う。

「くらえ、Z光線！」

Z光線とは、ゾフィーの必殺技の一つである電気光線の事だった。

電気に弱いボガール達は、なぎ払うように放たれる次々と倒れていく。

「ぎひやああっ！」

「つつがが！」

「みぎいいいいいいいい……」

「おおっ、やったぜ！」

歓喜するベムスターとエレキング。ベムスターは、光線による援護を続けていた。

そして、早くももう少しで敵全滅と言ったところで、エレキングが上空の影に気がついた。

「よし、いいぞ……」

「待てッ、あれは！？」

「闘士ボガールモンス、参上！」

その頃……ゼアスの戦い。

「クロスペシュツシユラ光線！」

ゼアス最大の必殺技、クロスペシュツシユラ光線が決まり、超獣が次々倒れていく。しかし、ゼアスのエネルギーに対し超獣の数たるや、凄まじい差であった。Uキラーザウルスも控えている状況で、彼自身も術があるのか疑問視していた。パワード流派も助太刀に現れたが、均衡は破れそうになかった。

そして、インペライザー軍団。これに対して今戦えるものはいない。ウルトラの父でさえも、ダークースとの戦いの傷をかばいながら、インペライザー1,2台と戦うのが精一杯であった。

「まだまだ敵は多い……みんなは無事だろうか？」

ゾフィとボガールモンスの戦いは続いていた。

ボガールモンスは、電撃の通用しない敵であった。普通のボガールに禍々しい牙や爪が生えたような姿をしており、戦士達を畏怖させた。ゾフィ最大の技M87光線もそれほど効果がなく、彼を震えさせていた。

「ゲゲゲ……」

不気味に笑うボガールモンス。ゾフィは装鉄鋼の冷たさを肌で感じつつ、敵を正面から見ていた。

「どうすれば……」

「死ねえいつ！」

ボガールモンスの右腕が、不規則な形の無数の角や刺が生えた瘤に変わり、ゾフィに向けて振り下ろされた。

「はあっ！」

しかし、それがゾフィに届くことはなかった。金色に輝くオーラが、それを阻止したのである。

「なんだと？ 何だこれは！？」

ゾフィとボガールモンスの間に、金色のオーラが立つ。「立つ」と表現されるのは、それが人の形をしているからである。

「お前は……ウルトラマン？」

そう言ったゾフィの体に、金色のオーラが入り込んだ。ウルトラマンと呼ばれたオーラは、そのままゾフィの体と、ベムスターとエレキングの体に丁度3分の1ずつに分かれて全て注ぎ込まれ、消え去った。

「なんだ……なんだなんだ！ 死ねと言ったら死なぬかあ！」

ボガールモンスが再び、棘だらけの右腕を振り上げた。

M87流星光線！

ゾフィの右腕が、強く前に押し出されたその刹那、虹色に輝く光の

塊が一つ、また一つとボガールモンスの体に降り注ぐ。腹を撃たれ、胸を撃たれ、足を撃たれ、腕を撃たれ、顔を撃たれ、尾を撃たれ、ボガールモンスはものも言わずに消え去った。後ろにいた残りのボガールも、ボガールモンスの肉体を貫通した光を受けて、消え去った。

「お……おおっ」

「すっげえ……」

ベムスターとエレキングは、ただただ目を見張るだけだった。

その頃……太陽神の元で眠る、戦士達。

いや、眠っていた、と言うべきであった。

彼らは、目覚めていた。光の力を手にして。

復活！ 栄光のヒーロー！

戦士達が、帰ってきた。

ウルトラセブンが。ウルトラマンタロウが。ウルトラマンエースが。ウルトラマングレートが。

4大守護闘士が次々と、エンペラ軍を叩いていく。

アイスラッガーを手に取ったセブンが、エネルギーを集中し、超獣レッドジャックを斬りつける。

「スラッガー・スラッシュ！」

「ギーーーーーッギギ！」

真つ二つに切り裂かれるレッドジャック。

タロウのストリウム光線が、グレートのバーニングプラズマが、エースのメタリムバーストが、次々と超獣達を葬り去る。

「ギャゴアーーーーッ！」

「ガアアーーーーッ！」

「ギゲエエエッ！」

「どうでえっ！ ウルトラの星をなめんなよッ！」

エースが必殺の剣、「メタリウムソード」を振るい、次の敵を切り裂いた。

「一体……なぜこのようなことが起きたのだ！？」

ウルトラタワーから、ウルトラ戦士が周辺を見渡しながら、言う。横でその傷を癒すウルトラの母は、逆に大喜びにはしゃいでいた。

「見てくださいっ！ タロウが、セブンが！ 次々と敵を！」

「あ、あの……はやく傷を治してください……」

復活した戦士はそれだけではない。ウルトラの父も、ゾフィーも、ジャックもレオもアストロも、闘士五獣士も鋼魔四天王も完全復活とにかく全ての正義の戦士達が立ち上がり、さらなる力で敵を滅ぼ

していく。

「そうかつ、君達もあの金色のオーラを受けて！」

ゾフィーが新必殺技「M87流星光線」を撃ちながら、ティガ達に話しかける。

「そうなんです、我々も何故あんなことが起きたのか不思議で」

ゾフィーは、ティガの顔を見ながら、笑った。

「私にはわかる……宇宙最強の男が、一つの奇跡を起こしたのだ…

…」

「奇跡……」

ティガは呟き、そしてインペライザーを殴り倒した。

そして 今戦っているのは、単なるティガやダイナではなかった。彼ら、奇跡の呼び寄せた援軍は、金や銀、赤や青、または透明な色をしたさまざまな鎧をそれぞれで身につけているのである。

「グホオ、あの鎧はなんだ……」

エンペラ軍の最後の参謀、ジオルゴンが呻くようにティガ達の鎧を見る。装鉄鋼ではなく、それぞれに武器を装備できる仕掛けがしてあるあの鎧。

「あれこそが、新発明のG・ウェポンじゃ！」

ウルトラタワーのモニターで、戦いを見ながら解説するのは、そのG・ウェポンを設計したノタニ博士とワモート博士である。同じく、開発・改良を手掛けた各防衛チームの隊員達も揃っている。

「すごいっ、戦士達がさらにパワーアップを！」

目を輝かせる万丈アサ。カネゴンやピグモンも、大喜びしている。

「さあ、行け、光の戦士たちよ！」

「あの程度の敵に……そこまでする価値があると思って？」

ノリノリのノタニ博士達の後ろの壁で、一人の女が呟いた。

ティガの振るった剣が、ファイヤーモンスを切り裂く。

ダイナの剣が、ボガールを貫く。

残る強敵は、ギガバーサークのみ。エースキラーとゼットン、レオ兄弟、ジャック、80、ジョーニアスの攻撃が激しく打ちおろされる。

「キラー・ファントム！」

「ハイパーメテオ火球！」

「ウルトラ・ダブル・フラッシャー！」

「シネラマクロススパーク！」

「ダブルバツクルビーム！」

「プラニウムハリケーン！」

巨大な閃光がほとばしり、巨大な火の玉が焼き尽くし、真紅の光波が脅かし、白銀の波動が消滅させ、二対の輝きが打ち壊し、怒りの嵐が裂き断ち穿つ。

「ギガガガガ……！」

ギガバーサークはすでに、あちらこちらが大破していた。

元々エアロキングやアクアキングより落ちる性能であり、それを力スタマイズしてあるものの、前の戦いよりもパワーアップしている上に数も多い光の戦士達の前に、なすすべなしかったのである。

ミサイルやビームを放ち、攻撃をするものの、決定打に欠けるのだ。

「なんだ、まだ終わってないのか！ 助かったぜ！ こっちは長旅してたんだからな！」

「おまえ、ブラックキング！」

飛んできたグレートが気付いたのは、ギガバーサークの足元に仁王立ちする用心棒闘士ブラックキングの姿であった。

「うおらああああああああ！」

ブラックキングの多大なパワーが、ギガバーサークを持ち上げた。そしてそのまま投げ飛ばされ、数キロ離れた場所に、敵は落ちた。

「お次は溶岩熱線だ！」

「あいつに続け！ 追撃だ！」

グレートの拳からナツクルシューターが放たれ、やってきたネオス

と21の合体光線が炸裂。闘士五獣士も次々と攻撃を喰らわせ、とうとう何もできないまま、ギガバーサークは崩壊したのだった。

その頃、ウルトラタワーの特別室。暗黒司祭ジェロニモンが幽閉されている場所である。

「チツ、現状すらわからんとは、なんともケチな奴らじゃわい」

ジェロニモンは手錠をはめられ、椅子に特殊なロープで縛りつけられていた。警備には、数人のウルトラ戦士が囲んでいる。

「たった今入った情報だ。エンペラ軍が大挙して押し寄せてきたが……我ら正義の闘士達によって、壊滅状態との事だ」

ジェロニモンがビクリと動く。

「ぬうつ！？ ま、まさか、そんなバカな！グレイテストキングはどうしたのじゃ！」

「吹っ飛んだよ……粉になった」

「っ！？」

「な、何だお前は……あああつ！」

エンペラ星人が現れた。特別室には、強固なカギがかけられているはずだった。しかし、扉はいつの間にか存在しておらず、部屋は廊下とつながっていた。

「エンペラ星人様……」

ジェロニモンが明るい表情を見せた。安堵しきった、にやけ顔だった。

「え、エンペラ星人だと！ ゆるさんっ！」

ジェロニモンを取り囲んでいた戦士の一人が、手に光を集中してエンペラ星人に飛びかかった。

「まてっ Trom！」

他の戦士が止めるのも聞かず、その戦士 Trom は、エンペラ星人に光る右手を打ちおろし 逆に殴り飛ばされた。

「足りぬ……」

ポツリと呟く、エンペラ星人。

「えっ？」

「あと一つ、あと一人分の絶望があれば……」

「ほ、ほおお、な、ならば他にもウルトラ戦士がおりますが……」

ジェロニモンは、不思議な顔をした。エンペラ星人の手が、自分に向いて開かれているからである。

「別に誰でもいい。お前が死ね」

「は……っ？」

それから少しの間、特別室にジェロニモンの叫び声が響き続けた。どうじに、ぐちゅりぐちゅりとした何かをかき回すような音や、ぴきぴきばきばきと折れたり割れる音、ブチブチと引きちぎれる音が、鳴り続けた。

それらの音が終わる頃、それが部屋にいる全ての者の生命が消えた瞬間となった。エンペラ星人を除いて。

復活！ 栄光のヒーロー！（後書き）

超闘士鎧伝に登場した、G・ウエポンを使わせていただきました。

あまり詳細は知らないんですけども、ここではノタニ博士や防衛チームの作った鎧状の新兵器、となりました。

この戦いもようやく最終決戦に向かって来ました。これからまあまあ長くなりそうですが、宜しくお願いします。

マイナスエネルギーの闘士

光の戦士たちの活躍によって、エンペラ軍は圧倒的に敗北。ウルトラの星に再び静寂が戻った。

戦士達は総力を挙げ、エンペラ星人の居場所をつきとめようとしていた。

「なんで俺たちも手伝わされるんだ！」と嘆くササヒラー。

「オデ達にも出番が来てよかったじゃないですか」とヤメタランスが言った。

その頃……宇宙の片隅で、黄金の光を放つ男が一人。ウルトラマンである。

「終わったようだ……」

横で見ていたウルトラマンキングが、呟いた。

ウルトラマンを覆う金色のオーラがふっと消えた。

「全ては、お前の他人を想う気持ちかなせた業じゃ……」

「……はい」

戦士達が受けた金色の光の正体は、敵をも想うウルトラマンの心のが生み出した、超闘士エネルギーの分身体であった。それらがウルトラの星に飛び、彼らに力を与えたのである。

「キング……我々も行きましょう」

「うむ」

その時であった。ぴん……と音が鳴り、キングが倒れた。

「なっ？ キング……」

「ぐふ……っ」

「見つけましたよ、超闘士……」

「お前は……メフィラス!?」

ウルトラマンの前に現れたのは、暗黒四天王の一人、闘士メフィラス星人であった。

「あなたさえいなくなれば、ウルトラの星は落ちます……」

右腕を上、左腕を下に、構えをとるメフィラス星人。ゆつたりとした余裕の見て取れる表情を、体全体から発している。

ウルトラマンは理解していた。この男が、ウルトラキーンとミラーを奪って行った犯人であることを。警戒していた。しかし、どこかで思ってしまった。もしかしたら、この男が、復活したあの男だったのではないかと……と。

「行くぞ……」

ウルトラマンが、動いた。高速のパンチを真つ直ぐに突き出して。

メフィラスが、両腕の間に空いた隙間を閉じた。両手で噛みつくようにパンチを受け止めたのだ。

「くっ」

「フツッ」

メフィラスの両掌が、ウルトラマンに向けられた。同時に放たれる光線。ウルトラマンの体の前面を焼き尽くすかのような痛みが、一気に襲う。

「がああああ……」

「甘い男だ……」

メフィラスの暴君のような拳が顔面を打つ。顔にひびが入るかのような感触がする。頭の中で、温かいものがぴちゃぴちゃと波打つ音がした。

「さあ！ どうした！」

蹴り。脚に蹴り、腹に蹴り、頭に蹴り、腕に蹴り。メフィラス星人の容赦のない蹴りが降り注ぎ襲いかかる。ウルトラマンは一瞬、意識を失った。

「はっ！」

しかし、ウルトラマンはすぐに意識を取り戻し、目から光を放った。それがメフィラスの目に当たると、メフィラスは大きくのけぞった。

「うがああ……強烈な……！」

「はあっ！」

ウルトラマンの鉄拳が、今度こそメフィラスの腹部を捕らえた。メフィラスの腹が一気に凹み、胸や顔が盛り上がった。それはすぐに戻り、しかし隙ができ、顎に強烈な蹴りあげを喰らった。

「が……！」

「スペシウム光線！」

「ぎああああ……！」

光の帯を浴び、メフィラスの体が輝く。光がスパークし、体の中でバチバチと音を立てる。

「やりますね……さすがは超闘士ウルトラマン！　今は超闘士の力を使っていないというのに、これだけの力が！」

メフィラスの目が光った。スペシウム光線を撃ち終わったその直後、彼は装鉄鋼から一つの光の玉を取り出した。真っ赤な光だった。

「これが何か分かりますか？　暗黒鎧闘士の破片から採ったマイナスエネルギーですよ」

マイナスエネルギーとは、怒り、悲しみなどの負の感情から生まれる悪のエネルギーである。

「これに取りつかれた『かつての』宇宙人共や、身の程知らずのバカ怪獣らの、自分たちの弱さからくる絶望感や悲しみ怒り妬みを、暗黒鎧に吸収させました。さらに暗黒鎧闘士自身らの、敗北による絶望や恐怖を集めたのが、これです。ようやく暗黒鎧闘士が全員死んだので、お披露目と言う訳ですよ」

「そのために命を生んだのか……自分の欲望の糧とするためだけに！　お前もエンペラ星人と同じ……いや、それ以上の下衆だ！」

「フン。全ての生命が他の者の命を奪って生きていることと同じですよ」

「生きるためだ！　欲望とは違う！　必要以上の力を……」

「格闘家……と言うのは、必要以上の力を欲し、トレーニングの環として殺す生き物を選んでいるようですがね……ま、何でも良いではないですか。我々は今、戦おうとしているのですから」

そうして、メフィラスは体内にエネルギーを流し込んだ。胸に光の

玉を充てると、それは吸い込まれるように消えていったのである。

「はあああつ！ みよ！ これがマイナスエネルギーを得た私だ！」
メフィラスの気合と同時に、全身が赤い光に包まれる。強力な力を感じさせる、邪悪の鼓動が波を打つ。邪気に身を包まれたその姿
言わば、悪の超闘士の誕生であった。

「……！」

ウルトラマンも、気を発した。全身を金色に包んだ、超闘士の姿となる。二人のぶつかり合いが始まった。

「やった！ やつとわかったぞ！」

ウルトラタワーの指令室に、セブンが飛びこんできた。ウルトラの父は驚いて振り向いた。

「敵の本拠地がわかったのか！」

「はい、モニターで宇宙図を映し出してください！」

ヒカリが映し出した宇宙図を見て、セブンが言った通りの座標にズームアップする。そうすると、黒い霧のようなものに包まれた、禍々しい髑髏のような装飾のある戦艦が映し出されたのである。

「おおつ、これが……」

「敵の戦艦、ダークネスファイアです。エンペラ軍の兵士の頭脳に直接聞くことで……それだけでも相当苦勞しましたが、成功したんです！」

「やったなセブン！ これで後は、戦うだけだ！ 早速敵陣に向かう最後の部隊を編成しなくては！」

「はい！」

そんな頃にも、ウルトラマンとメフィラス星人の対決は、熾烈を極めていた。ウルトラマンはかなりのエネルギーを消費してしまっているが、メフィラスは衰えることなく技を放ってくる。

「ふあはあはは！ 自分でも恐ろしくなる程の力だ！ それっ！ 死ね死ねウルトラマン！」

赤く光る拳が叩きこまれる度に、金色のオーラが弱まってくるように見えた。

「く……うつうつ……」

ピコン、ピコン、ピコン

「！」

「カラータイマーが鳴ってきたようでは、終わりですねえ！」

「ま、まだだっ！」

金色のオーラをそのまま光線として発する。赤い光を掻き散らし、メフィラスの体にそれは当たった。

「ぬうつっ！ これは……」

その瞬間、ウルトラマンの力が尽きた。3分間たったのである。

「……っ」

メフィラスの体に、赤い光が戻った。

「ふ、ふふふ……一瞬焦りましたが……終わりですね」

「ウルトラマンを倒される訳にはいかん！」

再びメフィラスの体に、一筋の光が放たれた。キングの必殺技「キング・フラッシャー」であった。

「ぬうつ」

メフィラスの体が光に包みこまれる。赤い光は消えていた。

「お前は強大な力を得たと思っていたようじゃが……どうやら、その身を包むエネルギーには隙があるようじゃぞ」

「なにっ？」

「全体がマイナスエネルギーで出来ているかに見えるそのエネルギー……しかし、中には正しい光も含まれておる」

「なんだと！？ ということだ！」

「さあな……しかし、中には絶望を感じずに死んでいった命もあった、ということのようじゃ」

「？ ？ ？ 一体……」

「はあ……！……！……！……！……っ！」

ウルトラマンのスペシウム・アタックが轟いた。隙だらけのメフィ

最後の世界へ

ウルトラ戦士の一団の乗った「スターフェニックス」が、エンペラ星人の戦艦「ダークネスファイア」へと飛んで行く。

スターフェニックスとは、フェニックスの名を代々受け継いだ学者の家系に生まれた天才科学者ワモート博士の設計した巨大な宇宙船である。

乗っているのはウルトラ戦士だけではない。怪獣、宇宙人、ロボット。正義の戦士達が、黒い霧に覆われた闇の園へ向かって行く。

「遠いな……ダークネスファイア」

全ての戦士が揃った巨大な操縦室で、闘士セブン21が言った。

「ああ、まだあるだろう」

ネオスが静かに応える。

「腕が鳴るぜ……」

拳を握りながらそう言った、21の歯は小刻みに震えていた。

「お前もか……」

ネオスが、すぐ横の21に聞こえないように、静かに言った。

「ウルトラマンがいなくて大丈夫かな……」

そう言ったのは、エースキラーだった。

「ヘッ、泣き言かよ」

エースがエースキラーを小突く。

「フン、てめえがお気楽過ぎるんだよ」

その時、スターフェニックスが揺れた。大きな地震と間違えるほどの、大きな揺れであった。

「ごわあっ」

「なんだなんだ」

「隕石の衝突か？」

「いや、この宇宙船は隕石の衝突くらいでは……」

体制を整えながらそれぞれで言を発する戦士達。その中で一人、リーダーの前にいた闘士ウルトラマンメビウスが「それ」の存在に気付いたのであった。

「敵です！ あれは……」

「モニターに映せ！」

レオが叫ぶ。

「はい！」

メビウスがボタンを押した。その直後モニターに映ったのは、曲がりくねった金色の三本角に、同様に怪しく煌びやかな大きな爪を持った巨大な生物であった。

「あれは……アークボガール！」

ゾフィとエレキングが同時に叫んだ。前回の戦いで、ウルトラの星を襲った軍団を指揮した、アークボガールが飛び、スターフェニックスの外装甲を攻撃しているのである。

「あの戦いで私は奴が攻撃しているところを何度か見かけたが……結局、交戦することなく終わってしまった。まさか、ここで現れるとは……」とゾフィー。

「とにかく、ここで足止めされる訳にはいきません。数人がかりで、一気に倒してしましましょう」とジャックが言った。

「よし、じゃあ僕が一気に！」

タロウが一步踏み出した時、メビウスが止めた。

「待ってくださいタロウさん、唯一の超闘士であるあなたがこの場を離れるのは良くありません！」

「確かにね……畏を張っているかもしれないし、思わぬダメージを君に受けてもらう訳にはいかないからね……」

ザラブ星人も、メビウスに賛同する。見ると、ロットを手にとっていた。それに呼応するように、バルタン、ダダ、ケムールも目の色を変える。

「鋼魔四天王か……いいだろう、行ってくれ」

セブンがそう言った時、メビウスが室内に響き渡るほどの声を出し

た。

「僕にも戦わせてください！」

「お前が……？ メビウス」

「はい！ お願いします！」

セブンは困惑する。確かにメビウスは優秀で、闘士にもなり、黄金のオーラでコンディションも抜群になっている。しかし、あくまでもルーキー。どうしたものかと困り顔を見せた。

そこで、セブんに意見したのは、鋼魔四天王だった。

「いいんじゃないの？ 俺たちも行くしょ」

「そうそう……一気に終わらせればいいんだからさ」

「負けはしない……すぐに追いつく」

「フォツ、フォツ、フォツ。右に同じだ」

セブンは驚いた顔で、四人に振り返った。

「お、お前ら何故……」

「そんなことは後だ。行こうぜ、メビウス！」

「は……はいっ！」

そう言っ、5人はスターフェニックスを飛び出していった。すぐにハッチが閉められ、スターフェニックス内は静寂に見舞われた。

「どうして……だ？ あいつら」とグレート。

「さあな。ここでゴチャゴチャ言ってるよりはいいと思ったんじゃないの？」

言ったのはブラックキングだった。レッドキングは彼を見て、「居たのか」と意外そうな声を上げた。

それから程なくして、リーダーからメビウスらとアークボガールの姿が消えた。モニターにもすでに映っていない。

それを確認して息をのむ戦士達に、タロウがポツリと呟いた。

「メビウスは僕にあこがれていた……僕は『あの人』に戦いを教わった……だから、鋼魔^{かれら}四天王は……きつと……」

伝えたい。『あの人』に戦いを教わったタロウにあこがれるこの若者に、『あの人』のことをほんの少しでも伝えてみたい。彼らの心

に宿ったのは、そんな一念だったのかもしれない。タロウは、宇宙の空ににあの人を描き、窓の外を眺めたのだった。

「貴様らに邪魔はさせぬぞ……エンペラ皇帝の邪魔は！」

アークボガール。近くで見ると、また迫力が違った。煌びやかにして曲がった角は、まるで王冠のように輝いている。ぬめりとした蛇のような外皮は、紫の光沢を放ち戦士達に照りつける。真つ赤な目玉は、怒りにも嘲りにも思える精神の内を彼らに伝えていた。

「ゆけいっ！」

アークボガールが巨大な爪の生える右腕を振りかざすと、宇宙の闇の中から、10ほどのボガールの姿が現れる。まるで、最初からそこにいたかのように、自然に、何の違和感もなく、居る。ひよつとしたら、誰もが気付かなかったのかも知れなかった。

「ゲアラ~~~~~~~~~~~~ッ！」

ボガール達は、奇怪な叫び声をあげながら、メビウス達を取り囲んでいた。10の方角から光線を放つボガール達。

「なめるなよ……喰らえっ！」

ケムール人の両腕の巨腕型装鉄鋼が、強烈な光を放つ。「ファイナル・パワーグライド」である。光は周囲を包みこむように輝きを増し、ボガールらの光線を打ち消してしまった。

「続け！ こいつら程度なら楽勝だ！」

バルタン星人が、ハサミから光線を放ち正面にいたボガールを撃った。ボガールの顔面にそれは当たり、彼を宇宙の藻屑と変えた。

「ギガアッ！」

ボガールの内の一体が、ザラブ星人に飛びかかった。両腕が巨大な棘のびつしりと生えたグローブのような形をしている。ザラブは、得意のロッドによる突き攻撃を、敵の右手に打ち当てると、棘が軽く崩れ折れた。

「ギアアッ！」

ボガールが叫ぶ間もなく、ザラブの旋風光輪波が敵を貫いた。

「よし！ ならば、雑魚は私に任せろ！」

ダダが飛んだ。残るボガールに向けて、突進する。

「なめるな！ やれ！」

アークボガールが叫ぶと、ボガールらはそれに応え、ダダに飛びかかる。中には、光線を撃つ者もいた。

「フフ……甘い！」

ダダが、増えた。

「なにい！？ 分身！？」

アークボガールが驚嘆の声を上げた。ダダの高速移動によって、多くの残像による分身が生み出されたのである。あつけにとられ声も出ないボガール達は、ダダの装鉄鋼の、両腕の爪に次々と切り裂かれ倒れていった。

「仮面の舞」。以前、ウルトラの星を襲撃した時に使った彼の技がこれである。分身による残像と2枚の仮面を使い、自分が大勢いるかのように見せかける。今回は、必要な仮面は持っていないので、「分身の舞^{わけみ}」と言ったところだろう。

「お、おのれ……」

がちがちと怒りに震えるアークボガール。その顔面に、容赦なく光の束が舞い落ちる。

「ぐふあああつ！」

戦士達の放った光線であつた。さらにメビウスが、飛んだ。

「メビウムブレード！」

左腕のメビウスブレスから放たれる光の剣。素早い動きとともに、それはアークボガールの腹に突き立てられた。

不死鳥の波動

「メビウスのやつ、大丈夫かな」

スターフェニックス内で、エースが呟いた。それが耳に入り、タロウが笑う。

「大丈夫ですよ、彼は優秀な闘士ですから」

「でもよお、まだまだ新入りの新入りだろ？ 鋼魔四天王の足引っ張ってないか心配だよ」

そこに、ジャックも割って入って来た。

「足を引っ張るところか、殺されてしまっている可能性もあるからな……」

「大丈夫ですよ、彼を信じてください！」

タロウは胸を張ってそう言った。我が事のように。

小惑星帯 メビウス達が戦う場所。

戦いは、メビウス達の勝利と思われたのだが……

「き……効かない!？」

メビウスがアークボガールの腹に突き立てたと思った刃、メビユームブレードは、アークボガールの腹に空いた大きな口が開くことによって、敵の体に接触さえしていなかったのであった。

「は、腹に口があるぞ!」

と驚くバルタン。アークボガールが嗤う。

「フフ……驚く事はない。貴様たちの仲間にもそういう奴がいるではないか」

「うるせえ！ これでも喰らえ！」

ケムール人がファイナル・パワーグライドを放つ。しかし、それさえも敵には通用しなかった。

「ぶ……分身だ!」

いつの間にか、アークボガールは分身していた。ケムール人が必殺

技を放つか放たぬかの間に、敵の数は6体に増えていた。ファイナル・パワーグライドが向かった先にいたのは、幻影の分身だったのである。

「分身なら負けねえ！ 行け、P S Y - バルタン！」

炎のような物質がバルタン星人を象ったような分身体、P S Y - バルタン。バルタンの10分の1の力を持つ分身軍団のそれぞれが、アークボガールを囲み、襲う。多くのP S Y - バルタンの攻撃は素通りしたが、残る何体かが攻撃を当てることに成功した。

「良いぞ！ これで本物がだれかわかる！」

「あれだ！ あれが本物！」

ダダとザラブが喜び勇んだ瞬間、一体のアークボガールが、腹部の口を大きく開けた。

「愚か者め！」

アークボガールの口から、突如として竜巻が発生する。竜巻に吸い込まれ、本物を囲んでいたP S Y - バルタンらは一気にアークボガールの体内へと落としこまれてしまった。

「な、なんだとお！？」

バルタンが驚くが、その瞬間、アークボガールの腕から光線が放たれ、バルタンを撃った。バルタンは、気絶した。同時に、P S Y - バルタンが消滅する。

「ああっ、P S Y - バルタンが！」

「なんてやつだ！」

アークボガールらは素早く動き、シャッフルするかのように入れ替わり誰が本物かわからないようにした。

そこでメビウスは、右手を左手首のメビウスプレスにかざし、何発もの光の小刃「メビウムスラッシュ」をさっと放った。

「ぬっ！」

それぞれがそれぞれの敵に向かって飛び、殆どは当然すり抜けるが、そのうち一発がやはり本体に命中した。

「あれが本物！」

その瞬間、ダダのクロー・シューターとザラブの旋風光輪放射とメビウムシールドが、同時に本体を襲った。

「ぐふあ……！」

そして、ケムールが再び、ファイナル・パワーグライドを撃ち放ち、敵の顔面をエネルギーで叩きつけた。

「がはあああ……！」

「大した事ないぜ、こいつ！」

「何を雑魚がああ！」

アークボガールが飛んだ。その巨大な爪が振り下ろされ、危うくケムールに当たりそうになった。ケムールは後ろに下がって避けたが、敵の口から放たれた猛火に襲われる。

「ぐおおお……！」

「ちいつ！」

ザラブとダダが、互いの持つ武器でアークボガールの背を叩き、斬りつけた。さらにメビウスも向かう。

「愚か者めえ！」

アークボガールが、後ろにいた二人に向けて腕を薙いだ。ザラブとダダの胸に赤い一本の太い筋ができる。

「ぐふあ……っ」

ザラブが血を噴いて、倒れた。ダダも、よろよろとふらつく。

「はああっ！」

ダダに向けて、アークボガールの長い尾が、投げられた縄のように飛びかかった。蛇のようなそれは、ダダの首を巻き取り、締める。締めるというより、引ききろうとしていた。

「あくああああ……！」

「だ、ダダさん！」

メビウスが敵の頭上から攻撃を仕掛ける。強烈なキックだった。アークボガールの頭頂部にある一本の角の、根元に撃ち当たった。さらに、メビウスの体が回転し、摩擦によって火が起こりダメージを上げる。「メビウスピンキック」であった。

「うごあつ！」

アークボガールの尻尾の力が緩んだ。ダダは素早く抜け出し、そのまま倒れた。

「てやあつ！」

メビウスの攻撃はさらに続いた。角に向けて、連打で蹴りを入れていたのである。

「くう、雑魚め！ 甘く見るなよ！」

アークボガールの角が、光を放ち始めた。その光がスパークし、バチバチと音を立てる。しかしその時、ケムールが敵の顔面に強烈なパンチを喰らわせた。

「ごはっ！？」後ろに飛ぶアークボガール。

「てめえこそ俺らをなめるんじゃないやねえ！」

メビウスとケムールのダブルパンチが、敵の胸を打った。音と共に、それは敵の胸骨を砕いていた。

「いゝゝゝゝっ！」

アークボガールが苦痛にゆがんだ。しかし、その顔はすぐに笑い顔に変わった。

「バカめ……やはり雑魚だ！」

アークボガールの胸が、ぱっくりと開く。それは巨大な口であった。

「しま……」

「おそい！」

竜巻が起きた。メビウスも、ケムールも、ダダもザラブもバルタンも、全員、竜巻に飲まれ吸い込まれ、アークボガールの体内へと送られてしまったのだった。

「ハハ……ハ、終わった……」

アークボガールの体内は、真っ暗な空間だった。仲間の声は聞こえても、姿を見る事は出来なかった。

「くそっ、出られるのか？」

バルタンの声が言った。

「内部から攻撃すればあるいは……」

ザラブの声だった。その直後、旋風光輪波が放たれ、どこかに当たって消えた。その光によって、一応黙示できたので、5人は集まる事が出来た。

「暴れたところで脱出できるかどうか……」

ダダが言った。

「全員のエネルギーを集めて、放ってみましょう」

そう言ったのは、メビウスだった。

「なんだって？」とケムール。

「しかし、それだけで本当に脱出できるかどうか」

ダダとザラブが、同時に言った。

「他に方法があるかもしれないぜ」バルタンも言う。

しかし、メビウスは頑として、言い続ける。

「これ以上、アークボガールに時間を与え続ける訳にはいきません。それなら、最後の賭けにみんなで一気にやった方が！」

メビウスの声からは、必死さを感じられた。それでも鋼魔四天王は、自分たちでそれぞれに、脱出の策を考えている風だった。そんな彼らに、メビウスが叫び放つ。

「バラバラになっちゃだめだっ！」

「！？」

全員が一斉に、メビウスに振り向いた。

「すみません……でも、ここでバラバラになっちゃいけないって思っただんです。一緒に、やりましょう。みんなで一緒に」

「お……おう」

鋼魔四天王は、その一瞬の気迫に大きく驚いていた。

「そうだ、バルタンさん、P S Y - バルタンってエネルギー体でしたよね？」

「あ、ああ。そうか、あいつらの体を使って光を……」

バルタンはすぐに、ありったけのP S Y - バルタンを出した。彼らの体はエネルギー体で、光を放つ。それで、周囲を確かめるのだ。

周囲に光が満ちる。

「ケムールさん、あなたはP S Y・バルタンと一緒に周囲を探ってみてください。」

「分かったぜ」

「私たちはどうしたらいい」

「ダダさんとザラブさんは、休んでいてください。その怪我では動かない方がいいですから」

そう言つて、メビウスはケムールやバルタンと共に飛んで行った。彼らを見送りながら、ダダとザラブは笑っていた。

「やるものだな……彼は」とザラブ。

「ああ、私たちが伝えることなど、何もなかったようだ」

安心したような笑顔で、ダダが言った。

それから割とすぐ、メビウス達が戻ってきた。

「おおつ、何かあったのか？」

「はい！」

メビウスは子どものように笑い、親指を立てた。

「あつちです、一緒に行きましょう！」

今度は全員で、その場所に来た。アークボガールの体内の壁と思しきその箇所に、大きなヒビが入っていたのだ。

「バルタンさんが見つけてくれたんです」

「この亀裂は、多分俺とメビウスがあいつにパンチ喰らわせた時に出来たもんだと思うんだ」とケムール。

「つまり、ここに攻撃すれば出られる上にダメージも与えられるかも、と言う訳か……」

ダダは少し考え込んだが、すぐに結論を出した。

「よし、一撃喰らわせてみよう。全員、ありったけのエネルギーを叩きこむんだ。バルタン、P S Y・バルタンは万端か？」

「あ、ああ、なんでだ？」

「奴の体内から出られたとしても、戦うことができなければ結果は

敗北だ。この一撃で奴を倒せたとしても、他の敵がやってこないとは限らん」ザラブが代わりに説明した。

「な、なるほど」

「みなさん、この左腕を見てください」

「ん？」

メビウスがみんなに左腕にはめられたメビウスブレスを見せた。かつてウルトラの父に貰った強力なエネルギーを蓄えたブレスレットである。

「これに、エネルギーを集中して、一気に解き放つんです」

「良いだろう、やってみようぜ！」

すぐさま、全員のエネルギーがメビウスブレスに集められた。そのエネルギーは増大し、さらなるエネルギーをも生み出した。

「すごい……これだけのエネルギーがあれば！」

「あれば？」

「絶対、勝てるっ！」

立ちほだかる 闇を超えよう

「フェニックス・バスターーーーーーッ！」

無限に続く、光の中へ メビウスの左腕が、高らかに挙げられた。その拳から、アークボガールのヒビと思われたその場所にむけて、強大なエネルギーの塊が放たれた。その一撃でヒビは一気に広がり、全てを光で満たしたのである。

「おーーーーーッ！」

アークボガールが死んだ。胸から巨大な閃光を放ち、そこから一気に崩れていった。

それからすぐ、PSY-バルタンらの手によって、メビウスと

銅魔四天王は、ウルトラの星へと運ばれた。

壁の向うの世界へ

「マングリン・クラッシュ！」

邪闘士メフィラス？の鞭から、当たった者の腕力を著しく低下させる閃光がほとばしる。

「ナパーム・セイバー！」

邪闘士ゼットン？の双剣が、赤々と燃えながら空を切ると、炎は強力なエネルギー弾へと変わり放たれた。

「月光波！」

邪闘士エレキング？の持つ二股の槍の刃から、まぶしく輝くエネルギー波が放出された。

ゴルザとメルバがそのパワーにものを言わせ、突進する。

「ちいさいっ！ 邪魔しやがって！」エースが叫んだ。

エンペラ軍最後の戦艦「ダークネスファイア」に乗り込んだ光の戦士達。大広間にたどり着いた彼らの前に、最後の、大量の敵兵が立ちはだかったのである。

その中には、以前ヤプール次元を襲ったダークベンゼン軍の生き残りである邪闘士達もいた。彼らも装鉄鋼を持ち、強力な戦闘力で襲いかかって来た。ウルトラ軍とエンペラ軍の最終戦争と言うべき戦いが、始まったのである。

その場にいる全員が激しい戦いを繰り広げる。実力差が一気に現れ、互いの弱い戦士は次々と倒れていった。

敵のザコもおおぜい倒れていたが、バルタン星人Jrのロボットは砕け散り、タイラントやヒップリト星人、そして闘士で無い宇宙警備隊員のウルトラ戦士達なども倒されてしまっていた。さらに、パワード流派の戦士達も、何人が倒れた者が居た。

「暗黒四天王やエンペラ星人と戦う前に体力を使っちゃいけねえ！」とブラックキング。

「よし、二手に分かれよう！」

ゾフィーが叫んだその瞬間、戦士達の半数が、一斉に敵の頭上を飛び去った。

「う、ウルトラ戦士が……！」

「しまった！」

上を見上げ、頭上を通り過ぎたもの達を追おうとした悪の戦士達だったが、そのせいで隙を突かれて攻撃を浴びることになった。

「オラオラア！ 敵はこっちにもいるんだぜえ……！」

レッドキングが、敵を殴り飛ばし、他の敵集団にぶつける。装鉄鋼や武器は砕け散り、失神していく敵達！

ゴモラの超振動波が、エレキングの放電光線が、ベムスターの力強い連打が、バキシムのトルネードアタックが、次々と敵を打ちのめしていく！

さらにはPレッドキングとPバルタン、Pダダ、Pザンボラーの連携攻撃が、インペライザーの一団を破壊していく！ 元ヤプール軍の超獣達も、大暴れだ！

そこに「奇跡の援軍」が猛る！

「彼らに続けーっ！」

ティガのゼペリオン光線がゴルザとメルバを撃ち滅ぼし、ダイナの八つ裂き光輪がナースを切り刻む！ さらにガイアのフォトンストリームとアゲルのフォトンクラッシャーがコッヴの軍勢を滅する！

コスモスのネイバスター光線が闘士ワロガを倒し、ジャスティスのダグリューム光線が闘士カーリー星人を倒した！

「まだまだ行くぜーっ！」

マックスのマクシウムカノンがラ格拉斯を討ち、ゼノンがG・ウェポンの剣を使いグランゴンを切り裂く！

そして、ネクサスは必殺のオ・バーレイ・シュトロームを放ち、ノスフェルとガルベロスを粉々にしてしまった……！

「こ、こいつら、強い……」

敵怪獣の一人が怖気づいた。その怪獣は、ブラックキングに殴り飛ばされた。

「今更気づいたのかよ！ バーク！」

そして、ヤプール。強大なエネルギーを周囲に発し、触れる敵すべてを滅ぼしていく！

「ごあああああーーーーー！」

「消え去れーーーーーっ！」

その戦いを逃れ、ダークネスフィア内を飛び続ける戦士達。ダークネスフィアに普通の科学は通用しない。見た目より遥かに広大で、複雑な迷路だったのだ。

「くっそ、どこ行きやいいかわかんねえよ！」

すでに、戦士達は幾手にも分かれていた。

ゾフィー、セブン、ネオス、21のチーム。

ジャック、グレート、パワードのチーム。

エース、エースキラー、ゼットンのチーム。

タロウ、レオ、アストラ、80のチーム。

父、ヒカリ、ジョーニウス、ゼアスのチーム。

この5チームに分かれ、迷路を進んでいくのである。

「くそっ！ こんな壁、ぶっ壊して進めりやいいのによ！」と21。

それに対し、セブンが口を開く。

「ダメだ。相手がこんな迷路を用意している時点で、壁になにか細工がしてある事が考えられる。それに、無駄なエネルギーは使えない」

しかし、そんなセブンにゾフィーが言った。

「とは言ったがセブン、この迷路が本当にエンペラ星人や暗黒四天王の元へ通じているのか……不安な所はあるな」

「……！」

ネオスが息を呑んだ。前方の空間が、行き止まりになっている事である。

「い、行き止まり！？」

21が驚愕し、全員が立ち止まった。

「道を間違えたようですね……」とネオス。

ネオスが引き返そうと踵を返した瞬間、セブンとゾフィーが同時に言った。

「ここだ」

「えっ」

セブンが、精神を集中する。静かに、力強く。手を伸ばし、行き止まりの壁に手を当て、唸る。

「むう……ん」

手が、壁の中へと入り込んだ。

「おおっ！」21が見入る。

「よし……いまだっ」

セブンの体が、全て見えなくなった。吸い込まれるように、壁の中へと消えていった。

「よし……続くぞ！」

ゾフィーが同様の手段での侵入を図ったが、壁の中へ入る事が出来ない。

「何故だ？」

「ぞ、ゾフィー隊長、どうしたんですか」

「わからん……壁に触れた時、なにか精神波のようなものが私を阻害したような……」

「え……？」

その『世界』はあたり一面の銀世界であった。

全てが凍り固まり、動くものは一切存在しない。段差や、木や岩に雪が降り積もったかのように、世界は形作られそして広がっていた。冷たい氷の斜面の先には、真っ白な雪が見える。

そこに立つ、赤い肉体に金色の鎧を身につけた、一人の男　ウルトラセブン。

「俺一人を相手にしようとするとは、自信がないということかな？」
セブンの目の前に立つ、氷の塊に向けてそう言った。

「面白くないから……対等でやらないと」

氷の塊が、ぱつくりと口を開けた。牙が生えている。舌もある。

銀色の氷だった。艶^{つや}やかに煌めき、周りの世界に一体化している。

注意して見なければ、分からないだろう。

グローザム　それが、彼の名前である。全身が氷の塊のように冷たく、硬い。先の鋭い凹凸が体表を覆い、両腕には、拳と並行して剣が生えている。

青い、一本の横に長い目が、セブンを見据える。

「始めるか……闘士……」

瞬時に、上半身を、薄い青色の鎧が覆った。透き通り光り輝く、氷のような鎧だった。

壁の向うの世界へ（後書き）

今回も鎧伝キャラを登場させてみました。冒頭に出て来た三人の闘士やゴルザ・メルバなのですが・大魔王含め、メフィラスが三人も出てきてややこしいですね。

一応「メフィラス大魔王」「闘士メフィラス星人」「邪闘士メフィラス？」と分けられてはいるのですが。

所で先日、嬉しい事に、ガシャポンでのフィギュアを手に入れる事が出来ました！ウルトラクラウン装備のマン、メッキパーツ付きの80、メフィラス、ネオス、21、欲しかったゴードス五人衆一人、バランスなど！袋詰めをやつを買い、ダブリも多かったのですが、嬉しかったです！

そういえば最近？ でしょうか、イベントで闘士のゼロやらベリアルやらの絵が展示されたとかなんとか・今後につながってくれたらうれしいですね。

さて、ようやく四天王までたどり着く事が出来ました。エンペラ星人との対決ももうそろそろと言ったところでしよう。

もしも・十数年前のかの日、「ええっ、これで終わり？ 決着つかないのかよ！」とボンボンを読んでそう思った方々や、半年ほど前に復刻版を読んで同じ事を感じた皆さん方に楽しんでもらえていたとしたら、これほどの喜びはありません。また、「つまんねえぞこれ」と感じる方も必ずいると思います。その方に、その方の「ウルトラマン超闘士激伝・完結編」を描いて欲しいと思います。私も、みんなが納得し楽しめる「超闘士」が読みたいからです。

では、お付き合いのほど、よろしく願います。

極彩色の世界で

そこは、禍々しくうねりをあげ、極彩色に染まった空間だった。

「かああああっ！」

闘士巨大ヤプール。かつてエースに倒された、『最下層』のヤプールが、空間と同じで、禍々しく曲がりくねり、そして極彩色の色に染まった。空間によって曲がり染まったのかもしれないが、そんな装鉄鋼を身につけ恐るべき闘士となり蘇った姿である。彼の全身から周囲に向かって放たれる閃光が、エース、エースキラー、ゼットン吹き飛ばす。

「うぐうう……！」

「くそ……なんて場所だ……居るだけで息が苦しくなってくるぜ」
うつ伏せに倒れたゼットンが 次の瞬間には立っていたが、メテオセイバーを構える。

「ヤプールの住む異次元空間が、この宇宙船の中にもあったんだ！
まともに動けもしねえぜ……」とエースキラー。右手に長柄の斧を、左手に盾を持つ。

「精神集中だ！ 精神集中すればコンディションが下がることはねえ！ 昔、俺はそうして奴に勝ったんだ！」

エースが叫んだ。それを聞いて二人は、ぐによりと蠢き形の整わないこの空間の中で、初めておのれの肉体を保つ術を開始した。

「フン……」

巨大ヤプールが口を開いた。同時に、真っ赤な色の この空間の中にあっては、直後に色が変化したり、軌道が変わっているように見えるのだが、光波が、横に並ぶ 近づいたり、離れたたりにも見えるのだが、三人に向けて放射される。

「防御だっ！」

エースが前にエースバリアを出す。エースキラーは盾を前に出す。ゼットンは周囲にバリアを張った。

「甘い」

巨大ヤプールの言葉通りだった。曲がりくねった空間は、大きく弧や円を描き、エースとエースバリアを離し、エースキラーを真横に向かせた。そして、エースバリアはエースキラーの後頭部に激突した。

「ぐはっ！」

「うぁ……っ」

横に飛ばされたエースキラーは、光波の届く範囲内から外れた。ゼットンのは、全身をバリアで包みこんでいたため、何とか無事に済んだ。しかし、エースは吹き飛ばされた。

「うぁぁぁぁ……！」

「エース！」

光波が収まり、バリアを外してゼットンが叫んだ。しかしその時、集中していた精神がわずかに緩み、ゼットンの体内に苦痛が現れた。

「ぐふ……う」

バリアが直撃した時点で、エースキラーも同様の状態だった。体内組織がどこか狂ったような感覚に襲われ、嫌な違和感に悩まされることになった。

「ただだぜ、ヤプール！」

しかし、エースは違った。かつてのように集中したまま、ヤプールに向けてウルトラギロチンを放った。

いくつもの、小型でギザギザの光輪が、様々な方向へと飛んでいく。それらが向かって行く先は、全て巨大ヤプールである。

「ちいっ」

ヤプールは舌打ちして、すぐに右手の鎌から三日月状の光弾を、ギロチンと同じ数だけ放った。

ばり、ばきん、と音がして、ウルトラギロチンは全て砕け散った。

「あ……！」エースキラーが声を上げる。

「まだまだっ！」

エースが跳んだ。前方にいるヤプールに向けて、跳んだ。すると巨

大ヤプールは体の前面から火を放つ。猛火に襲われ、エースは体を回転させ、風を起こし、火炎に穴をあけてそれを乗り越えた。そして、敵のすぐ目の前で、メタリウム光線を放射したのだった。

「ぐはあああつ！」

すぐに後ろに飛びのくヤプール。エースはさらに、エースギロチンで追撃する。八つ裂き光輪と同じ形の必殺技である。

「ちいいつ」

巨大ヤプールがそれを右手の鎌で打ち砕く。しかし同時に、ゼットンのメテオセイバーとエースキラーの斧の先端がその身に突き刺さった。

「ぐが……！」

ヤプールが血を吐く。それでも彼らは止まらず、さらに斬りつけ、撃ち込む。

「喰らいやがれえ！」

エースのパンチが、エースキラーとゼットンの斬撃が、つぎつぎと巨大ヤプールの肉体を傷つけていく。

「うがおがああ……」

「もらった！」

エースキラーの一撃が、巨大ヤプールの首を捕らえようとしたその瞬間。

「かああつ！」

巨大ヤプールは左手をかざした。それと同時に、空中で全員の動きが止まった。

「サイコ・バインド……か！」

「残念だったな……」

巨大ヤプールは、右手の鎌でエースキラーの首を突いた。首こそつながっていたものの、エースキラーは後ろへと飛び、地面にたたきつけられて気絶した。

「があつ！」

口からの赤い？閃光が、ゼットンの顔面を捉え吹き飛ばした。ゼッ

トン、あおむけに倒れ動かなくなった。

「くくく……残念だったな……本当に、残念だったな……」

「くそお、動けねえ……」

残った一人は、エースだけ。パンチを放とうと跳び上がったポーズのまま、固まっている。

「死ねえ、雑魚があつ！」

巨大ヤプールの体が、光った瞬間。巨大ヤプールの体が、爆発した。

「ぐお……！？」

「なっ！？」

エースが、動けるようになった。着地したエースは、後ろを見た。

「う……ウルトラの父！」

「エースよ、私も戦わせてもらうぞ！」

ウルトラの父であった。何故彼がそこにいるのか、それを聞く暇もなく、父は巨大ヤプールに向けてファザー光線を放つ。

「はあああ……！」

「ぐふう……！」

「お……俺も！」

エースもすかさず光線を放つ。巨大ヤプールはほぼ無抵抗で、光線を身に受ける。

「ぐあががが……ま、負けぬぞ……があああっ！」

突如として、エースと父の足元から火柱が立った。全身を焼かれ、二人は思わず声を上げた。

「ぐう……！」

「熱……！」
あち

ヤプールの右手から、真つ赤な光弾が何発も撃ち出される。

「うはははは……！……！」

「ぐおおおお……うぐあっ！」

顔面と、カラータイマーに5発以上は攻撃を受け、父が倒れた。

「そんな……ウルトラの父が！」

エースの装鉄鋼にも、大きな亀裂が走った。

「これで、完全に一对一だな！」

巨大ヤプールが、エースに跳びかかる。エースはその鎌による一撃をかわし、腹にキックを放った。

「なめんじゃねぞコラ……！」

エースが怒りに震える。仲間を次々に倒す敵、憎むべきヤプール人を。絶対に許してはおけないと……思った瞬間、精神が偏って、異次元のうねりに蝕まれた。

「……くはっ」

「そのまま吞まれるおおっ！」

巨大ヤプールの強烈なかかと落としがエースの後頭部に入った。エースは倒れ、頭を踏みつけられる。

「ハハハハ……っ！」

巨大ヤプールの連打連撃がエースを打ち、切り裂く。かつての恨みを晴らすべく、その連打は続いた。

「ふふふはははは……」

その時、ゼットンとエースキラが起き上り、同時に技を放った。

「メテオバスター！」

「キラーブレスト！」

二人の光線が、巨大ヤプールを挟み撃ちにした。

「ぐおおああ……ッ！」

「今だエース……！」

「おうっ！」

エースの拳に、エースギロチンが付加される。強烈な回転をしながら、拳と共に巨大ヤプールに飛び込むその一撃。

「ギロチンチョップだ！」

「ぐはあ……っ」

巨大ヤプールの体が、半分に分かれた。

「とどめを刺してやるぜ……くらえっ！」

ゼットンの強烈な拳が、巨大ヤプールの顔面を捉え、敵を空中へと放った。

「よし、お次はコイツだぜ！」

エースキラの斧が、盾に刺さる用に合体。そしてその先端にエネルギーが溜まり、光線として放たれる……

「キラ・ファントム！」

「ぐああ……があー……っ！」

「メタリウム・バースト！」

最後はエースの一撃だった。拳で地面を叩くと、巨大な光弾が地を掛け走り抜け

「うあ……」

四天王の一人闘士巨大ヤプール、撃破。

暗雲の世界で

闇のように黒い雲だった。空一面に広がる黒雲は、その下に生きる者達から光を奪っていた。うす暗く、どんよりとした、暗い世界。空に気を取られれば、地を転がる無数の石に足をとられる。

「カカカ、お前らが相手か。面白そうじゃ……」

闘士デスレム。体の表面に骨格が浮き上がった特異な肉体の持ち主。上半身を覆う、肩部分が槍のように尖っている、すっきりとした型の装鉄鋼は、うす暗い世界とは対照的に黄金の光を放っている。

デスレムは、左手だけが特に大きかった。巨大な爪は、相手の肉体を軽く引き裂いてしまいそうに見える。顔面の、目とも口とも思える、丁字状の発光体は、不気味に前面を照らしていた。

対するは、守護闘士グレート、闘士ジャック、パワードの三人。

「行くぞデスレム！」

早くも、ジャックが敵に飛びかかった。手にはウルトラランスを持っている。

「不用意な……そらっ！」

デスレムが左手を天にかざすと、黒雲の中から突如として、紫煙を纏った光の玉がジャックの頭上から降ってきた。

「ジャック、危ないっ！」

パワードが叫んだ瞬間、グレートが飛び出した。拳を、パンチするように突き出して、そこから光線を放つ。ナックルシューターをデスレムに向けて放ったのだ。

「甘いわ！」

デスレムの左手の、巨大な爪がナックルシューターを引き裂いた。しかしその時、まったく同時に、黒雲から降ったはずの光弾がデスレムの腹部に命中した。

「ぐふ……うつ！」

「甘いのはそっちだ、デスレム。私があんな攻撃をするとも思っ

たのか」

ジャックであった。ジャックは、光弾『デスレムインフェルノ』をウルトラランスの先端で掬うように取り、それを敵に向けて投げつけたのだった。

「そうだったのか……！」とパスワード。

「ぐがあああ……貴様らあ！」

デスレムが怒りの形相を放った。顔面の、目とも口とも思える、T字状の発光体から、水色の光弾を撃つ。それは、丁度三人の中心の場所で爆発した。

「うおお……っ！」

かなりの爆発だった。三人は吹き飛ばされ、一気に分断されてしまった。しかも、石の混じった砂塵が大量に巻き上がり、周囲が良く見えない。

「ぬんっ」

パスワードがテレパシーを放つ。そうやって、それぞれの居場所を突き止めようとした。しかし、それを見越していたデスレムは、それより早くにパスワードの目の前に現れたのだった。

「ふはっ！」

「くっ！」

それぞれが放ったパンチが、同時に顔面を打った。パスワードは背中から落ち、デスレムはふらつく。

「くふふ、まずは貴様から血祭りだ！」

「そうはいかんぞ……」

パスワードは右拳から光線を放った。それを、かるく首を曲げてかわすデスレム。

「ふはあ！」

デスレムの左手の爪が、パスワードを突いた。一気に5つの穴が体に空き、パスワードの体から血のように、エネルギーが吹き出た。

「ぐううう……！こ、こんな……」

「カカカああ！」

デスレムは左手の爪でパスワードを刺したまま、その腕を持ち上げて振り回した。

「ほれえ、死ねえ！」

デスレムが、パスワードを投げ飛ばした。正確に言うと、遠心力で爪から離れて、パスワードの体が行ったのだが、パスワードは、細かい砂粒の上に落ちた。体の上に、ぼとぼと石が落ちた。

「こおのやるオオオ！」

グレートのキックが、デスレムの後頭部を捕らえた。不意打ちだった。デスレムは言葉にならない叫び声をあげて、前方へと跳んだ。そして素早く回転し、グレートを目の前にする。

「バーニングプラズマ！」

グレートの本殺技、バーニングプラズマが放たれた。デスレムはよけきれず、その身に光波を受けてしまう。

「ぐふあああ……！」

「シネラマブレスター！」

砂塵の奥から、ジャックが装鉄鋼の肩部分に仕込まれた発射口から、必殺光線を放った。それもデスレムに命中し敵を吹き飛ばした。

「ふうぐっ！」

砂塵が落ち着いた頃には、ジャックがデスレムに向けて構え、グレートがパスワードに肩を貸して立たせていた。

「立てるか？」

「ああ、なんとか……」

パスワード自身も両の足で立った。そして、デスレムを睨む。

「これで終わりだな、デスレム。お前の戦法は破ったぞ」

ジャックにそう言われてデスレムは、黄色い目を光らせた。ジャックはそれを見て、ぞくりとした。

「破っただと？ ワシの戦法を破っただと？ ウルトラ戦士め！」

デスレムが、再び左手を天にかざした。

「！」

三人が身構えると、黒雲から次々と、デスレムインフェルノが降り

注いできたのである。その数は十や二十ではきかないほどの、あまりの数だった。

「な、なんだと……!?!」

ジャックはウルトラブレスレットを盾『ウルトラディフェンダー』へと変えた。グレートはトライアングルシールド、パワードはパワードバリヤーを張った。これらを上に向け、降り注ぐデスレムインフェルノを弾き飛ばす。

「まずいぞ、このままではデスレムに攻撃される……」

「ちっ」

グレートが舌打ちした瞬間、突然足元からも、デスレムインフェルノが跳んできた。

「なっ!?!」

グレートの顎に、パワードの腹に、ジャックの背中に、下からの光弾が命中し爆発した。

「うわあああ……」

それぞれのバリヤーから手が離れ、三人はデスレムインフェルノの嵐に巻き込まれた。空中に放たれた三人は、全身に光弾を浴び、衝撃で黒雲の中に飛び込まされ、黒雲内部に溜まった雷のエネルギーを受けることになる。

「ぐ……あああ……!?!」

特にダメージが大きかったのはパワードだった。先の傷が大きいためだ。グレートもジャックも何もできないほどにダメージを受けているが、パワードのダメージは遥かに大きかった。

「ぐ、ぐうっ……ま、負ける訳には……!?!」

「お前たちはそのまま終わりだ! カーツカ力力!」

その時、突如として暗雲に大きな穴が開き、そのまま穴が広がるようにして消え去った。

「な……!?!」

空は広く、青かった。雲ひとつない明るい空。その中に、三人の正義の戦士達が、地を眺めながら浮かんでいる。

「ど、どうということだ……どうということだ!？」

明るさに驚き、デスレムが叫んだ。同時に、気配に気づいた。やや右前方　青い影。ウルトラマンヒカリの姿がそこにあった。

「暗雲を晴らす力、ホットロードフラッシュだ!」

「な……なにいつ!？」

驚きながらも、再び手をかざすデスレム。すると空中から空間を素通りしたかのように、デスレムインフェルノが放たれた。飛んできた光弾を、ヒカリはブレードショットで迎撃した。

「反撃、開始だあつ!」

三人はもうボロボロだった。装鉄鋼も殆ど壊れ、それぞれ一部分くらいが残っている程度。しかしその目は死んでいない。必殺の光線を、次々と喰らわせる。

「ブレードショット!」

「シネラマクロススパーク!」

「メガ・スペシウム光線!」

「バーニング・プラズマ!」

「ぐふああああ……!」

攻撃され、装鉄鋼が砕けながらも、デスレムが顔から光弾を再び放った。しかし、それもパワードの放ったパワードスラッシュ（八つ裂き光輪）によって切り裂かれた。そしてそのままパワードスラッシュは、デスレムの体を、縦に二つに割った。

「ぐひっ!」

「八つ裂き光輪!」

「ぐはっ!」

今度はジャックの一撃。デスレムの首が落ち、その目は完全に生気を失った。

「木っ端微塵にしてやらあつ!」

最後はグレートのバーニング・プラズマ!　デスレムの肉体は完全

に消滅したのだった。

つめたい銀の世界で

ウルトラの星では、エンペラ軍の残党の討伐を行っていた。

ジョーニアスの星・U40からやって来たエレク、ロトなどのウルトラ戦士団や、スコット、チャック、ウーマンベス、装鉄鋼とはまた違った鎧、コスモテクターを着込んだアンドロ族の戦士達、それに仲間に加わった元闇闘士のテレスドンなどの戦士達が、ウルトラの星を見回っている。

そして、ダークネスファイア内部の大広間では、ウルトラ戦士や闘士怪獣らが、エンペラ軍の兵士たちと攻防を繰り返す。

そして……

「ちつくしょおおっ！」

ダークネスファイア内の大迷路では、ゾフィー、ネオス、セブン21らが行き止まりで立ち往生していた。

「セブン先輩が居なくなっちゃって、あれから10分は立ってるぜ！？ どうすんスカゾフィー隊長！」

壁を叩きまくる21。それに対し、ネオスは何も言わずに壁を見続け、ゾフィーもまた、静かに青紫色の床に座っている。

「四天王の一人がここにいないかもしれないってのに！ ああもう！ もどかしいぜ！」

「落ちつけ21。これ以上壁を叩いても無駄だ」

とうとうネオスが口を開いた。その声には、確かな焦りがあった。

「んなこと言っちゃってよオ、このまま何もできないんじゃないだろうかねえぜ！ ひよっとしたらセブン先輩、やられちゃってるかもしれないんだぜえ！？」

「……誰だっ？」

その時、後ろから一つの気配があった。ゾフィーが振り向くと、そ

こにはゼアスが立っていた。

「どうしたのですか、みなさん」

「ゼアス……！」

「あれ？ アンタ、ウルトラの父のチームだったんじゃない……」

21がそういうと、ゼアスは、自分たちがそれぞれ分かれて他のチームの援護を行っていることを告げた。そしてゼアスは、ゾフィーから事情を聞き、壁に手を当てた。

「うむ、これは……念波で邪魔されていますね。おそらくセブンさんが入った時点で、敵が壁に念波を押しつけて通れないようにしたのでしょう」

「なんだって……！ それじゃあ、やはり我々はいれないのか」とゾフィー。

「いいえ、私の力でどうにかしてみましよう」

そう言つて、ゼアスは左手に念波を集中し、それを壁に当てた。

「ぬん……っ」

「？」

ネオスと21が見つめるなか、次にゼアスは、右手にも念波を集中し、線対象となる壁の一部にそれを当てた。

「はああ……ッ！」

「お……っ！」

ゼアスの右手が、壁に入り込んだ。

「スッゲー！ どうやったんだ！？」と21。

「左手の念波で言わば敵の気をそらせ……その隙に守りの薄くなった右側を念波で通る……さあ！」

「よし、いくぞ！」

こうしてゾフィー達は、壁の向こうにある世界へと、入る事が出来た。

「やっと来れたぜ……寒っ！」

あたり一面の銀世界……雪と氷と冷たい空気しか存在しない、凍れ

る世界。

「我々ウルトラ戦士には辛い場所だな」

寒がる21に対し、ゾフィーも寒そうに答えた。ネオスだけは、冷静にあたりを見回しながら言った。

「セブン先輩はどこに？」

「つと、そうだったぜ」

21も寒空の下を探そうと、飛び上がった。

「おつ、あ、おゝい、あつちで闘ってるぜ！」

ゾフィー、ネオスは21に従い、セブンと四天王の一人 闘士グローザムの戦いの場にやって来た。ゼアスが居ないことに気づく頃には、完全に臨戦態勢に入っていた。

「チッ、一対一が好きなんだがなあ」

全身が氷で構成されたような姿をしたグローザム。4人に囲まれる格好になっても、余裕だった。

「みんな、気をつける」

セブンはボロボロの状態だった。装鉄鋼はところどころ欠け、気がつけばホークウェポンが周囲にゴロゴロ転がっている。

「そいつは……」

そうセブンが言いかけた瞬間、グローザムの全身から、光がほとばしった。

「くはああああっ！」

グローザムの叫び声はその光と同じ速度で、一気に周囲の全員へと届く。冷たい光だった。全てを呑み込み、包み込む非情な光。

全員、動けなくなった。体が凍ったのだ。

4人とも、氷柱と化し、そこに立ちつくす。

「ブレイズッ！」

グローザムの手から、炎が吹き出た。それは、動けなくなった21の体を包み込む。そしてたちまちのうちに、氷柱を溶かしてしまっ

た。

「うおっ！ あ、はあ、ふはあっ！」

氷柱から解放された21は、蒸気を纏いながら荒く呼吸していた。

「ん？ なんだ、セブンじゃあないのかよ……似てたから間違えたぜ」

「ふざけんじゃねえ！ みんなを戻しやがれ！」

21は素早く構えをとり、額のビームランプから必殺技のアドリウム光線を発射した。細い閃光が一気に伸び、グローザムの顔面を捉えた。

「おおっ？」

「！？」

グローザムの顔面に穴が開いた。しかしそれよりも、21には疑問が残った。何故、かわそうともしないのかと言うことに。そして、顔に穴が開いたまま、何も苦痛を受けていないそのたたずまいに。

「ニイ」

グローザムが笑った。牙と牙の擦れるぎぎいという音が耳に障った。そして、その瞬間、顔に空いた筈の穴が、ふさがったのである。

「な……なんだってえ！？」

「知らなかったなら教えてやる……俺は、『不死身のグローザム』だ」

「ちくしょおっ！」

21は低空飛行で一気に敵の居場所まで飛んだ。そして詰めかけ、アップパーカット。さらにひじ打ち、ニーキック、頭突き、チョップと連打する。

「うおお……やるな、新人闘士！」

「！」

ど……っと、21の腹に恐ろしい衝撃が走った。グローザムの右肘がめり込んでいたのだ。

「ぐはが……！」

21の口から、呼気と苦痛の声が這い出た。

「どうした？ 終わりか？」

「おわるか……よおっ！」

見下したようにニやつくグローザムの足に、21は素早く回し蹴りをして、敵を転ばせた。

「そらあっ！」

「おっ」

「余裕かましてんじゃねえー！ーッ！」

21は素早く敵の真上へ乗り、頭のヴェルザードを手にとって敵の顔や首に斬りつけた。右手の斬撃と、左手のパンチの連打を受けるグローザム。しかし、先ほどと同じように、受けた傷はその場ですぐに回復してしまう。

「このやろおおおお！ このやろおおおっ！」

「くく、くはは、ふははははっ！」

グローザムは、笑っただけだった。他は何もしない。ただ、ただ21の攻撃を受け続けるだけ。

「やろおー！ー！ー！ー！ー！ーっ！」

ヴェルザードを戻し21は、空高く飛びあがった。

「これでもくらえ……レジア・ショット！」

21が両手をし字状に組むと、それは必殺『レジア・ショット』の体制となる。強力な必殺光線を、真上からまともに喰らうグローザム。

「うおおおお……こいつは……」

「らああああ……！」

光線が出続ける。21のエネルギーが注ぎ込まれたレジア・ショットが、グローザムの肉体に注がれていく。

「くらえ、くらえ、きえちまえええええ……」

数分後、光が消えた。

「は、はあ、はあ、あ……」

構えをとり、21は下を見た。煙が晴れていく。いや、雪や氷が

解け、蒸発した湯気かも そんな事を考えている余裕は彼にはなかった 煙が晴れた。

「……っ」

そこには、グローザムが普通に立っていた。

「はははは、煙が晴れている間に回復完了、だ。せめてバラバラのままの姿も見せてやりたかったかな？ ちなみに、装鉄鋼は光線を吸収できるようにしてある。一緒にバラバラになったらこっちは再生できんのでね」

「ち……くしょ……」

「ふっ、燃えろッ！」

グローザムの手から、再び火炎が放たれた。今度は生身の21をそれが包み込み、彼の体を焼いた。

「ぐあああああ……畜生……畜生……」

「焼き尽くせ……！」

「うぐううう……うおおおおおお……」

21の絶叫が、あたりに響いた。

「雪崩でも起こす気かお前は」

21は、焼けながら地面に落ちた。足場の雪を一気に溶かしながら。大きな穴が出来る。21が沈む。周囲の雪が崩れる。

21は雪の中に埋もれ、その姿は消えた。残ったのは、3つの氷柱と闘士グローザムだけだった。

じまんのジェットでできをうつ……

つめたくつもる雪のなか　ウルトラセブン21は、意識を失いそこにいた。体はすべてが焼け焦げて、火傷の傷に雪が痛い。彼の心は今、空虚。

（一対一が好きな理由……誰かに粉々にされて、小さくなったところを別のやつに攻撃されて消されたくないから……）
そう思いながら、彼は落ちた。雪に埋もれた。

「さてと、次はだれがいいか……セブンは後の楽しみにとっておくとするか」

グローザムは、戦士の凍った残り3本の氷柱を品定めするように、ゆっくりとそれぞれを眺める。

「よし、決めた……お前だっ！」

グローザムの右手から、炎が吹き出た。氷柱が解け、中からネオスが現れた。

「いくぞっ、今度はこっちから攻めてやる！」

グローザムは両腕に生える剣で攻撃すべく、ネオスに突進した。

「……ここは……はっ！」

「くらえっ！」

まだ完全に意識を取り戻していないネオスは、目の前に突然現れたグローザムを対処しきれなかった。剣の一撃をかわしたものの、強烈なキックを喰らい後ろへと飛ばされ、大きな氷に激突した。

装鉄鋼とぶつかったことで、氷はバラバラに砕けた。しかしネオス自身も、衝撃と低温のせいであまり動けず、次の攻撃を受けてしまう。ドロップキックだった。

「ぐ……あああっ」

「どうした？　つまらんぞー！」

グローザムの連打。さらに、両腕の剣にそれぞれ冷氣と火炎を纏わ

せ切り裂く『フロストブレイズ』を発動した。

「うわあああつ！」

ネオスの装鉄鋼に生える翼から、光の玉『フェザーブレイズ』が放たれてグロ―ザムの顔と腹に命中した。強烈なカウンターだ。グロ―ザムはあおむけに倒れた。

「きかねええええつ！」

しかし、すぐに起き上がり、再びネオスを狙った。口から冷凍波『ヘルフロ―ズンブレス』を吐く。

「くっ」

ネオスは体制がついに整った。跳びあがってヘルフロ―ズンブレスをかわし、両腕を×字状に組み『ネオマグニウム光線』を放った。

「ハハハッ！ きかんぞお！」

グロ―ザムの右腕の剣が、突如長槍に変化し、ネオマグニウム光線を打ち碎いてしまったのだった。

宇宙 暗い宇宙。無限に広がる大宇宙。星空輝く宇宙。一人の男が、一つの場所を目指して、光となって飛ぶ宇宙。

「みんな……無事でいてくれ！」

ウルトラマン。ようやく傷を癒し、仲間の待つ敵艦へと最高の速さで飛ぶ最強の戦士。邪悪な波動を感じ取りながら、彼は進んでいた。

「ここか……！」

ついにたどり着いた、敵戦艦ダークネスフィア。相当の距離を飛んできたが、彼には何の苦痛もなかった。

「スターフェニックス号も近くにある……間違いないな」

ウルトラマンが、敵艦の入り口から入ろうとした。

「！ これは！」

しかし、敵艦にはバリアが張られていた。それに気づき、ウルトラマンは間をとった。

「光線で吹き飛ばせるか……？」

そう言つて、スペシウム光線を放つ。しかし、スペシウム光線はバリアに吸収され、ウルトラマンの方向へと戻つて来た。

「くっ！ あのバリア、光のエネルギーを闇のエネルギーに変える力を持っているのか！ またしても三大秘宝の力を使ったのか！？」

「ウルトラマン！」

「誰だ？」

そこに、姿を消していたスターフェニックス号が現れた。そこに乗っている、ウルトラの母とユリアンら銀十字軍（ウルトラの星の医療専門家の集団）がウルトラマンに声をかけて来たのだ。

「ウルトラの母！ ご無事で！」

「あなたこそ、生きていたのですね」

「私のために、キングが殆どのエネルギーを消費してしまいました……私は戦えます」

「でも、このバリヤーを抜ける方法がないんじゃ……」とユリアン。

「このスターフェニックス号に搭載されている、光エネルギー以外の攻撃でどうにか撃退できないでしょうか」

銀十字軍の隊員一人がそう言った。そして、その案を決行することになった。

「ミサイル連続発射！」

「機銃掃射！」

「火炎ミサイル！」

「冷凍ミサイル！」

「重力爆弾！」

スターフェニックスの強力な攻撃が繰り出される。

「どうだ……？」

ウルトラマンは、バリアをじつと見つめる。スターフェニックス号の砲撃が命中するたびに振動するバリア。しかし、壊れない。

「いざとなったら、この拳で……」

拳を、固く握りしめるウルトラマン。おどろおどろしいダークネス

ファイアが、笑ったように見えた。

「全弾、撃ちつくしましたあ！」

数分後、スターフェニックス号の攻撃が終了した。

「どう？ すこしは効いた？」とユリアン。

「……だめです！ 小さな穴がいくつか空いた程度です！」と銀十字隊員。

「ならば、私が！」

ウルトラマンが、先に決意していた通り、バリアを打ちにかかった。それを見たウルトラの母が、悲鳴のように叫んだ。

「駄目ですウルトラマン！ ここで無駄に傷ついては！」

「はああー……っ！」

ウルトラマンがバリアに飛んだその時、バリアが爆発した。

「！？」

穴があき弱ったバリアが、砕け散ったのだ。そしてその原因を、ウルトラマンはすぐにわかった。斜め後ろからの砲撃だ。

「君たちか……！」

「ウルトラマン、来たよ」

来たのは、科学特捜隊のジェットビートルだった。ウルトラマンは、彼らが来てくれたのだと表情を明るくした。

「しかし、一体なにで攻撃したんだ？」

「ペンシル爆弾。かつてゼットンを倒したという、あれだよ。ワモート博士が改良してくれて、何発も同時発射してこそあれができたんだ。さあ、行ってくれ。」

「そうだったのか……ありがとう。」

「わたしも、戦士のひとりなんだ。そして……」

「宇宙の平和のために、働きたい」

「ありがとうみんな！ 行ってくる！」

そうして、ウルトラマンはバリアの穴から敵艦へと入っていった。

彼の言った最後の言葉　どこか懐かしく、なにか愛おしいような

そんな気がした。あれはひょっとして、科学特捜隊の『みんな』
ではなくて　いや、今は気にしている場合じゃない。

ウルトラマンは一人、最後の戦場へと足を踏み入れたのだった。

青くなった世界で

「はあ、はあ、はあ……」

ネオスも、結局何ら決定打を打つことができず、グローザムの攻撃を受けるしかなかった。

「お次はこいつだ！ 避けきれるかああ？」

グローザムが腕を横薙ぎに振ると、ナイフ状の氷の塊が何発も次々に、ネオスに向かって飛んできた。

「うつ……っ！」

必死にかわそうとするネオスだが、どこへ逃げても別のナイフに当たってしまう状況にただ戦慄する。

「ネオ・マグニウム光線！」

仕方なく光線を放つネオス。全てのナイフを溶かし滅したが、グローザムはさらに、氷でできた大きな銃を飛ばしてきており、それは光線を撃ち終わったネオスの目の前にまで迫っていた。

「うつ……うつっ！」

「貫くかつ！」

グローザムが歓喜するように叫ぶ。ネオスはエネルギーも残り少なく、光線の構えも甘くなってしまうている。

「このままでは……くっ！」

ネオスは最後の力を振り絞り、額のブロウスポットから『ウルトラ・マルチ・ビーム』の熱線を放ち、氷の銃を溶かした。地面には解けた氷が熱湯となり、雪の上に飛散した。

「これで全てのエネルギーが無くなったな」

グローザムがまた笑う。ネオスは苦痛と悔しさで、顔がゆがんだ。

「お前のお友達と一緒に、雪に埋もれるがいい」

「21……」

ネオスが雪を見る。この中のどこかに、自分の一番大事な親友が眠っている。そう思うと、彫り出すことができない自分に腹が立った。

しかし、今は何もできない。立っているのがやっと……と言うより、体が寒さで凍り、立ったまま固まっているだけの様な気もした。
「とどめはこいつだ!」

グローザムの口が大きく開き、ネオスに向いた。

「させるかよおおおおおっ!」

「!？」

「21……!？」

白銀 一面の銀世界だったはずのこの場所で、突然赤と黄色と橙色が顔を出した。雪の中から突然火柱柱が立ったのである。

雪が一気に解け、セブンやゾフィーを包んでいた氷さえも解けた。あたり一面、水浸しになった。

「おおっ治った……!」

「ようやく戦闘再開だな……」

「チツ、一対一が好きなんだがなあ……」

「はあ、はあ……どうだああっ!」

水の中で、21が立ち上がった。

「俺の能力、ウルトラメタモルフォーゼで、残ったエネルギーを炎に変えたんだ! これでこの世界はおしまいだ!」

21の言った通り、全ての雪や氷が解け、水になっていく。どのような空間なのかは彼らにはわからなかったが、この場所は全て水中和化したのだった。

「水中戦という訳か」とゾフィー。

「いや……この水を全て氷に変えられたら厄介だ……」とセブン。そして、21に言った。

「21、お前はネオスを連れて離れる。ここは二人でやる」

「ええっ、そんな……! 俺、まだ戦えま……」

21は途中で黙り、水中を漂う、ボロボロのネオスを連れて、離れた場所へと去っていった。

「じゃあ、始めようか。水中戦となるか……水中戦となるか……」
「ウルトラフロスト!」

ゾフィーがいきなり、両手を合わせて冷凍技のウルトラフロストを放った。前方の水が、全て氷へと変わっていく。

「? なにを……!」

さらに、グローザムを包み込んだ。グローザムが氷漬けになった。

「一気に攻撃だ……!」

ゾフィーとセブンのダブルキックが氷漬けのグローザムを襲う。痛烈な一撃で、グローザムは氷ごとバラバラになった。

「ち……下らねえ!」

グローザムが回復しようとしたその時、再びゾフィーがウルトラフロストを発した。

「固まれ!」

バラバラになった氷とグローザムは、めちゃくちゃな配列で再び固まった。

「たあっ!」

セブンが殴りつけると、氷はまたバラバラに。それをゾフィーがさらにめちゃくちゃな配列で凍らせ、セブンがばらばらにし、ゾフィーが凍らせ……

「これで、どうだ……!?!」

巨大な氷の中に、グローザムはバラバラの状態で封印された。動かない。傍から見れば、ただの巨大な氷が浮かんでいるように見える。

「よし……あとは、一撃で消滅させれば……」

「最大のパワーで……」

「M87光線!」

「ワイドショット!」

二人の同時光線が、グローザムと氷を全て消滅させるべく、広がり
の大きい光波となって、水中を駆け抜ける。

「くらえーーーーーっ！」

光波は氷を呑み込み、周囲の水を蒸発させ、銀色の世界だったこの
空間に轟いた。水は一気に干上がり、水面は一気に下がり、空を飛
んでいる二人よりかなり低い所にまで減っていた。

銀の世界は、水と空だけの、青の世界へと変わっていた。

「終わったか……」

「セブン先輩！　ゾフィー隊長！　終わったんスね！」

そこに、ひょっこりと21が現れた。セブンは多少面食らった。

「お前、隠れていたな？」

セブンに睨まれ、慌てる21。

「い、いやははは、ピンチになったら飛び出そうと思って」

「ネオスはどうした？」

「その岩の陰です」

21が指さした方向には、水面から岩が突き出している。その近く
にネオスはいようだ。

「よし、お前たちは休んでいる。私たちは先へ向かう」ゾフィーが
言った。

「わかりました！」と21。しかし、その表情が一変した。

「う、後ろっ！」

「なに！？」

「グアハーーーーーッ！」

グローザムが、襲いかかって来たのだった。装鉄鋼は無くなってい
たが、その両腕の刃には冷気と火炎を纏っている。

「フロストブレイズ！」

「危ないセブン……ぐあっ！」

ゾフィーはセブンをかばい、火炎つきの斬撃をともに受けた。装
鉄鋼が碎かれる。

「はああっ！」

さらに冷気を纏った斬撃をその身にモロに受け、ゾフィーは落ちていった。

「そんな、ゾフィー！」

「隊長！」

「死ね、死ねええええっ！」

グローザムはセブンの首をわしづかみにした。

「ぐふっ！」

「がーーーーーっ！」

グローザムの口から、ヘルフローズンブレスが吐き出される。セブンの顔面が一瞬で凍る。

「やめろこのやるオオっ！」

21が、水面に浮かんでいていたホークウェポンの盾で、グローザムの頭を殴った。グローザムは口を無理に閉ざされ、苦悶の表情を浮かべた。

「く、ぐっっ！」

セブンが自分の顔を押さえつける。どうにか氷を溶かしたい。

「この氷野郎！ 俺が相手だ！」

21は盾を右手に持ち、敵を殴りつける。使い方を知らない素人のように、顔や頭を叩く。

「下らねえ……攻撃をするなッ！」

グローザムの口から、ナイフ状の氷弾が吐き出された。それは盾に刺さり、一撃で割ってしまった。

「ウ……」

「これで武器なしだあっ！」

グローザムの右腕が、21に向かって振りあげられる。

「うわああ……っ！」

「死ねッ！」

がきいんっ、と音が鳴り、グローザムの剣が折れた。

「な……んだとお！？」

「俺の装鉄鋼は……グローブに出来るんだよッ！」

言葉通り、21の装鉄鋼の肩部分が、グローブに変わっていた。

「油断大敵だぜ氷親父！　くらあああああっ！」

21の連打が決まる。脚を、肩を、胸を、腹を、次々と打たれ、グローザムの体が次々と割れる。

「ぐう、がはああっ！」

「良いぞ21！　ダブルスラッガーだ！」

「は、はいっ！」

顔の氷を溶かし終わり、セブンと21の同時攻撃が始まった。アイスラッガーとヴェルザードの同時連続攻撃。グローザムの体が、バラバラに切り裂かれる。

「ぐ、くそ、ぐうううう……お、俺が、こんな新米闘士ごときにいいい……」

「今度こそとどめだ！　ワイドショット！」

「レジア・ショット！」

バラバラの状態で、光線で挟み撃ちにされるグローザム。

「ま、まだ……おれは、さいぼうの、いっこでもものこって、いれ、ば。おまえたちのわざでは、かんぜんにけすに、たらな……」

「フェザーブレイズ！」

「なっ、な、ネオス！？」

ネオス自身はエネルギーが無くなっていたが、装鉄鋼のエネルギーはそのまま残っていた。グローザムにさらなるダメージを与えるネオス。

「く、くうううう……ま、まだだ……うおおおお……」

その時、水面からゾフィーが顔を出した。手に弓のようなものを持っている。

「水中に……こんなものがあつたぞ……」

そう、ホークウェポンの部品であった。強力な『マグネリウム・シュート』を放つ事が出来る。

「ゾフィー！　頼む！」

「おお……くらえ！」

マグネリウムシュートも放たれた。これで、グローザムの細胞は全て、何かに守られることなく、光線を浴びることになった。

「うごあああああ……こ、これで、かったと思うな、皇帝陛下は、俺達四天王が束になってもかなわないほどの……」

「死ねえええ、ウルトラ戦士イイイ！」

怨念の籠った叫び声をあげ、グローザム完全消滅。

鉄でできた世界で

「ここに、敵がいるよ……」

大迷路の中、タロウは一つの行き止まりの前で、呟いた。

「この壁の向こうということか」と、レオ。

他のチームが四天王と戦っている頃、タロウ達はようやくその場所にたどり着いていた。

長い迷路だった。廻ったり戻ったり下ったり昇ったり。他のチームよりはるかに長い迷路だったことは、誰も知る術はなく。

アストラと80は唾を飲み、壁を見た。

何の変哲もない紫色の壁面に、タロウは手を当てた。そして、レオ達もそれに続き、手を当てる。

「いくぞ……」

彼らの行きついた先は、都市だった。自分らの腰元ほどしかないビルが立ち並ぶ街。それも地球のオフィス街にありそうなビルが。

「ここは……地球？」と80。あたりを見回しても、ビル街しかない。

「でも、地球の人はいませんね」とアストラが言ったとおり、ここに生命体はないようだった。

「敵はどこにいるのか……」レオが注意深く空を見上げる。

「おかしい……何も感じないぞ」タロウも、あたりの異様な静けさに、わずかに焦燥の念を抱いていた。

その時、ビルが動いた。

「!？」

「ギ……ガ……」

「しまった! ビルが!」

突然、周囲のビルの窓が空き、そこから砲台が現れた。全ての砲門

が4人を狙っている。

「まずいつ、散れっ！」

レオが叫んだ瞬間、世界にはミサイルやビーム、火炎弾が飛び交った。4人はバラバラに逃げ、それぞれで防御技を張ってダメージを防ぐ。

「レオブレラ！」キングからかつて授かったマントを変形させた傘型の防具。

「アステカ・バリア！」火炎を発生させるアステカ・パワーを、全身を包み込むバリアにしたもの。アストラの技である。

「ハレーションミラー！」前方にバリアを張る80の技。

「オーラ・シールド！」タロウが超闘士のオーラを周囲に張り巡らせ、攻撃を防御した。

全員、上空に逃げていた。特にレオと80は前方しか守れないため、なるべく高く飛んでいた。

「ストリウム……超光波……ッ！」

タロウの開いた右手から、超強力な波動が飛ぶ。ビルを粉微塵に吹き飛ばし、消滅させていく。

「さすがですね、超闘士！」

「！」

突然上空から、じつとりとした慄慄な声が響き渡って来た。

「でたな……メフィラス！」

真つ黒な体に赤と黒の入り混じった、乱れた曲線の装飾目立つ装鉄鋼で胸を武装した宇宙人 闘士メフィラス星人がそこにいた。

「メフィラスさんを語ってウルトラ三大秘宝を奪って……許さないぞ！」

「ふふふそうですか。あなたはそれだけですか」

「？」

「かああっ！」

メフィラスの全身から、エネルギーの波動が放たれた。全員、それぞれの技で防御したが、その衝撃に地まで落ちてしまった。

「うぐあっ！」

80が背中を強く打った。その瞬間、突然のように現れたメフィラス星人のパンチが顔面に飛んできた。80は顔面を打たれ、地面に頭を打ち付け、倒れた。

「え、80！」

タロウが立ち上がった。同時にレオ兄弟が、『ウルトラ・ダブル・フラッシュャー』を放つ。

「くらえええっ！」

赤い閃光がメフィラス星人に向けて放たれる。メフィラス星人は、目を見開き、叫んだ。

「かあああああっ！」

その瞬間、メフィラス星人の全身を赤い光が包み込んだ。邪悪な闇の波動が。マイナスエネルギーによる『悪の超闘士』の再臨であった。

「ふあっはあああ！」

メフィラス星人が一喝すると、レオ兄弟の光線はバラバラに砕け散り、消え去った。

「な……なんだって!？」

「そんな！」

「あの力……一体、なんだ!？」

「ほは……っ!」

メフィラスが飛んだ。そして、レオとアストラに向けて右手を開く。右手で、拳を握り真っ直ぐに伸ばした左腕を支えるように持つ。

「グリップビーム！」

「アストラ、危ないっ！」

レオは、すぐ前に立っていたアストラを右に弾き飛ばした。アストラはタロウに受け止められたが、レオは強力な光線をともに浴びてしまった。

「ぐあああああ……っ！」

「兄さん！」

「くっ！」

タロウがアストラをおろし、メフィラス星人へ飛び込んだ。

「このっ！」

タロウのパンチがメフィラス星人を襲う。

「ふんっ！」

メフィラス星人は、そのパンチをかわし、タロウの全身を抱えた。そして、ビルの残骸に向けて投げ飛ばす。

「うわっ！」

おそろしい勢いで瓦礫と衝突したタロウ。すぐに立ち上がったが、ダメージは確かにある。

「うおおおおっ！」

アストラが、メフィラス星人相手に格闘戦を仕掛けた。両手両足を炎で包む『アステカ・パワー』を発揮し、敵を殴りつける。

「ていつ！ そりゃっ！ はあっ！」

「ふう、甘いですね……」

メフィラス星人は軽くあしらうように、ちょいちょいと手を出して防御していた。

そこに、タロウが後ろから、光線を放った。

「ブルーレーザー！」

角から出す青い光線である。メフィラス星人はそれを预期していたかのように、ジャンプでかわした。

しかし、それさえ预期していた男が居た。レオだ。

「エイ、ヤー……」

レオキックだった。レオの右足が赤熱化し、跳び上がったメフィラス星人の腹を蹴りおろした。

「ぐふっ！」

「よし……っ!?」レオの表情が、固まった。

「今だっ！」

レオの体がメフィラス星人から離れた時、援護に現れたジョーニアスが叫んだ。彼に起こされた80も、横にいる。

「プラニウム・ハリケーン！」

ジョーニアスのエネルギーが竜巻の形になり、メフィラス星人へと飛んでいく。

「ダブルバックルビーム！」

80の胸の超鏡クリスタルと腹部のウルトラバックルから、同時に光線が飛び出す。

「攻撃だあああっ！」

すぐ目の前の敵に向けてアストラのビームランプからエレクトロン・ビームが飛び出し、タロウもストリウム光線を放った。

「うぐうつ！」

爆発が起きた。タロウはメフィラス星人が確かに攻撃を受けた事を感じていた。そしてさらに、ジョーニアスは、両肩の超鏡クリスタルにエネルギーを溜め、一撃を放つ。

「スーパーロッキングスパーク！」

爆発が鳴りやむ頃、さらに爆発が起きた。爆風でビルの瓦礫が一気に飛び去って行った。

「どうだ……？」

その時、レオが突然、アストラを蹴り飛ばした。

「うわあっ！」

「な……なんだ！？」

「に、にいさん、どうして……！？」

「こういうことですよっ！」

爆炎の中から、メフィラスが飛び出した。殆どダメージも受けていない状態で、オーラと煙を身にまとい、アストラの顔面を掴んだ。

「うあああああ……っ！」

「アストラ！ まずい！」

ジョーニアスが叫ぶ。その時タロウは感じ取っていた。アストラの体の中に、悪の気が充ちていくことに。

「まさか……」

「うがああああ……っ！」

メフィラス星人が手を離す頃、アストラは殺意に満ちた目で、タロウら三人を睨みつけた。

「これは……どうしたことだ……」と80。

「ウルトラ・ダブル・フラッシュャー！」

赤い閃光が三人を襲う。三人は飛んでかわしたが、爆炎が飛び散り、80が爆発に巻き込まれた。

「うっ！」

「80！」

タロウが叫ぶのよりも早く、80の目の前にメフィラス星人が現れた。

「悪の気を受けよ！」

メフィラスの体を包む邪悪なエネルギーは、エネルギーを吸い尽くすゴースト細胞や生命活動を一発で止める魔神の絶命光線をも無力と化す重装鉄鋼でも防ぐことはできなかった。次の瞬間には、80はタロウに向けてサクシウム光線を放ったのだった。

黄金の角

「シューティングビーム！」

「エレクトロンビーム！」

「アストロビーム！」

「スパイラルビーム！」

メフィラス星人に操られたレオ、アストラ、80、ジョーニアスの4人が、タロウに向けて光線を放つ。

「みんな！ 目を覚ましてくれ！」

空を飛びまわりながら、仲間達が光線を放ってくる。タロウも飛びまわりながらそれを避ける。

そこに、メフィラス星人の放った光弾が命中する。

「うわあああつ！」

「ほれほれ、私からも目を離してはいけませんよ」

「ひきよう……ものめっ」

タロウが吐き出すようにそう言うと、メフィラス星人は笑う。

「ふふふ、5対1で掛かって来ておきながら……ふんっ！」

メフィラス星人が拳をそろえて腕を前に伸ばし、光線を放つ。

「ベアハンド光線！」

「うわっ！」

タロウの腹を光線がかすめた。そこに、レオが飛んでくる。

「だあああああつ！」

強烈なチョップがタロウを襲う。タロウは腕でガードしたが、ひざ蹴りをくらってしまふ。

「ぐっ！」

「やあああつ！」

そこに、後ろからアストラのパンチも飛んできた。後頭部を打たれるタロウ。

「あつ！」

「だあああつ！」

「レオっ！」

レオが、タロウをかばって光線を浴び、再び倒れた。

「レオ、レオオッ！」

メフィラスの支配が弱かったのか、レオの精神力が強かったのか、はたまた先の爆発のショックで元に戻れたのか……それは分らない。レオは、動かなくなった。

「ゆるさない……ゆるさないぞ、メフィラス星人！」

タロウが立ち上がった。怒りに震えている。黄金の角がガラガラと輝く。

「ほほう、目つきが変わりましたね……しかし、ジョーニースさんと80さんを相手にしても、その怒りを叩きつける事が出来ますかね」

80とジョーニースが、メフィラス星人を守るように前に出る。

「その二人は……光の戦士だ！」

「！ その声は……！」

メフィラスの真後ろから、二条の光が飛んできた。金色の光だった。「ぬうつっ！？」

そしてその光は、80とジョーニースを包み込んだ。

「悪の気が……消えていく！」

80とジョーニースの悪の気が消えていくのを感じるタロウ。メフィラス星人もそれを感じ取ったのか、いきなり二人を殴りつけた。「あっ！」

二人は、地面に落ちた。そして、やはりそのまま動かなくなった。

「使えぬのならば要らぬわあ！ ゴミめが！」

メフィラスは激昂していた。そして、後ろを見る。

「誰だか分かっているぞ！ 出てこい！」

「あ……やっぱりだ！ ウルトラマン！」

瓦礫の山を吹き飛ばし、現れるは金の鎧を身にまとい、頭の両側に黄金に輝く角をつけた、最強の戦士であった。

「闘士メフィラス星人……お前に勝ち目はない！」

メフィラス星人は、悔しそうに叫んだ。

「この……二人の超闘士だと……！ おのれ、おのれえっ！」

ウルトラマンが、静かに言った。

「勘違いするなメフィラス星人。お前に私と戦う資格はない」

「なにっ!？」

「えっ」

タロウとメフィラスが同時に声を漏らした。

「タロウ、頼むぞ。正義の光を見せてやれ」

「う、ウルトラマン……戦わないんですか？」とタロウ。

「ああ、お前なら十分に勝てる」ウルトラマンは頷いた。

「……はいっ！」

ウルトラマンの言った通りだった。タロウは圧倒的なパワーでメフィラス星人を叩きのめした。鎧を砕き、オーラを突き破り、腹を打ち、頭を撃ち……メフィラス星人は、驚愕していた。先ほどまでのように悪の気を流し込む技も、超闘士のオーラに疎外され不能であった。

「しかし、まだまだ……終わりはしないぞっ！」

ぼぐっ、という音と共に顔を蹴り飛ばされた。地面に叩きつけられた。

（ぐうううう、なぜだっ、なぜ……やはり、ダークフレスター……！）

メフィラス星人が悪の超闘士となったその源は、暗黒鎧闘士とそれに操られた宇宙人・怪獣らの絶望などのマイナスエネルギーである。しかしそんな中、唯一絶望せずに消滅したものが居た。ダークースである。彼は、ウルトラの父との決闘を戦い、満足して消えていった。そのために、エネルギーが不足してしまったのだった。

（おのれダーカースめ……あと一つ、あと一人分の絶望があれば……）

タロウのパンチが、顔面を襲った瞬間だった。

（もう だ め だ ……）

絶望が舞い降りた。メフィラス星人自身の絶望。マイナスエネルギーが、吹き荒れた。

「う、おおおおおおお！？」

「な……なんだと！？」

「凄い悪のパワーだ！」

「か……完成だああああっ！」

メフィラス星人の拳が、タロウの顔面を捉えた。タロウは後ろに吹っ飛び、あおむけに倒れた。

「くっ！」

「立ちあがらせはしない！ ベアハンド光線！」

「うああっ！」

「グリップビーム！」

「っ！」

タロウは横に跳び、光線を逃れた。

「ベアハンド……超光波……！……！……！」

強力な光波がタロウを襲う。先ほどよりもはるかに強力な、超絶的なエネルギーが空を切る。

「この……負けないぞっ！」

タロウも構えた。右手を敵に向けて開く。

「ストリウム……超光波……！……！……！……！……！」

二つの光波がぶつかり合った。触れれば一瞬で吹き飛んでしまいそうなエネルギーがスパークし、あたりを照らした。傍で見ているウルトラマンも、激しさを感じていた。

「発射が遅れたタロウが不利か……！」

その通りになった。タロウが二つの超光波のエネルギーに巻き込まれた。勝ち誇るメフィラス。光波が過ぎ去ったその空間には、大きくぼみができ、何も残っていないかった。

「さあ……あとは、あなたですよ、ウルトラマン。超闘士の二人抜きとさせていただき……」

ウルトラマンは、メフィラスを見るだけで、何もしない。

「まだだっ！」

「!？」

ボロボロの状態のタロウが、しがみついていた。

「な……離れるッ！ 何をする気だ……まさか……！」

「ウルトラダイナマイトはやらない。コスモミラクル光線ももう使えない。でも、これ位は出来る……」

「な……なんだっ!？」

「残ったエネルギーを全部拳に込めて！ お前の顔面から全身にながしこんでやるんだっ！」

「雑魚があ！ そんな単純な手段で私がやられるか！ エネルギーを放出して吹き飛ばして……」

「だああっ！」

メフィラス星人がエネルギーを放出した。タロウは吹き飛びながら、敵に当てるはずだった拳を振った。拳から大量の閃光がほとばしり、地面を焼いた。

「はーははははっ！ とどめだ！ ベアハンド……がっ!？」

メフィラス星人の腹に、黄金に輝く二本の角が、突き刺さっていた。「拳は囷だ……」

タロウの角が、槍のように長く伸び、メフィラス星人を貫いたのだ。つた。

「ぐふう……バカな！」

「これで終わりだ……ぼくの全てのエネルギー！ くらえ……」

-
-
-
-
-
-

「ぎあああああああ！」

苦しみにもがきながら、消滅した。

皇帝宇宙人 エンペラ星人

暗黒と静寂に支配された空間……ダークネスファイアの最深部。『彼』はそこに一人、佇んでいた。

「死んだか……四天王。死んだか……余、以外」

『彼』は目を閉じていた。金色に輝く装鉄鋼の中で、目を閉ざし両腕を広げていた。

「死ぬのだな……余、以外のすべて」

「そこまでだ、エンペラ星人！」

『彼』の前に、一人の男が現れた。ウルトラマンゼアスだ。

「お前か……」

『彼』の目が開いた。静かだった。

「太陽神様の命、そして宇宙の平和のためッ、お前を倒す！」

ゼアスが飛びかかった。『彼』は何もしない。

「はっ！」

ゼアスのパンチが、顔面にぶつかった。顔を覆う装鉄鋼が砕け散る。

「……っ！」

ゼアスの拳にダメージがあった。『彼』そのものは、何も感じていない。涼しい貌がそこにあった。

「クロスペシユツシユラ光線！」

ゼアスは両腕を×字にクロスし、『彼』の胸を撃った。

「……」

『彼』の体を覆う金色の鎧が、弾け飛んだ。しかし、『彼』は動かない。

「新しい鎧を……」

どこからともなく、ウルトラキー、ミラー、ベルの三大秘宝が現れた。それらがすべて闇の力で染め上げられている事を感じ取ったゼ

アスは距離をとり、光の玉を手から発した。

「太陽の棺……現れよ！」

光の玉はゼアスと同じくらいの大きさに変わり、そして棺となった。太陽神からの授かりもの、太陽の棺である。

「これにはウルトラクロスのもつ、光の力を取り戻す効果がある！」

これでお前に使うことはできなくなるぞ！」

太陽の棺が開き、三大秘宝を吸い込んだ。しかし、『彼』は何もしない。そして、『彼』は言った。

「なら、お前が着けてみれば良い」

「言われなくても……！」

太陽の棺が、バラバラに砕けた。そして中から、5つの鎧が現れる。「！？」ゼアスが、驚いた表情を見せた。

中心にカラータイマーを思わせる宝玉の取り付けられた、胸と肩を覆う鎧。

それぞれに三つの小さな突起の付いた、腕を守る鎧。

そして、鋭い爪を思わせる鋭利な両脚の鎧。

それらが、ゼアスに装着された。しかし、ゼアスの表情は強張っていた。

「こ……これは……え、エネルギーが！？」

ゼアスの体内にある光のエネルギーが、闇のエネルギーへと変わっていく。

「う、ぐあああ……ま、まさかつ、太陽の棺も……」

「そうだ。ウルトラクロスは闇に染まり……そして、光を闇に染める」

「な、なんだとっ！？」

「覚えていないか？ ウルトラベル……」

「！ あああっ！」

そう。グレイテストキングの力で闇に染まったウルトラベルは、光の力を闇へと変えた。太陽の棺も、ウルトラマンゼアスも、その力でエネルギーを闇へと変えられた。そして、『彼』に吸われていっ

たのである。

「光のエネルギーを失えば、太陽の棺とやらはただの箱……どうやら普通なら砕けないようだな。お前の反応から察するに」

「く、うつつう……うああああっ！」

ウルトラマンゼアスのエネルギーが、吸収されていく。絶望に変わっていく心も、『彼』のエネルギーと化す。力も心も吸われ、ゼアスは枯れていった。

「エンペラ星人！ ついにここまで来たぞ！」

ウルトラマン達がその場に現れた頃には、ゼアスは枯れ切り、エンペラ星人の肉体は、最強の鎧ウルトラクロスに包まれていた。

「ぜ、ゼアスが！」エースが叫んだ。ゼアスはしなびたようにやつれ果て、死んだように動かず暗黒の空間をただただ漂っていた。

「ふうん……」

エンペラ星人が戦士達を見やった。そこにいたのは、

超闘士ウルトラマン

守護闘士ウルトラセブン

守護闘士ウルトラマンエース

エースキラース

闘士ゼットン

ウルトラマンヒカリ

の6人だけだった。他は四天王との戦いで力を失い、倒れて行った

のだった。

「他の……最初の大広間で戦っている連中も、お前らの仲間には倒されていよう。そして、その『お前らの仲間』も、ダメージによってもうここまで来ることはいないだろう」
エンペラ星人が、動いた。

「事実上の、最終決戦だ」

邪悪な波動が、動き始めた。

重波動とレゾリウム光線

「……」

エンペラ星人は何も言わずに、ただ念を込めた。そうしただけで、ヒカリが強烈な波動に飲まれ倒れた。

「ひ、ヒカリ！」

「……！」

驚愕の表情を浮かべ、ヒカリはそのまま気絶。エースはエンペラ星人に振り向き、歯を食いしばった。

「てんめええ、くらいやがれっ！」

そう言つてL字型に組んだ腕から、メタリウム光線を発する。

「……」

しかし、それはエンペラ星人に届くことはなかった。波動に押しつぶされ、エース自身が意識を消失したからである。

「え、エースが……何だあの技は！？」とエースキラー。

「重波動だ！ 奴は重波動を操れるんだ！」セブンが、敵の動きに気を配りつつ、答える。

「なんだと……！」

「その通りだ」

エンペラ星人が、再び念を込める。またしても誰かを波動の餌食にしようとしたのだろう。しかし、その攻撃は、ウルトラマンのパンチによって阻まれた。

「……力を上げたか」

エンペラ星人の体が、ボールのように弾んでから、頭から落ちた。しかしその表情は何も変わらず涼しいままである。

「これ以上、仲間をやらせはしないっ！」

ウルトラマンが、両手にスペシウムエネルギーをためる。

「くらえっ！」

「おおっ」

ウルトラマンは仰向けになったエンペラ星人に馬乗りになって、強烈な拳を エネルギーを纏った強烈な拳を、連続で叩きつけた。
「スペシウムアタックの連打…… スペシウムラッシュだ！」セブ
ンが叫ぶ。

「い、今のうちにエース達を下げとこうぜ」

エースキラーとゼットンが、傷ついた仲間を自分らの後ろへと下げた。

「うおおおおおお……！」

ウルトラマンの光の拳が、エンペラ星人の顔面を歪める。

「なぜだ……なぜ反撃しない！」

撃たれるままのエンペラ星人に、ウルトラマンは焦燥する。

「それだよ、それ……」

っ！？ ウルトラマンが、一瞬止まった。

その時だった。エンペラ星人の手がするりと伸びて、ウルトラマンの顔面を鷲掴みにしたのは。

「うぐああっ！」

「！」

「その顔だよ……」

顔をつかまれたまま、ウルトラマンは持ち上げられた。ふいに手が離れたと思うと、その目の前にはエンペラ星人の恐ろしい膝があった。

「っ！ あっ！」

顔じゅうに罅が入ったような気持ちになった。あまりの痛さに、ウルトラマンは何もできずに下へ落ちた。

「……お前のその顔が余を強くする……」

うつ伏せに倒れるウルトラマンを足元にしたエンペラ星人の顔は、相変わらず涼しかった。彼は右手を軽く挙げ、空いた掌に赤い光の玉を生み出していた。

「あれは……レゾリウム光線！？」

レゾリウム光線……純粋なウルトラ戦士を消滅させる驚異の技。

セブンはそれに気づき、走った。

「まてっセブン！」エースキラーが叫ぶが、セブンは止まろうとしない。

「はあああ……ッ」

エンペラ星人が、右手を振り下ろすと同時に、セブンは、ウルトラマンを突き飛ばした。

「ぐあ……」

「せ……セブーーーーン！」

爆発は起きなかった。ただ、静かに音がする。消えていく音が。

そう、ゼットンの胸の中に、レゾリウム光線が消えていく音が。

「なんだと……ゼットン？」

「そうさあつ！ 装鉄鋼は吹っ飛んじまったけどなあ……エネルギーの吸収能力が現れるんだよお！」

ゼットンの能力が幸いした。テレポーターションでセブンの前に現れ、そしてエネルギー吸収能力でレゾリウム光線を吸い取ったのだった。

「M87光線！」

「ぬっ！」

エースキラーの一撃が、エンペラ星人の横顔に命中する。

「今だゼットン！ やれえっ！」

「おおっ！」

ゼットンの手から波状光線が放たれる。それはエンペラ星人に直撃し、爆発を起こす。しかし、聞こえて来たのは笑い声。

「ははは……ウルトラクロスは強いなあ」

「はっ！」

逃げる間もなくゼットンは、エンペラ星人の右腕に突かれ気絶した。エースキラーも次の攻撃に転じようとした瞬間、重波動に飲まれ肉体を潰された。

「な……なんてことを……！」

セブんとウルトラマンは、立ちあがりながら言った。敵に向かって

構えるが、どう動くか考えあぐねていた。

「……こないな」

「……く」

セブンが震えたその時だった。

「セブン。一人で闘わせてくれないか」

ウルトラマンが、そう言った。

「なに！？」

「今のこいつと戦えるのは、私だけだ」

「そんな……いや、そうだな。俺たちは足を引つ張るだけか……」

「どうした？ 作戦タイムか？ おもしろくしてくれる事を願うぞ」

「そんな必要はないっ！」

涼しい貌のエンペラ星人に熱い魂を向け、ウルトラマンが跳んだ。

「たあっ！」

放ったのは、八つ裂き光輪。それも6発。様々な包囲からエンペラ星人に向けて飛ばされる。

「ふんっ！」

それらすべてが、重波動に消し潰された。しかし、エンペラ星人自身も分かっていたことだが、彼の真正面から、ウルトラマンが飛び込んで来ている。

「はああああ……！」

ウルトラマンはテレパシーで、セブンが仲間達を連れて遠くへ離れている事を確認しつつ、エンペラ星人にスラッシュ光線を放った。

「連射弾か。効果はないぞ！」

スラッシュ光線はエンペラ星人の体に当たると、粉々になって消滅する。それと同時に、ウルトラマンの右足とエンペラ星人の左腕が、激突した。

「はっ！」

ウルトラマンの左拳が、エンペラ星人の頭上から撃ちおろされる。エンペラ星人は一步下がってそれをよけ、素早く頭を前に発してウルトラマンの顔面にそれを打ち当てた。頭突きだ。

「く……はあっ！」

ウルトラマンの目から、激しい光が飛んだ。その光はエンペラ星人の目にそのまま入り、目をくらませた。

「う……ぐ」

エンペラ星人の表情が、初めて本当に歪んだ。

「でやああー……っ！」

ひざ蹴り。エンペラ星人の顔面を、全力で蹴り上げる。

「はあっ！」

強烈なチョップを打ちおろす。エンペラ星人は脳天を強く叩かれ、下を向いた。

「喰らえ……シュワッチ！」

スペシウム光線。両手を十字に組み、下を向いたエンペラ星人の脳天に帯状の光を放ち、吹き飛ばした。

「ぐああっ！」

はじき出されたように、エンペラ星人は跳び、どこともなく打ち当り、空中で体勢を直した。ウルトラマンのいる場所を、向いたと思った。しかし、その声は後ろから聞こえた。

「後ろだ」

「おおっ！」

必殺のスペシウム超光波。黄金に光る光の波が、エンペラ星人の背中に向けて放たれる。

「くっ！ が……」

「はあー……っ！……っ！……っ！……っ！……っ！」

エンペラ星人は、光の波に包み込まれ、闇の世界を飛んで行った。

それからほんの数瞬、エンペラ星人は横たわっていた。

「うおおおお……正直、ここまでとは思わなかったぞウルトラマン……」

ウルトラマンの一撃をくらったエンペラ星人が、立ち上がりながら言う。

「……」

ウルトラマンは戦慄した。自らの最大の一撃に、耐えきったエンペラ星人の強さに。

エンペラ星人が、腕を振り上げた。

「っ！」

ウルトラマンが構えるが、腕の振りはカモフラージュ。ウルトラマンの背中に、強い衝撃が走った。そう、重波動だ。

「ぐうっ！　またこの技か……」

「消える」

先に振り上げていた腕が真っ直ぐウルトラマンを向き、その先端手が、ぴしりと開く。レゾリウム光線だ。黒きにして赤く燃え上がる閃光が、ウルトラマンへと真っ直ぐに駆ける。触れれば消滅する、最悪の光。

「スペシウム……超光波っ！」

すんでのところでウルトラマンは、スペシウム超光波で相殺した。その爆発にまぎれて飛び込んできた、エンペラ星人の拳を右腕で受ける。

「くっ！　このパワー……」

「お前こそ……素敵な強さをありがとう」

エンペラ星人の涼しい目から、二筋の光が飛んだ。ウルトラマンはそれに破壊の能力がある事を察知し、ウルトラクラウンから発するオーラでそれをかき消した。続いて飛んでくるエンペラ星人の足を、自らの足で受け止め、左拳を放つ。

「おっ」

当たった。エンペラ星人の頬が凹む。そのままウルトラマンは、次の右拳を敵の腹に打ち込んだ。敵の体がくの字に曲がり、隙だらけに。

「八つ裂き光輪！」

ウルトラマンは躊躇なく、敵の首に向けて八つ裂き光輪を落とした。それを察知していたのか、重波動がその空間を潰し、八つ裂き光輪

を砕いた。

（重波動は防御にも使えるのか……）

その瞬間、重波動が、ウルトラマンの全身を包み込んだ。

「……つぶれろっ」

嫌な音がした。空間がつぶれる音。エンペラ星人が一步下がって顔を上げる。

しかし、ウルトラマンはつぶれていなかった。全身を黄金のオーラで包み、身を守ったのだ。

「結局は物理的な一撃だ。それ以上の力を持つてすれば、防げる」

「はは……面白いじゃないか」

エンペラ星人の手から、レゾリウム光線が放たれた。

もうひとつの奇跡

エンペラ星人の手から発されたのは、ただのレザリウム光線ではなかった。戦いながら体内に蓄積されていた強大なエネルギーを、全て開放したものだ。たつた。

ギガレゾリウム光線。

「はあぁー……………っ！」

ウルトラ戦士を消滅させるレゾリウム光線だが、普通の破壊光線としての能力も非常に恐ろしいものがある。それをさらに高めて発射すれば、超闘士のオーラを破って装鉄鋼を破壊し、ウルトラマンを消し去る事が出来ると、そう考えていた。そして、ウルトラマンも同じ事を考え、全力でそれをかわした。

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

エンペラ星人は、ウルトラマンの逃げた方向へ超速で飛んだ。そして追いつくと、強靱な肘を頭に落とした。

「ぐっ！」

さらに連打。脚や腕が何度も行き来してウルトラマンを傷つける。

「負けは……しない！」

ウルトラマンの拳が、再び動いた。互いの拳が互いの肉体に次々と打ち当たり、苦痛を響かせる。肉が唸り骨が軋み、装鉄鋼が割れていく。

ウルトラクロスは傷つかない。

「なにしろ、ウルトラミラーの防御力だものなあ」

「ならば、直接当てるっ！」

ウルトラマンの拳が、エンペラ星人の顔面に直撃した。ただの拳ではなかった。短い時間で考えた、最高の一打だった。

まず、ウルトラクロスの能力。ウルトラキーのエネルギー波に、ウ

ルトラミラーの防御力。そして、ウルトラベルの、現在は光を闇に変える力。これによって、次の瞬間にはウルトラマンはエネルギーを闇に変換され、つぶされてしまうかもしれない。そこで、拳の周りだけオーラを消し去った。ただ消し去ったのではなく、体内の光エネルギー共々、右拳の強化に使ったのだ。超闘士のパワーを拳に集中してかつてない強化を図り、恐ろしく単純で純粹、強力な一撃を作り出したのだ。エンペラ星人の顔が、大きく凹み歪んだ。

「あは……っ」

エンペラ星人の両手が、ウルトラマンの右手を掴んだ。

「こんなチャンスがすぐ来るなんて……」

「何をする気だ！」

「ギガレゾリウム光線……」

ウルトラマンの表情が、凍りついた。

オーラも張っていない状態で、零距离からのギガレゾリウム光線。何を考える暇もなく、ウルトラマンの心は絶望に打ちひしがれた。

衝撃が、走った。

ウルトラマン消滅の衝撃ではなかった。エンペラ星人の肉体が、右方向へ吹き飛ばされていたから起きた衝撃だった。

「ぐ……だれだ!？」

エンペラ星人が、その男を見て叫んだ。

「なに……ああっ!？」

ウルトラマンも同じ方向を見た。そして、目を疑った。

「それでもウルトラマンか……」

その男は、ウルトラマンを見てそう言った。

「おまえ……」

震えるウルトラマン。あまりの嬉しさに、戦いを忘れ構えも解いた。

「お前は不死身だ……絶対に負けない……真の最強戦士だ……」

大魔王の、帰還だった。黒き肉体を持ち、白と青の鎧に身を包んだ、最強の戦士。

「メフィラス大魔王ッ！……！！！」

セブンが叫んだ。彼もまた、ウルトラマンの危機を見過ごせず、やってきたところだったのだ。

「お前、どうして……」

「ジェロニモンの復活能力だ。奴は、怪獣墓場で眠っていた者達を誰彼構わず生き返らせていたからな。しかし、知っての通り復活した俺の力は中途半端。助けにならんと思って、一緒に復活した……かつて俺が滅ぼしたメフィラス星の奴らの力を借りて、強力なエネルギーを宿すこの鎧を造ったと言う訳だ」

メフィラス星の言語か、文字のようなものが刻まれた装鉄鋼とも違ったこの鎧で、メフィラスは徐々に力を取り戻している。やがてはこの鎧のエネルギーを全て吸い尽くし、元々のメフィラス以上の強さになれるらしい。

「そうだったのか……良かった……ほんとに……」

その瞬間、メフィラスの怒号が飛んだ。

「バカヤロオツ！　いつまでも泣いている場合かつ！　相変わらず甘いヤロウだぜっ！　涙を拭けッ！」

「……すまん」

ウルトラマンは涙を拭って、エンペラ星人のほうを向いた。

「もう……絶望しないぞ。お前の思い通りには、させないっ！」

そして、二人は飛んだ。かつての戦いのように、息の合った拳が、エンペラ星人の体に打ち込まれ響き渡る。二人の膝が、エンペラ星人の頭をはさみこむ。強烈な膝蹴りのサンドイッチに、エンペラ星人の表情から余裕が消えた。

「メフィラス大魔王か……愚か者っ」

そう吐き捨てると同時に、エンペラ星人の両手から、先ほど撃ちそこなった分にさらにエネルギーがチャージされプラスされたギガレゾリウム光線が飛ぶ。目標はウルトラマンだ。

「アイスラッガー！」

「っ！？」

セブンが放ったアイスラッガーが、ギガレゾリウム光線の先端に命中し、その場で爆発させた。エンペラ星人は意外な敵の行動に、奇怪な声を発した。

「いまだっ！」

ウルトラマンとメフィラスの同時キックが炸裂。エンペラ星人は顔面が凹んだ状態で、闇の中を跳ねた。

「くふっ！ ごふあ……」

「たあーーーーーっ！」

さらにそこへ、セブンのワイドショットが決まった。爆発に飲まれるエンペラ星人。

「早く撃てーーーーーッ！」

セブンが叫ぶと同時に、ウルトラマンはスペシウム超光波を、メフィラス大魔王は超魔光閃を放った。その二つの超エネルギー波は、エンペラ星人に間違いなく、命中した。

強烈な爆発が起き、爆風が吹きすさぶ。その中で、メフィラスは、ウルトラマンにヤプールブレスを渡した。プラズマエネルギーと直結している、転送装置だ。これがあれば、光のエネルギーが闇に染められた所で、補給される。

「これは……！ なんてお前が持っているんだ！？」

「グレイテストキングとの戦いのデータを見て、これを作った奴がメフィラス星に居たんだ。奴も同じ事をしてくるかもしれないと思っ
たらしい」

「ありがとう……何から何まで、助かった」

そのとき、エンペラ星人の笑い声が聞こえてきた。

「ははは……おもしろい」

「むっ！」

爆風の中で、姿の見えないエンペラ星人に向け、身構える戦士達。
「重波動だのレゾリウム光線だの、お遊び技しか使っていないのに

やられてしまつては全く面白くないじゃないか」

「お遊び、だつとよ」とメフィラス。

「なんであるうと戦うだけだつ！」ウルトラマンが叫ぶ。

「いくぞ……余の技見せてやる……メイトリクス・ダーク！」

真つ黒な渦が、周囲の黒をされに染めて、全てを包み込んだ。

「ぐ……ただの目くらましじゃねえ……！ 強烈な破壊の力だぜツ
！」

メフィラスが防御しながら叫ぶ。暗黒のエネルギーが嵐のように吹き、火山のように噴き、全てを打ち砕く。3人ともが、それぞれの居場所どころか、自分の居場所さえも見失った。

「メフィラス！ セブン！ ……はっ！」

目の前に、エンペラ星人の顔があつた。闇の中から飛び込んできたのは、エンペラ星人の顔だった。ただのエンペラ星人の顔じゃない。赤赤く燃え上がり血走った目、ブラックホールのように暗く歪んだ表情。これが始まりなのだと、そう感じた。そして 終わりと。

オーヴ・オブ・オール

エンペラ星人の両掌から生まれた、水晶玉のように艶やかに丸い物体は、ウルトラマンの体を貫き、闇となって堕ちていった。

闇に染まり消える光

「ウルトラマン！」

ウルトラマンが目覚めない。メフィラスの声が聞こえた気がしたが、闇の中へと体が溶けていく。ねっとりじっとりとした空間の中、心さえも闇に消えていった。

何をしているんだ、私は

何をしているのかもわからず、漂う。

誰なのだ、私は

自分が誰なのかもわからず、彷徨う。

全てが、消えた。

「消えてはいません。あなたは、生きているのです。闘士ウルトラマン」

「太陽神!？」

暖かい、女性の声だった。ウルトラマンが行き着いた先は、太陽神の御許。

「そうか……ヤプールプレス」

「あなたの肉体は今、危機的状态にあります。しかし魂は、ヤプールプレスで私の元へ来る事が出来たのです」

「ではわたしは……」

「死にはしません。私のエネルギーを持って肉体へと帰りなさい。キッと、元の姿へ戻ることが出来るでしょう」

「ありがとうございます、太陽神様」

「お礼はいりません。あなたは……いえ、あなた達は私の子。きつと、宇宙を光で満たしてくれることを」

目覚めると、そこは宇宙空間だった。夥しい数の命が、倒れていた。「これは……!?!」

「ダークネスフィアを壊してしまった。まあ、良いが」

「エンペラ星人」

ウルトラマンの前に立っていたのは、エンペラ星人だけだった。足元を見ると、メフィラスやタロウ、セブンに80が、意識を失い漂っている。

「お前がどうして生き返ったかは知らぬが、それまでの間に他の者は片付けておいた。もっとも、四天王らとの戦いで既に力尽きていたものもおったがな」

周囲を見ると、レッドキングやパワード、ネオスやベムスター、ゼットンにタロウが漂っているのが見えた。

「スターフェニックスはどうしたのだろっ……逃げおおせてくれるといいが」

そう呟いて、すぐに再びエンペラ星人を見た。

「行くぞ……エンペラ星人!」

ウルトラマンの拳が、エンペラ星人にむけて飛んだ。エンペラ星人はそれを同じく拳で受け止める。

「くっ!」

ウルトラマンの拳に、ダメージが。エンペラ星人は何事もなかったかのように、ダメージを受けなかったのか、左足を自らの敵の顔面に押し込んだ。

「っ」

言葉をうしなう一撃だった。それがダースで飛んでくる。

「はおおおお……」

ダースが増える。さらに増える。エンペラ星人の暴虐な蹴りが、何度もウルトラマンを打った。

「はっ！」

ウルトラマンがオーラを放出した。エンペラ星人が、吹っ飛ぶ。

「ちっ」

「スペシウム光線！」

光の帯が、エンペラ星人の顔面に浴びされた。

「があっ！」

エンペラ星人の手から放った光弾が、ウルトラマンに当たった。たじろぐウルトラマンに、さらにパンチを飛ばす。

ウルトラマンも負けじと蹴りを放つ。激しい攻防戦となった。雨あられと降り注ぐ互いの連撃。エンペラ星人が優勢となっていく。

「きえる……」

「消えはしない！ 私は仲間たちを守る！」

「ならば、これをくらえ！」

さつと後ろに下がったエンペラ星人。ウルトラクロスの胸の宝玉に、超強力なエネルギーを感じる。ウルトラキーの力だとそう解したウルトラマンは、両手に出来る限りのエネルギーを込め、エンペラ星人へと向かって飛び込んだ。

「何をする気か……死ねっ！」

光が放たれた。ウルトラキーの力が、もとの何百倍のエネルギーとなつて、ウルトラマンに向けて放たれた。ここで爆発すれば、周囲の仲間達も吹っ飛ぶ。ウルトラマンは、それを考え、出来る限り早く敵の元へ飛んだ。そして 放出されて間もないエネルギーを、手で受け止めた。

「なっ！？ 馬鹿な！」

「うおおおお……！」

ウルトラマンは、両手に込めたエネルギーを使い、掌にバリアーを張っていた。それによって、ウルトラキーのエネルギー波を受け止めたのだ。

「な……なんだと……」

「う お お お お お お」

ウルトラマンの手の中に、ウルトラキーの全てのエネルギーが握られた。エンペラ星人の顔が驚愕そのものにかわり、声も出ない。

「くえ……これが正義の力だ……」

「レゾリウム光線！」

敵の手から、赤と黒の閃光がほとばしった。ウルトラマンに向けて「それはお遊び技じゃなかったのか!？」

ウルトラキーのエネルギーはひとつの玉となり、宇宙空間を飛んだ。それはレゾリウム光線を軽々と打ち破り、エンペラ星人の肉体そのものに激突した。

ダークネス ジェ サイド

爆発が起きた。その爆発の中から、エネルギーの波が発され、ウルトラマンを包み込んだ。エンペラ星人は、まだ大技を隠し持っていたのだ。

ウルトラマンをすっぽりと包み込んだ闇のエネルギーは、ウルトラマンから肉体以外の全てを奪い去っていた。

「ぐ……う」

ウルトラマンを覆うものは、何もなかった。装鉄鋼もウルトラクラウンもヤプールブレス消え去り、右腕に巻いていたサラシも無い。ただボロボロなウルトラマンだけが、そこにいた。

「は……は……終わったか」

エンペラ星人も、ボロボロだった。しかし、ウルトラクロスは傷ついたものの、消え去ってはいないようだった。

「お前も、余のエネルギーに変えてやる……」

「ウルトラマン……」

「ん？」

エンペラ星人の耳に、誰かの声が聞こえた。
「誰だ」

「ウルトラマン……」

「ウルトラマン……」

「ウルトラマン……」

「ウルトラマン……」

「だれだ！」周囲を見て叫ぶエンペラ星人。しかし周囲には、傷つき倒れた戦士が浮かぶだけで誰もいない。

「ウルトラマン！」

「ウルトラマン！」

「ウルトラマン！」

「ウルトラマン！」

やがてその声は、さらに大きくなり、彼の心へとつながっていく。

ウルトラマン！

ウルトラマン！

ウルトラマン！

ウルトラマン！

「みんな……！」

仲間達の声　ウルトラマンを思う、仲間たちの声が、彼のもとへと届き、力となる。心は光の力となり、ウルトラマンの胸に輝く宝石の中に吸い込まれていく。やがて　それは、三つの線となり、星となる。

ウルトラマンの体が、金色に輝く。胸に輝く永遠の命が、さらにその力を究極へと高める。

「デルタスター……か」

「いくぞ……エンペラ星人！」

リンゴオン……デルタスターが、消えた。

「なんだと……！？」

ウルトラマンの顔が、戦慄したそれに変わる。そして体の色は黄金から、元の赤と銀の姿に戻る。

「馬鹿なやつ……光の力など、ウルトラベルの力で闇に変わって消滅してしまうのは解っていた事だろう。そして、お前の体内の光のエネルギーも同じだ。余裕は見せんぞ。全て闇に染めて一気に消してやる」

「……十分だ」

「何？」

「皆から貰った正義の心……それだけで十分、戦える」

ウルトラマンの目が、真っ直ぐエンペラ星人を見つめる。エンペラ星人は、一瞬戸惑ったが、すぐに表情を戻した。

「消えろ、馬鹿」

エンペラ星人はウルトラベルの力を使いつつも、ウルトラキーのエネルギーを再び溜めはじめた。

「くらえー！っ！」

どこに隠れていたのか、スターフェニックスがエンペラ星人めがけてビームを放つ。同時に、ウルトラマンが飛び掛った。

「ふん」

エンペラ星人はウルトラマンを軽くないしながら、超能力でスターフェニックスを吹き飛ばした。

「やめろっ！」

ウルトラマンの拳が、どうにかエンペラ星人に届いた。しかし、何のダメージも与えられず、逆にウルトラマン自身の手が砕けんばかりの痛みに襲われた。

「超闘士のエネルギーが高いせいか……なかなか闇に染まらないな」
エンペラ星人は余裕な表情を浮かべている。しかし、目は赤く燃えるように血走ったまま。そんなエンペラ星人を見ても、ウルトラマンは絶望せずに拳を放つ。

「うおおおっ！」

「ふん、阿呆め」

エンペラ星人の手がウルトラマンを払った瞬間だった。突然、ウルトラクロスが光を発した。

「ん……なんだ？」

ウルトラクロスのそれぞれが光となり、二つに分かれる。そしてそれは、ウルトラマンの体を包んだ。

「なんだと……！？」

光が消え去る頃、ウルトラマンの体は、エンペラ星人のものと同じウルトラクロスによって守られていた。

「これは……！？」

互いに驚くウルトラマンとエンペラ星人。そこに、キングが現われ

る。

「ウルトラマンの正義の心が……不屈の光の精神が、ウルトラクロスを呼び戻したのじゃ！」

その瞬間、キングは重波動に飲まれ倒れた。

「それだけ効けばもう十分だ……覚悟は良いな、ウルトラマン」

「ああ」

向き合った二人……その瞬間、ウルトラマンのウルトラクロスは、光の力を失い、闇となりエンペラ星人に吸収された。ウルトラベルの力によって。

「もとよりウルトラクロスは三大秘宝の能力を使うことは出来ない。闇の力に囚われている時のみ、世の意志によって発動する。其の為、お前がウルトラクロスを身に付けることは出来ないというわけだ」

「そうだな」

「……冷静だな。まだ、なにかあるのか」

「言った筈だ……私には、仲間からの正義の心だけで十分だな」
ウルトラマンのカラータイマーの周りから、小さな刺のような物が生えていた。

心の中の輝きを

「なんだ……心なんて、何の意味も無いじゃないか」

エンペラ星人の拳が、ウルトラマンの腹に深く深く入り込んでいた。血反吐を吐くウルトラマン。しかしその表情が全く静かであることを、エンペラ星人は気付かなかった。

「死ねよ」

右側頭部にエンペラ星人の左膝が叩き込まれた。言い様の無い衝撃の中、ウルトラマンは声も出さずに佇んでいる。

「消え去るか……レゾリウム光線で」

エンペラ星人の掌が、ウルトラマンの胸にぴたりと当たると、赤と黒の閃光がほとばしる。それに対して、ウルトラマンは初めて、動いた。

「……はあっ！」

真っ白な光が、レゾリウム光線を打ち飛ばした。

「おおっ、やっぱりやるか……死ね」

リングオン……ウルトラベルが、ウルトラマンの体内の光エネルギーを奪いにかかる。

しかし、何もおこらなかった。ウルトラマンは、ただそこに佇むだけ。

「どういうわけだ……ウルトラクロスが半分に割れたとき、何かおかしいことが起きたのか？」

「心だ」

ポツリと言葉を飛ばすウルトラマン。

「何？」

「これは心の力だ……」

ウルトラマンが、エンペラ星人を見据えた。いままでに見たことも無いような、優しさと力強さ、そして正義に満ちた顔で。

愛する人を思いやる心

弱い者を守りたいと願う心

皆の未来と幸せを想う心

悪に負けたくない、と感じる心

「それら全ての正義の心が、私の今の力なんだ！」

ウルトラマンの胸のカラータイマーから、デルタスターが解放された。これまでのデルタスターとは違う。三筋の光は刃のように鋭く尖り、神々しい輝きを放っている。そして三本の刃の間それぞれに、やや短い刃が1本ずつ、あわせて4本生えている。

「なんだこれは……これもデルタスターか？」

「いくぞ……っ」

ウルトラマンが一瞬の溜めをつくり、気合とともにになった瞬間、その体は再び黄金に輝く超闘士へ戻っていた。勿論、新しいデルタスターはそのままに。

「うおおおおおおおー………」

ウルトラマンの一撃が、エンペラ星人の顔面を捕らえた。これまで何度もエンペラ星人を捕らえてきたパンチを遥かに超える衝撃が、エンペラ星人を驚かせた。

「ぐふぁ……ッ」

「八つ裂き光輪！」

「ぎいっ！」

リングオン、とウルトラベルの力を使うエンペラ星人。しかしそれも空しく、八つ裂き光輪は、エンペラ星人の頭の角を一本切り落と

した。鋭い痛みにも、たじろぐエンペラ星人。

「く、ぐうつ、何故だ！ ウルトラベルは役立たずかつ！」

「言っただけだ。これは光の力ではない。心の力なんだ」

「なっ！」

激しい音と共に、再びエンペラ星人は顔面にパンチを食らった。吹き飛ばされた彼は、ダークネスファイアの破片に当たるまで止まらなかった。

「くふっ！」

驚愕し、戦慄するエンペラ星人。

「心の輝きだと……光の輝きと何が違うというんだ！ 同じように光っているではないか！ 違いなど何も！」

光の力も、闇の力も、突き詰めれば形の違うエネルギーでしかない。しかし、心の力は違う。純然とそこに在り続ける『実』である。エ

ンペラ星人はそれを理解できず、焦燥した。それでもエンペラ星人はすぐ、冷静さを取り戻した。ひとつの事に気付いたからだ。

「いや……問題は、ウルトラベルの力が無効化されただけ……よし」

エンペラ星人は、飛んでくるウルトラマンに向けて、先ほど放った闇の一撃、ダークネスジェサイドを再び使った。

「むっ！」

「くらえーーーーーっ！」

「デルタ・シャワー！」

ウルトラマンはデルタスターから、エネルギーを発した。それはダークネスジェサイドと激しくぶつかり合い、互いに消滅する。

「はあああああっ！」

エンペラ星人が飛んできた。ウルトラマンはエンペラ星人の拳を迎え撃つ。激しい連打戦になった。

「くおおおおっ！」

「ふあああああっ！」

二人の拳が互角に飛び交う。ウルトラクロスが砕けはじめるが、そんな事を構いもせずに、二人の激しい連打が続く。

「くらえ！」

ウルトラクロスの胸の宝玉から、ウルトラキーのエネルギーが放たれた。先のもの比べて力は半減したが、それはウルトラマンを強く叩き、吹き飛ばした。ウルトラクロスは、砕け散った。

「ぐは……っ！」

「そらああっ！」

エンペラ星人の拳が、カラータイマーを打った。ウルトラマンは苦悶の表情を上げたが、すぐに頭突きでエンペラ星人の胸を打ちのめした。

「くは……っ！」

「たあっ！」

連打戦がまた始まる。ウルトラマンの蹴りがエンペラ星人の顎を打ち抜き、エンペラ星人の打拳がウルトラマンの額を穿つ。打ち、弾き、守り、飛ばし。そして、それはいつしか光線の撃ち合いに変わっていた。

「ダークネルシャボイト！」

三発の闇の固まりが、宇宙を駆けウルトラマンに打ち当たる。

「スペシウム光線！」

心のエネルギーで作られた輝く帯が、宇宙を照らしエンペラ星人の右腕を弾いた。

「ビグスター・アドライブ！」

見かけはエンペラ星人が胸に抱える程度だが、巨大惑星と同じ質量をもつエネルギー弾が放たれる。

「スペシウム・アタック！」

右手に込めた超エネルギーを、敵のエネルギー弾に叩きつけるウルトラマン。エネルギーで言えばビグスター・アドライブの方が強力だったが、その拳そのものが揺るぐことなく打ち砕いてしまった。驚いたエンペラ星人の表情が、次の瞬間狂気に満ちて殺意を放つ。

「消えろっ！ 消えろウルトラマン！ お前は余にとって邪魔なだけだっ！ この世から消えろッ！」

さよなら私の超闘士激伝

エンペラ軍との大戦は、胸に『デルタハート』を輝かせた超闘士ウルトラマンらの活躍で幕を下ろした。

戦いによって受けた傷は太陽神によって治癒され、ヤプールの呼んだ『奇跡の援軍』らもそれぞれの世界へと帰り、敵の生き残りも全て捕らえたのであった。

宇宙。光と闇の同居する、広大な空間。

普段は平和な空間であるが、時として悪を生み世を乱す。

「必ず成敗しなくては……行くぞ！」

金色に光る鎧

メタルブレスト

ファイター

装鉄鋼を身に纏う最強の闘士、ウルトラマンが宇宙を駆ける。自ら『最凶闘士』を名乗るベムラー率いる武装集団が、

デスファイター

とある銀河の太陽を消し去ろうとしていたからだ。その太陽から発せられる特殊な物質を生み出せないようにして、自分たちの実験をしやすくしようと企んでいるらしい。

そこに、もう一人の男が飛んできた。黒い体に、蒼い装鉄鋼を着た、もう一人の最強戦士。

「待て、ウルトラマン！ 俺との決勝をぶち壊す気がっ！」

メフィラス大魔王である。今日は、何年振りかで行われた第4回銀河最強舞闘会の日で、決勝戦直前になってベムラーの企みを知らされたウルトラマンが、その瞬間には会場を飛びだしていたのだ。それを、決勝戦の相手であるメフィラス大魔王が追って来たのだった。「少しでも体力を減らされたら俺の勝ちにケチがつく！ そんな下らん奴らなど二人でとっと片付けるぞ！」

「ああ。必ず、決勝で闘おう！」

試合会場では、準決勝までの敗退者達が、疲れた顔で空を見上げていた。

「まったくよお、俺たちに任せてくれりゃいいのに……」口をとがらせるエース。

「メフィラスさんまで行っちゃって、戻るまで決勝出来ませんね」と笑うタロウ。

「仕方ないさ、ああいう奴らだ。……さて、俺も行くか」と、セブン。

「必要無いんじゃないでしょうかね？ あの二人なら」ゼアスが言った。

「油断は禁物ですよ。俺も行きます、セブン」握り拳を作るレオ。

そうして、何人かの闘士がウルトラマン達を援護するために飛んで行った。

そしてそれを見ながら、カネゴンが絶叫する。

「うおおおおお~~~~~！ おあずけか~~~~~！！」

ウルトラマンとメフィラスが、ベムラー軍の宇宙船に乗り込んでいた。

「発射を急げ！」

「はっ」

宇宙船内の、コンピュータの立ち並ぶ指令操作室において、『最凶闘士』ベムラーが部下の闘士ガラゴンや参謀クール星人に呼び掛ける。ベムラーの乗る宇宙船の主砲、『サンバーン・コア』は、太陽を完全消去する恐るべき力がある。そのエネルギーチャージ中に、ウルトラマン達が来たのである。

「たあっ！」

「ぐへっ」

ウルトラマンのパンチが、闘士シーグラを倒した。

「はあああつ！」

メフィラスの手から放たれた光波が、闘士クレッセントらの一団を吹き飛ばす。

「ぐあががああ……！」

さらに二人の攻勢が続く。

「八つ裂き光輪！」

「魔光乱弾！」

「スペシウム光線！」

「超魔光閃！」

「スペシウム・アタック！」

「超魔大光砲！」

これらの超強力必殺技を次々と受け、全ての敵はなすすべなくやられていったのだった。さらに、援護しに駆けつけたセブン、レオ、メビウス、バルタンの攻撃によって、ベムラーの宇宙船までもが激しい損傷を負っていく。ベムラーは顔を真っ青にしながら、慌ててガラゴンらに命令を下していた。

「ま、まだ終わらんのかあ！」

「し、しかしベムラー様、これではここで主砲を放ったところで我らの目的を達成できませんぞ！」とクール星人。

「そうです！ 逃げましょう！」ガラゴンも言う。

「ば、バカ者！ ここで逃げたら……あつ！」

ベムラーが慌てているところに、ウルトラマン達が来てしまった。

「ここまでだ！ ベムラー！」

「く……くそつ！ ガラゴン、いくぞつ！」

「い、いやだああつ！」

「クソめが！」

戦いを拒否したガラゴンの顔面に、ベムラーは手から光弾を放ち、額を貫き『処刑』した。

その瞬間、ウルトラマンとメフィラスが跳ぶ。

「許さんっ！」

「フンっ！」

「あ……がああっ！」

跳んでくる二人に向けて、ベムラーは口から青い光線を放つも、メフィラスに弾かれた。そしてその光線は流れ弾と化し、クール星人を討った。そしてウルトラマンはベムラーに詰め寄り、自らの手を敵の鎧に密着させる。

「とどめだっ！」

「ぐへええっ！」

スペシウム光線。青と白の光は、ベムラーの鎧を砕きベムラー本体を爆破し、消滅した。

「……よし、終わったな」ウルトラマンが、さわやかに笑った。

「いや……待て」

メフィラスが、モニターに表示された文字に気づいた。それを読むと、主砲が発射されたという。

「何だと……何の反動も無かったと言うのに……くっ！」

メフィラスが光線で機械を破壊したが、すでに発射された砲撃はどしようもない。テレパシーで外にいるセブン達に話を訊いてみたが、セブン達もどうすることもできずに、ものすごい速さで飛んで行ってしまったと言う。

「なんて事だ……だが、私には効かない！」

「ウルトラマン」

メフィラスがその名を呼び終わる前に、ウルトラマンはテレポーターションで消えていた。

「……フン」

ウルトラマンが、宇宙空間に現れた。この銀河の太陽と『サンバーン・コア』のエネルギー波の丁度間であった。

やがて、エネルギー波が見えてきた。真っ白な光だった。太陽を破壊し、光を消し去るために飛ぶ光。破壊の光を、ウルトラマンは真

っ直ぐに、その視線で受け止める。

「守るぞ……」

ウルトラマンが、構えた。右手を大きく開き、黄金のエネルギーを収束する。

「守るぞ、エンペラ星人。お前が何より欲した『希望』……暖かい光を。スペシウム……超光波——————！！！」

銀河の光は守られた。黄金に光輝く最強の戦士『ヒーロー』ウルトラマンによって。そして、これから。

超闘士激伝完結編、完。

さよなら私の超闘士激伝（後書き）

ついに終了いたしました。最後まで読んでいただきありがとうございます。

最後に色々と言らせていただきます。

まず、前回について。

デルタハートというのは、漫画の単行本6巻のOVA紹介に、ウルトラマンの新しい姿として描いてあったデルタスターらしき物に新しく設定を加えたものです（名前もオリジナル）。デルタスターとは明らかに形が違っているので、没デザインか強化版か、はたまたさらなる新形態なのかは解りませんが、ここで使わせていただくことにさせていただきます。

エンペラ星人のキャラクター設定については、「メビウス」における設定に私の独自の解釈をつけてこのようになりました。風格を持った皇帝、というよりは悲しみと怒りの狂戦士といった形になったのでは・・・と思っています。どのように書くのか決まっていたわけではなく、書いているうちにこうなっていきました（最も、キングがマンに彼の過去を話した時点で大体決まっていたのですが）。ちなみに、レゾリウム光線と重波動は「メビウス」からの技で、ギガレゾリウム光線は同じく「メビウス」の外伝にて登場した、意思を持った彼の鎧「アーモードダークネス」が使用しました。他はオリジナルです。

続いて、全体のストーリーについて。

ミスが多かった。初期の頃など「M78光線」と言う痛すぎる誤記や（誰かが改ざんしたんじゃないのかと思うほど）、一話丸まる消えてたことに後になって気付くなど（レオ兄弟対エンペラ海軍）、

ひどかったですね。お詫び申し上げます。

しかしストーリーの大筋は最初に決めた予定通りに進みました。

漫画でのエンペラ星人編に登場しなかったキャラクターや活躍の薄かった戦士に活躍の場を与えたい、スポットを当てたいと思い、暗黒四天王を出したりグランドキングらメガトンメタルモンスの3体を別々に戦わせたりしました。戦うキャラクターや順番も大体、予定通りに行きました。漫画に登場したサブキャラクターも、大体全員出し、出来るキャラは活躍できたと思います。

予定通りに行かなかったこともやありました。

ダイクフレスター

「暗黒鎧闘士」は書いている途中で考えましたし、メフィラス大魔王の再登場・復活も考えていませんでした。特にメフィラスは絶対に復活することはないとさえ、書く寸前まで思っていました。しかし、ジェロニモンが絶望を集めるために誰彼構わず復活させたのなら、復活していないはずはない……と、結局は登場してしまいましたけどね。

前述の通り、エンペラ星人のキャラクターにはそもそも予定がありませんでした。

パワードやジョーニース、終盤でのレオ兄弟の活躍が少なかったのは残念でした。ギガバーサークとヒキラーザウルスは何のために出たんだ感さえありました。まあこちらは、漫画のほうでもありませんたけど……（ガシャポンは出たけど、登場数コマで活躍なし）。元はギガバーサークとの戦いに「奇跡の援軍」登場……と思っていたのですが。

ラゴラスとグランゴン（マックス第一話に登場）も個人的には出してみたかったですね。

後は、やや趣味に走りすぎ、面白みにかける回があったのが反省点といったところでしょうか。あえてその回がいつだったかは言いませんが、勉強させていただきました。

最近について。なんと嬉しい事態が！ なんとなんと、ずいぶん前

に欲しいとあとがきしましたが、ガシャポンのフィギュアを20ほども購入することが出来たのです！

メタルプレスト エビルプレスト

ダブルプレスト

装鉄鋼に邪生鋼、多重装鉄鋼に金メッキのクロスタイプ！ 鎧伝のフルカラー品（ゼアス、ティガ、ベンゼン）も手に入り、活動に対して大変な励みになりました！！

さらに、マンやタロウ、メフィラス大魔王のフィギュアが出る予定があるらしい事が去年から伝わっているそう（エースキラーやゼロ、ベリアルも予定もあるとか）。上手くいけば漫画での続編、ガシャポンの復刻もあるかも！？ 楽しみですよね！

さて、お付き合いどうもありがとうございました。この素晴らしきウルトラの世界、超闘士の世界にほんの少しでも関われたこと、そして読者の皆様方に感謝します。

さよなら私の超闘士激伝。

2011年3月11日、津波警報轟く自宅にて、ウルトラマン超闘士激伝・完結編、完。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3127m/>

ウルトラマン超闘士激伝・完結編

2011年4月9日20時27分発行